

第136図 日区第52号住居跡出土遺物(2)

日区第52号住居跡出土遺物観察表(第135・136図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.8)	4.0	(5.2)	ABC	B	灰白	20%	No67 床面
2	坏	(12.0)	4.0		ABJ	A	灰	10%	No66 床面
3	碗	(14.0)	4.0		AB	C	灰黄	15%	No50 床面 全体に風化
4	碗		2.7	(7.0)	A	A	緑灰	35%	No22 覆土(+4cm) 白色針含まない
5	碗		3.1	6.2	ABJ	A	灰白	20%	No59 床面
6	高台碗		2.7	5.7	AB	C	灰白	80%	No46 覆土(+9cm)
7	甕				ABC	A	灰		覆土 内面自然釉付着
8	鉄釘								残長4.6cm 覆土(+14cm)
9	軒九瓦				ABC	A	灰白		No28 覆土(+8cm)
10	丸瓦				ABC	A	灰		No42 覆土(+4cm)
11	丸瓦				ABC	A	灰白		No53 覆土(+10cm)
12	丸瓦				ABC	B	淡黄		No29 床面
13	丸瓦				ABC	A	灰		No63 覆土(+18cm)
14	丸瓦				ABC	A	灰		No12 床面
15	丸瓦				ABC	A	灰白		No10 床面
16	丸瓦				ABC	A	灰白		No5, 44 覆土(+7cm)
17	丸瓦				ABC	A	灰白		No61 覆土(+18cm)
18	平瓦				ABC	C	淡黄		No25 覆土(+9cm)
19	平瓦				ABC	A	灰		No45 覆土(+6cm)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
20	平瓦				ABC	C	浅黄		No46 覆土(+10cm)
21	平瓦				ABC	A	赤灰		No47 覆土(+14cm)
22	平瓦				ABC	A	灰白		No24 覆土(+4cm)
23	平瓦				ABC	A	緑灰		No8 覆土(+9cm)
24	平瓦				ABC	A	灰白		No6 覆土(+12cm)
25	平瓦				ABC	C	にがい		No58 覆土(+7cm)
26	平瓦				ABC	A	灰白		No52 床面
27	平瓦				ABC	B	灰		No32 床面

#### B区第53号住居跡(第137図)

D-9・10区に位置する。第1号・第56号住居跡を切り、第54号住居跡に北西コーナー上面を切られる。また、第5・6・7号掘立柱建物跡に床面及びカマドを切られていた。第60号土塼との切り合い関係は不明である。形態は方形を呈し、規模は長軸5.66m、短軸5.46m、深さ20cm前後を測る。主軸方位はN-78°-Eを示す。

床面は概ね平坦である。覆土は基本的の上層(第1層)、下層(第2・3層)に分かれるが、変化は漸移的の下層ほどロームの混入が多く色調もやや明るくなる。

カマドは東壁に設けられていた。SB06の柱掘方と北に重複する浅いビットに大部分破壊され詳細は不明である。第I・II・IV層は天井部崩落土、III層が灰層か。袖は褐色粘土を用いて構築され、その大部分は崩壊していた(第V層)。

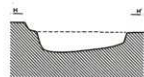
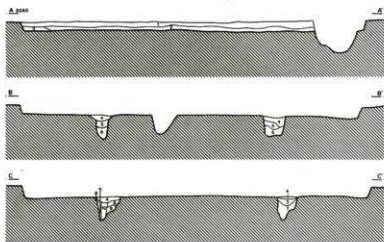
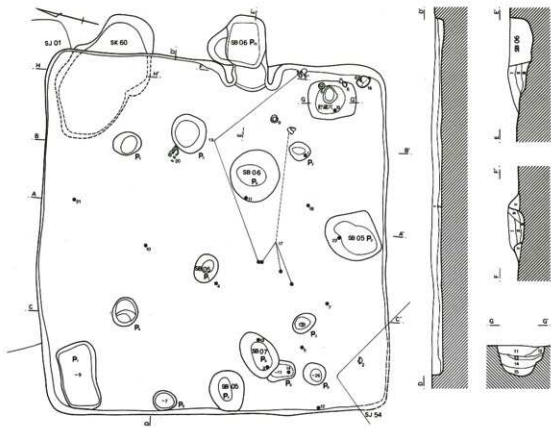
貯蔵穴はカマド南側のコーナー部に位置する。隅丸長方形プランを呈し、規模は長径76cm、短径62cm、深さ40cmを測る。全体に焼土・ローム・炭化物粒子の含有量が多い。

ビットは9本検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>が主柱穴に相当するものと考えられる。柱痕状の堆積はP<sub>4</sub>で確認されたが他は抜き取られたものと推定される。P<sub>5</sub>~P<sub>9</sub>は直接伴うものではないであろう。

出土遺物には土師器坏・甕・小形甕・鉢・壺、須恵器坏・蓋・甕・壺、白玉と鉄製刀子がある。重複の激しさを物語るように混入遺物も多い。特に須恵器の大半と土師器坏の一部は8世紀初頭頃のもので住居に直接伴うものとは考えられない。

第138図1は須恵器蓋で南壁付近の床面から出土した。小片からの復元のため口径と傾きにやや不安を残す口縁部を内湾気味におさめ、天井部との境に篋状工具による浅い沈線を巡らす。残存部に削りは見られない。胎土に短い白色針状物質が僅かに認められ、素地土の粗さから見て南比企産





カマド

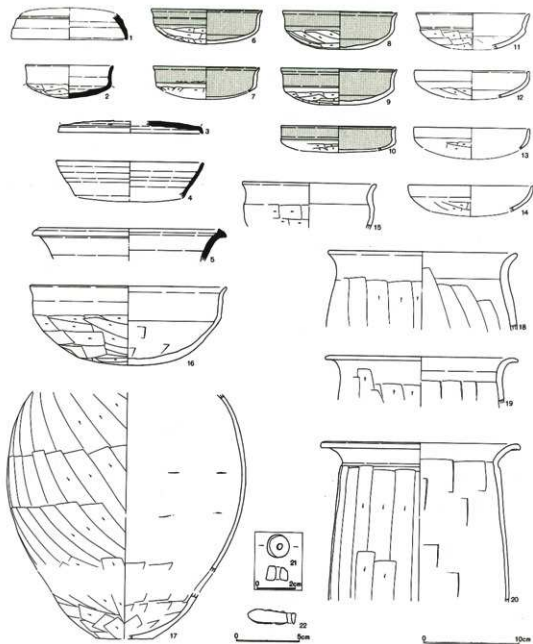
- I 褐色土  
ローム粒多量・焼土粒少量混入。
- II 暗褐色土  
灰褐色粘土ブロック・焼土ブロック少量混入。
- III 暗褐色土  
焼土粒多量・炭化物少量混入。
- IV 暗褐色土  
灰褐色粘土粒多量・焼土粒・炭化物少量混入。
- V 暗褐色土  
灰褐色粘土を主体とし、焼土とロームを混入する。

- 1 黒褐色土 ローム粒・焼土粒少量、炭化物炭化物微量混入。
- 2 明褐色土 ローム粒多量・炭化物少量、径2~3cm大のロームブロック混入。
- 3 暗褐色土 焼土粒・炭化物を少量混入する。
- 4 暗褐色土 ローム粒少量混入する。
- 5 暗褐色土 混入物なし、粘性が高い。
- 6 暗黒褐色土 ローム小ブロック混入。粘性が高い。
- 7 暗褐色土 小礫を多量に混入する。粘性が高い。
- 8 暗褐色土 ロームブロックを多量に混入する。
- 9 暗黒褐色土 ローム粒子を多量に混入する。
- 10 褐色土 ローム粒子を多量に混入する。
- 11 暗褐色土 焼土・ローム粒と炭化物を少量混入する。
- 12 暗褐色土 ローム粒子を極めて多量に混入する。
- 13 暗褐色土 焼土粒と炭化物を多量に混入する。
- 14 暗褐色土 少量の焼土粒と多量のローム粒子を混入する。
- 15 暗褐色土 ローム粒子と焼土粒を少量混入する。粘質。

0 2m

第137図 B区第53号住居跡

の可能性がある。2は極めて小形の坏で口径9.2cmを測る。底部は手持ちへラケズリ調整される。口縁部外面と内面はロクロナデが施されるが、底部内面中央部は平坦で渦巻き状の巻き上げ痕は見られない。白色針状物質が多く含まれ南比企産と考えられる。口唇部と底部外面はかなり磨滅している。出土位置は南西コーナー部の床面で、横位に立った状態で検出された。本住居を切る第54号住居跡にぎりぎり含まれる位置にあり直接本住居跡に伴う遺物と見るのは難しく、主体となる比企型環の様相から見ても若干时期的に降るとした方がよいであろう。3～5は混入である。



第138図 日区第53号住居跡出土遺物

土師器環は口縁部破片数で27点ある。比企型環が主体をなし、北武藏系環は図示した3点のみである。6~10は比企型環。ほぼ完形の6と8は東壁側から貯蔵穴に向かって流れ込んだような状態で出土した。9も完形であるがカマド前面の床面から僅かに浮いた位置から出土した。11は模倣環。口縁部内面に沈線はなく赤彩も施されない。SB06のビット肩部から出土した。12~14は北武藏系環で混入と目される。16の鉢は東南コーナーから住居内に斜めに落ち込んだ状態で出土した。

甕は口縁部破片数で15点あるが器形の判明する資料はない。18は口縁部が短く外反し胴部に影らみを残す。19・20は口縁部が水平方向に強く屈曲し、胴部は緩やかに影らむ。何れも縦方向のケズリである。21は滑石製白玉。直径1.15cm、厚さ0.7cm、重量1.15gで床面から出土した。22は鉄製刀子切先片。残長3.2cmでSB05ビット内に位置し住居に伴うとはいえない。

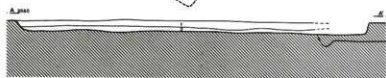
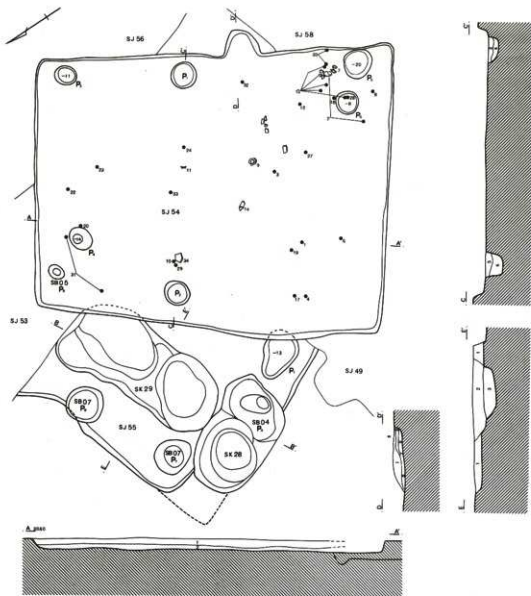
土師器環6・8・9は未だ比企型環の特徴を保っており、口径の縮小化も極限に達する以前の形態である。稲荷前Ⅲ期でも古段階に位置付けられよう。

B区第53号住居跡出土遺物観表(第138図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋	(12.0)	2.7		AC	A	灰	5%	No68 床面 外面洗い枕縁廻る
2	環	9.2	3.5		ABC	B	灰白	80%	No92 床面
3	蓋	(15.2)	1.3		ABC	A	灰	20%	No15 SB12-P <sub>2</sub> 覆土
4	環	(15.5)	3.7		ABC	A	オリーブ灰	15%	No47 床面
5	壺	(19.0)	3.4		ABC	A	青灰	20%	No8 床面
6	環	11.6	3.6		AB	A	浅黄橙	100%	No116 貯穴上面 赤彩
7	環	(11.2)	2.6		ABC	A	にぶい橙	25%	No95 覆土(+4cm)
8	環	(12.0)	4.0		AJ	A	浅黄橙	25%	No103 覆土(+9cm) 赤彩
9	環	12.1	3.8		ABC	A	橙	100%	No100 覆土(+4cm) 赤彩
10	環	(12.0)	2.5		BC	A	にぶい橙	15%	No37 覆土(+5cm) 赤彩
11	環	(11.0)	3.7		ABCE	B	浅黄橙	25%	No49 SB06-P <sub>2</sub> 上面 無彩
12	環	(12.0)	2.8		ABE	A	橙	20%	No6 床面 北武藏系
13	環	(12.0)	2.2		BE	B	にぶい橙	10%	No17 SB12-P <sub>2</sub> 北武藏系
14	環	(13.0)	2.7		ABE	B	浅黄橙	10%	No94 床面 北武藏系
15	鉢	(14.0)	4.7		AC	A	浅黄橙	10%	No124 貯穴内(-29cm)
16	鉢	20.6	8.3		ABC	A	橙	70%	No108 P <sub>2</sub> 覆土
17	壺		25.6	6.0	ABC	A	にぶい橙	30%	No101,105,109 カマド内 口縁欠
18	甕	(19.6)	8.1		ABCJ	A	浅黄橙	20%	No98 床面
19	甕	(19.0)	5.1		ABCE	A	にぶい橙	30%	No114,119 覆土(0~+7cm)
20	甕	(20.0)	17.5		ABC	A	にぶい橙	25%	No96 床面
21	白玉								No87 床面 滑石製
22	刀子								No58 SB05-P <sub>2</sub> 上面 残長3.2cm

B区第54号住居跡(第139図)

D・E-9・10区に位置する。遺構の重複が最も激しい一画にあり、住居跡相互の切り合い関係の中では本住居跡が最も新しい。第5号掘立柱建物跡との新旧は明らかにできなかったが、第4号及び第7号掘立柱建物跡は貼床の存在から本住居よりも古いものと考えられる。形態は横長の不整形長方形を呈し、規模は長軸5.64m、短軸(南西辺)4.50m、深さは最深部で17cmを測る。主軸方位はS-



**SJ 54**

- 1 黒褐色土 焼土粒子・ローム粒子と炭化物粒子を少量混入する。
- 2 暗褐色土 焼土粒子とローム粒子が多量に含まれる。
- 3 暗褐色土 焼土粒子と多量のロームブロック混入。ピット1覆土。
- 4 黒褐色土 焼土粒子とローム粒子少量混入する。ピット1覆土。
- 5 暗褐色土 多量のローム粒子と少量の焼土粒子混入。ピット2覆土。
- 6 黒褐色土 ローム小ブロックが少量含まれる。ピット2覆土。

**SJ 54カマド**

- I 暗黄褐色土 粘質土。焼土ブロック・炭化物が多量に含まれる。
- II 黒褐色土 焼土ブロックが多量に含まれる。焼土粒子が主味となり炭化物が少量含まれる。締まりない土質。
- III 赤褐色土 焼土粒子と炭化物粒子が少量含まれる。灰層か。
- IV 黒褐色土

**SJ 55・SK 29**

- 1 暗褐色土 焼土粒子と炭化物粒子が少量含まれ締まり強い。
- 2 暗褐色土 ローム粒子と炭化物粒子少量含まれる。SK 29覆土。
- 3 暗褐色土 ロームブロックが露降り状に含まれる。SK 29覆土。

0 2m

第139図 B区第54・55号住居跡

32-Eを示す。

床面はほぼ平坦である。覆土は上層・下層の2層に分かれ、下層(第2層)にローム粒子と焼土粒子が多く含まれていた。

カマドは通例とは異なり南東壁に位置する。小規模なカマドで壁外の掘り込みは40cm、幅60cmを測る。底面はほぼ平坦で床面との段差はない。埋土は第I層~III層が天井部崩落土、第IV層は灰層か流入土か判然としない。袖は当初残存するものと考えたが、断面観察を行った結果、明確に把握することはできなかった。

ビットは掘立柱建物跡の柱穴を除くと6本検出された。一応P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>を主柱穴に想定したが柱痕は確認できなかった。P<sub>3</sub>は遺物の出土状況から住居に伴うかそれ以前のものかと推定されるが、他のビットの帰属は不明である。

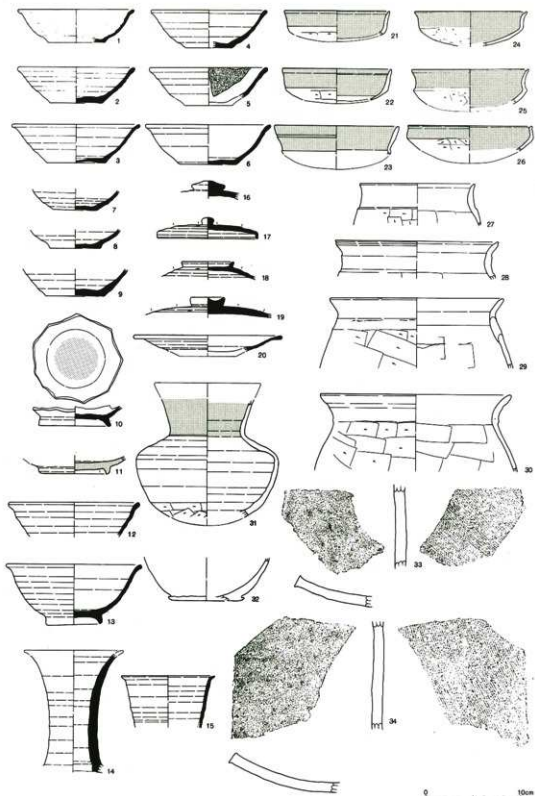
貯蔵穴及び壁溝は検出されなかった。

出土遺物はかなり多いが全て破片資料で、且つ混入遺物も相当量含まれる。明らかな混入遺物を除くと、土師器甕・小形甕、須恵器環・高台杯・碗・皿、灰釉陶器碗・瓶と小形瓦がある。

須恵器環は口縁部破片で21点検出された。第140図1~8は底部回転糸切り後無調整で、口径12cmほどのものと13cm前後を測るやや大振りの一群がある。1はやや浅身で底径は口径の1/2であるが他の環は深身で口径に対する底径比は1/2未満に縮小しており、その分体部の開きが大きくなっている。体部は中程に膨らみをもち口縁部は肥厚気味にやや外反する。5の内面には黒色から一部褐色を呈する漆状の有機物が厚く付着する。10・13は高台杯で前者は周辺部を打ち欠き整形され見込み部が磨滅している。転用碗かもしれない。後者は体部に丸みをもち底部外面に糸切り痕を残す。長頸瓶と蓋は混入であろう。17は蓋と思われ、内面に自然釉が掛かる。18は高台状の紐が付される。20は皿か口縁部折り返しの消失した蓋と考えられる。

土師器環(21~26)は周辺遺構からの混入である。27は土師器小形甕でおそらく台付甕となろう。甕は口縁部破片で14点ある。28~30は「コ」の字甕の系譜下にあるが、特に29・30は形態や技法に崩れが見られる。31は一風変わった土器である。外面の調整は良く判らないが平滑に仕上げられており、胴部下端のみ手持ちへラケズリ調整される。胴部内面の調整はクロロナアと思われる。一方焼成は酸化焰により黒斑も認められる。また口縁部内面には赤彩された痕跡がある。器形的には在地産土師器の壺形態には類例はほとんどなく寧ろ須恵器の広口壺に近いものと考えられる。器形と整形技法は須恵器、焼成と赤彩技法は土師器ということになり、須恵器工人、土師器工人両者の交流を窺うことのできる興味深い資料であるが、残念ながら混入と思われ時期を限定できない。おそらく7世紀代と考えて良からう。32は土師器甕か。底部には砂が付着し、粘土が外方に喰み出ている。胴部は内面は平滑になでられているが、外面は指押さえまたは無調整で、少なくともケズリは施されていない。整形塗上で焼成されたものかもしれない。

瓦は4片出土した。何れも小形瓦で丸瓦の細片2点、平瓦2点となる。33・34は平瓦で、凹面には横方向のナデが、凸面には目の細かい平行叩きが施される。側縁はへラケズリ調整される。何れも覆土出土である。須恵器環類と土師器甕の様相から見て本住居は稲荷前XIII期~XIV期に比定されよう。



第140图 B区第54号住居跡出土遺物



B区第54号住居跡出土遺物観察表(第140図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.0)	3.5	(6.0)	AB	A	灰白	25%	No20 床面
2	坏	12.0	3.7	5.5	AB J	B	淡黄	60%	No5,81 覆土(+3-17cm)
3	坏	(13.2)	4.1	6.2	ABC	B	浅黄橙	40%	No23 覆土(+5cm)
4	坏	(12.0)	4.0	(5.0)	ABC	B	オリーブ	20%	No64 覆土(+5cm)
5	坏	(12.2)	3.2		ABC	A	におい	10%	覆土 内面に漆状物質が厚く付着する
6	坏	(12.9)	4.2	(6.0)	ABC	C	灰白	35%	No65 覆土(+4cm)
7	坏		2.2	4.6	ABC	A	緑灰	30%	No8 床面
8	坏		2.0	5.5	BC	A	浅黄橙	70%	No3 覆土(+19cm)
9	碗		2.8	6.2	ABE	C	灰黄	80%	No78 覆土(+11cm)
10	坏		2.1	6.4	A J	C	淡黄	100%	No43 覆土(+9cm)
11	碗		1.9	6.7	AB	A	灰白	50%	No77 床面 東遺産か
12	碗	(13.4)	3.6		AB	B	灰白	15%	No12 覆土(+9cm)
13	碗	14.0	6.4	5.5	ABC J	C	灰黄	70%	No7,9他 覆土(+3-13cm)
14	長頸瓶		12.3		ABC	A	灰	60%	No76 覆土(+9cm)
15	長頸瓶	(9.7)	5.4		AC	B	灰白	15%	覆土
16	蓋		1.9		A J	C	灰	80%	覆土 紐最大径3.6cm
17	蓋	(10.5)	2.2		ABC	A	灰白	45%	No62 覆土(+6cm)
18	蓋		1.9		ABC	B	灰白	80%	No8 床面 紐径5.5cm
19	蓋		2.1		ABC	B	灰白	15%	No22 床面
20	皿	15.4	1.7		AC	B	浅黄橙	15%	No41 覆土(+8cm)
21	坏	(11.0)	2.5		AB	A	におい	15%	覆土 赤彩
22	坏	(11.4)	3.3		ABC	A	灰褐	10%	No69 覆土(+5cm) 赤彩
23	坏	(13.0)	3.0		ABC	A	褐灰	10%	No71 床面 全面黒色処理
24	坏	(11.7)	3.6		ABC	A	におい	25%	No65 覆土(+7cm) 赤彩
25	坏	(12.2)	3.7		AE	A	灰褐	10%	覆土 赤彩
26	坏	(13.0)	2.6		ACE	A	灰褐	10%	覆土 赤彩
27	鉢	(12.0)	4.3		ABC	A	橙	10%	No14 覆土(+5cm) 無彩
28	甕	(17.0)	3.9		ABE	A	におい	40%	No9 床面
29	甕	(18.0)	7.3		ABE	A	におい	20%	No42 覆土(+9cm)
30	甕	(20.0)	8.0		ABE	A	橙	15%	No48,49 覆土(0~+10cm)
31	壺		12.3		ABC	A	橙	40%	No46,74 覆土(+3~4cm)
32	甕?		4.5	(8.0)	ABE J	A	におい	20%	No53 覆土(+4cm)
33	平瓦				ABC	A	灰黄		No29 覆土(+8cm)
34	平瓦				ABC	A	灰白		No75 覆土(+9cm)

B区第55号住居跡(第139図)

D-9区に位置する。第49・53・54号住居跡と第4・7号掘立柱建物跡、第28・29号土壌の全てに切れ全容は不明とせざるを得ない。形態は本来方形を呈するものと推定されるが、北辺は歪み、コーナー部は明確に検出できなかった。残存規模は東西長3.60m、南北長3.30m、深さは最深部で11cmを測る。主軸方位はN-27°-Wを示す。

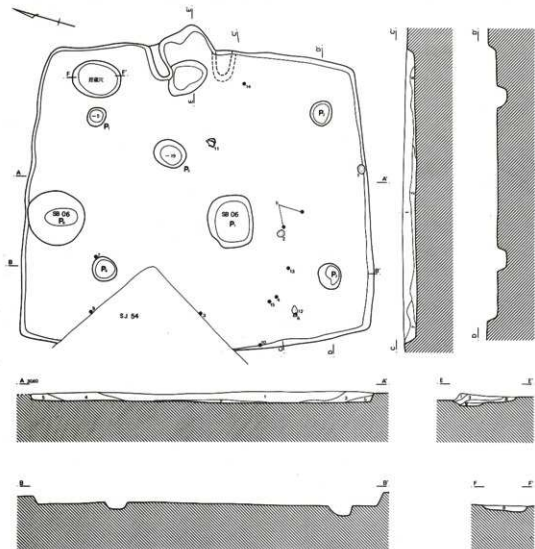
床面は凹凸が顕著で、既に掘方面まで達している可能性がある。覆土の詳細も不明であるが非常に締まりが強い(第1層)。カマドや貯蔵穴等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物はなく年代は不明である。他の遺構との切り合い関係から7世紀前半以前となろう。

B区第56号住居跡(第141図)

D・E-10区に位置する。北壁は第53号住居跡とほぼ接し、第54号住居跡及び第6号掘立柱建物跡に切られている。南壁部は第57号住居跡と重複し、断面観察の結果本住居跡の方が新しいものと判断された。形態はやや歪んだ長方形を呈し、規模は長軸5.40m、短軸4.60m、深さ10~20cmを測る。主軸方位はN-78°-Eを示す。

床面はやや起伏をもつ。住居覆土は7層に分かれるが、ロームブロックと焼土の混入が目立ち全



- 1 暗褐色土 ローム粒子と焼土粒を少量混入する。
- 2 黒褐色土 ローム小ブロック・焼土ブロック少量混入。
- 3 暗褐色土 多量のローム粒子と少量の焼土粒子混入する。
- 4 暗黄褐色土 ロームブロック多量混入する。
- 5 黒褐色土 焼土粒・ローム粒少量混入する。
- 6 黒色土 ローム小ブロックを多量に混入する。
- 7 暗黄褐色土 ロームブロックと多量の焼土粒子混入する。
- 8 暗褐色土 ハードロームブロック少量混入。貯蔵穴覆土。

カマド

- I 暗褐色土 ローム粒子と少量の焼土粒子含まれる。
- II 暗黄褐色土 焼土ブロック・粘土粒子が多量に含まれる。
- III 黒褐色土 多量のローム小ブロックと少量の焼土粒混入。
- IV 暗黄褐色土 暗褐色土を基とする粘土ブロックが主体である。

0 2m

第141図 B区第56号住居跡

て自然堆積とは思われない。

カマドは東壁に位置するが遺存状態はあまり良くない。壁を40cm程切り込んで構築され、壁ラインでの上幅90cmを測る。カマド手前に径60cm程の不整円形の浅いビットが見られるがカマドに伴う施設と思われる。底面はビット部が10cm程凹み奥壁に至る間は平坦である。

カマド覆土は4層に分かれる。第Ⅱ・Ⅲ層が天井部崩落土に相当しよう。第Ⅳ層は袖流出土、または掘方埋土であろう。尚、袖の遺存状態は極めて悪く、右袖は明確に把握することはできず、左袖も僅かに粘質土の高まりを認めた程度であった。

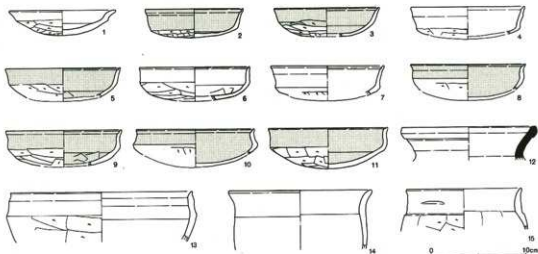
貯蔵穴は北東コーナーにある。横長の楕円形プランを呈し、規模は長径78cm、短径58cm、深さ10cmを測る。覆土はロームブロック混じりの暗褐色土で埋設していた。

ビットは5本検出された。柱穴配置からP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>が主柱穴に相当するものと考えられる。P<sub>5</sub>は直接伴わないものと推定される。

出土遺物は土師器が主体である。須恵器は破片数で14片検出されているがほとんどが混入と考えられる。土師器は杯・皿・甕・小形甕・壺があり、杯は口縁部破片数で33点を数え最も多い。10点を図化した(第142図2～11)。

第142図4は内面沈線もなく無彩であるため模倣杯と考えられるが、他の杯は比企型杯の範疇で捉えられる。しかしながら、例えば器形の判明する2と11の杯を比較すれば明らかにように口径や器形にはバラエティが認められ、確実に時期差のある土器群を含んでいる。皿は1点のみであるが完形。南壁際の床面から出土した。小形で赤彩されるが内面の沈線はない。13は鉢、14・15は小形甕で台付になる可能性がある。

出土状態を検証すると、1の皿と2の杯が完形で床面出土。4と9も床面出土であるが小片である。その他は覆土出土である。住居の時期を捉えるならば相対的に新しい要素をもち、しかも器形の1・2を基準とすべきであろう。口径の縮小化と底部偏平化が顕著で比企型杯としても最終段階の特徴を具備しており、稲荷前IV期と考えられる。



第142図 B区第36号住居跡出土遺物

B区第56号住居跡出土遺物観察表(第142図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	皿	11.0	2.6		ABC	B	におい	100%	No41 床面 無彩
2	坏	10.3	3.0		AB	A	におい	100%	No40 床面 赤彩
3	坏	(11.0)	3.0		ABC	A	におい	20%	No61 覆土(+4cm) 赤彩
4	坏	(11.9)	2.9		ABC	A	におい	15%	No6 床面 無彩
5	坏	(12.0)	3.1		ABC	A	浅黄橙	10%	No1 床面 赤彩
6	坏	11.5	3.5		ABC	A	におい	25%	No39 覆土(+10cm) 無彩
7	坏	(11.8)	3.1		ABC	A	におい	10%	No28 覆土(+11cm) 無彩
8	坏	(12.0)	2.7		BC	A	におい	10%	覆土 赤彩 口径は不安定
9	坏	(12.0)	3.7		BC	A	におい	25%	No31 床面 赤彩
10	坏	(12.4)	2.7		BC	A	浅黄橙	10%	No1 床面 赤彩 口縁部摩滅
11	坏	(12.4)	4.2		ABC	A	浅黄橙	25%	No38 覆土(+5cm) 赤彩
12	壺	(14.0)	3.5		ABC	A	灰	10%	No39 覆土(+10cm)
13	鉢	(19.0)	5.2		ABC	A	におい	10%	No17 覆土(+15cm)
14	小形甕	(15.0)	6.2		ABC J	D	橙	15%	No25 覆土(+4cm)
15	小形甕	(12.0)	4.3		ABC	A	におい	15%	No5 覆土(+13cm)

B区第57号住居跡(第143・144図)

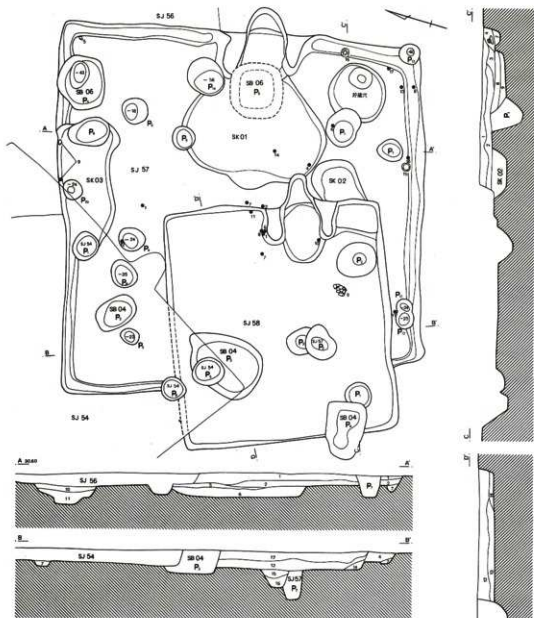
D・E-9・10区に位置する。住居密集区の中にあり第54・56・58号住居跡と第4・6号掘立柱建物跡に切られており遺存状態は良くないが、壁溝の存在によって規模はほぼ確定できる。比較的大型の住居跡で、西壁が歪むため形態は不整形を呈する。規模は東西長、南北長共に5.80m、深さは最も残りの良い部分で20cmを測る。主軸方位はN-75°-Eを示す。

床面はやや起伏をもち一定しない。住居覆土は基本的に4層に分かれる(第1~4層)。壁際は自然堆積の可能性もあるが、周囲の住居跡群との重複を考慮すると人為的な埋め戻しを想定すべきであろう。第5層は貼床面、第6層及び10・11層は床下土壌または掘方(SK01-03)埋土である。

カマドは東壁に設けられている。調査時点では明らかではなかったが、第6号掘立柱建物跡柱穴に一部破壊されているものと推定され、焚口部の様相は不明とせざるを得ない。袖の先端から煙道までの長さは110cm、燃焼部最大幅は65cmを測る。燃焼部はほぼ壁内に位置し奥壁は壁ラインと一致する。底面は鍋底状に掘り込まれ、急角度で煙道部に移行する。煙道部は壁を30cm程切り込んで延びるが、先端は削平されている。覆土は12層に区分された。第1層は掘立柱建物跡埋土の可能性もある。第II~IV層、VII・VIIIは天井部崩落土、V層は灰層か。VI層は掘方埋土であろう。袖は黄褐色粘土を主体に構成され、ロームブロックと焼土を混入する(第X~XII層)。

貯蔵穴はカマド右脇の南東コーナーに位置する。径95cm程のほぼ円形プランを呈し、深さは20cmを測る。内部に小ビットが掘り込まれていた。覆土は下層にロームの混入が比較的多く認められた(第9層)。

土壌は3基検出された(SK01~03)。SK01は掘方、SK02-03は掘方または床下土壌であろう。ビットは住居に掛かるものを含めて15本検出された。伴うビットの抽出は難しいが、配置から見てP<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>を主柱穴と考えた。P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>が深さ約50cm、P<sub>3</sub>~P<sub>5</sub>はやや浅く深さ25cm前後である。他のビットはおそらく住居よりも新しい段階のものであろう。壁溝はカマドとSK01を除くとほぼ全周



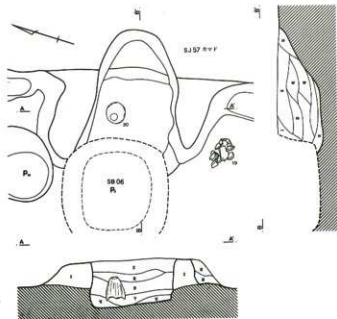
S J 57

- 1 暗褐色土 ローム粒と少量の焼土粒を混入する。
- 2 黒褐色土 ローム・焼土・炭化物少量混入する。
- 3 黒褐色土 焼土粒を少量混入する。
- 4 褐色土 焼土粒を多量に混入する。
- 5 褐色土 ローム粒と多量の焼土粒を混入する。
- 6 暗褐色土 多量のローム粒と少量の焼土粒混入。
- 7 黒褐色土 ロームブロックを多量に混入する。
- 8 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量混入。貯穴覆土。
- 9 黄褐色土 ロームブロック多量混入。貯穴覆土。
- 10 暗褐色土 ローム粒多量、焼土・炭化物少量混入。
- 11 暗褐色土 ローム粒多量、焼土・炭化物少量混入。

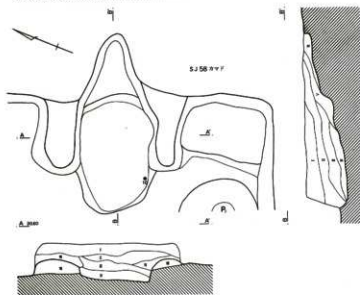
S J 58

- 12 黒褐色土 焼土粒と炭化粒を少量混入する。
- 13 暗褐色土 ロームブロックと焼土粒混入する。
- 14 黄褐色土 ローム粒と焼土粒を多量に混入する。
- 15 暗褐色土 ローム粒と少量の焼土粒混入する。
- 16 黄褐色土 ローム粒を極めて多量に混入する。

第143図 B区第57・58号住居跡



- S J 57 カマド
- I 暗褐色土 粘土粒子と焼土粒子少量混入。黄褐色粘土ブロックと焼土粒子が多量に含まれる。
  - II 暗褐色土 粘土ブロックが主体となる層で暗褐色土が少量含まれる。
  - III 黄褐色土 黄褐色粘土ブロックを主に焼土ブロックが多量に混在する。多量の焼土粒子と少量の炭が含まれる。
  - IV 黄褐色土 粘質土を主体とする少量の焼土と灰・ロームが混じる。
  - V 暗褐色土 焼土ブロックと粘土粒子が炭状に混在する。
  - VI 赤褐色土 焼土粒子を主体とする層で炭化物が少量含まれる。
  - VII 黒褐色土 焼土粒子とローム粒子が微量含まれる。
  - VIII 黄褐色土 粘土を主体とする層で、ロームブロックと焼土粒子を炭状に含む。
  - IX 黄褐色土 基本的にX層と同一だがロームブロック混入量が少ない。
  - X 暗褐色土 ロームブロック・焼土ブロック少量混入。(袖部基礎)

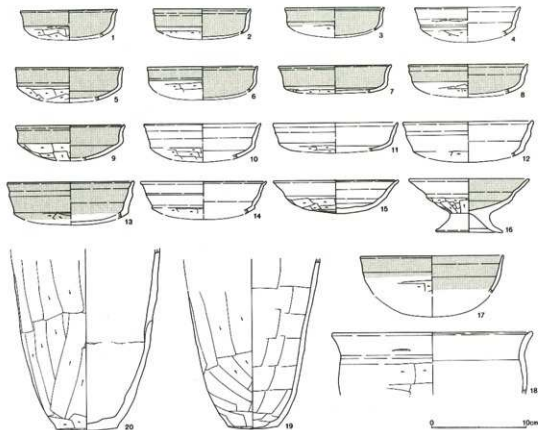


- S J 58 カマド
- I 暗褐色土 焼土粒子と粘土粒子をやや少なく混入する。
  - II 褐色土 焼土ブロックと粘土粒子が多量に混入する。
  - III 黄褐色土 粘土を主体とする層である。焼土粒と炭化物が多量に含まれる。
  - IV 赤褐色土 焼土粒子を主体に炭化物と黄褐色粘土粒子が多量に含まれる。棒まりは多い。
  - V 黒褐色土 焼土粒子と粘土粒子が多量に
  - VI 黒褐色土 粘土粒子を少量混入するが焼土粒子はほとんど含まれない。
  - VII 褐色土 焼土ブロックが主体となる。焼土粒子と炭化物の混入量は少ない。
  - VIII 黄褐色土 粘土とロームブロックが主体となる層である。焼土粒子が少量含まれる。

第144図 B区第57・58号住居跡カマド

する。深さは5~10cm前後を測る。

出土遺物は土師器が主体を占める。須恵器は坏と甕片が8点あり混入と考えられる。土師器は坏・碗・皿・甕・小形甕・台付甕・壺と高坏が出土した。坏は口縁部破片数で69点ある。比企型坏と模倣坏系に分けられる。第145図1~3・5~9は比企型坏である。大きさや器形にバラエティがあり重複する住居跡の遺物を含んでいると考えた方が良くであろう。4・10~14は模倣坏系統の土器群である。12~14は所謂有段口縁坏であろう。13は黒色処理される。14は器肉が薄く胎土も在地産とは異なり他地域のものかもしれない。15は比企型坏系の皿である。皿はこの1点のみで完形。赤彩はない。



第145図 B区第57号住居跡出土遺物



16は小形の高杯である。東壁側から転落したような状態で出土した。高杯もこの1点のみである。18は鉢か。甕は口縁部破片が7点あるが小片で図化できるものはない。19・20は胴部下半のみである。19はカマド袖の外側に潰れた状態で、20はカマド火床面に倒立した状態で検出された。

住居の年代を推定する材料はカマド内及び周囲の遺構との切り合いをもたない貯蔵穴周辺の遺物を中心とせざるを得ないが、残念ながら坏に良好な資料がない。15の皿は床面からやや浮いた状態で出土。16の高杯は一次堆積土の中にあり埋没段階の遺物であろう。時期決定の難しい資料ではあるが稲荷前II期～III期頃と考えておきたい。

B区第57号住居跡出土遺物観察表(第145図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	環	(10.1)	2.9		AB	A	にぶい澄	15%	No8 覆土(+7cm) 赤彩
2	環	(10.2)	2.6		ABC	B	にぶい澄	30%	No11 覆土(+14cm) 赤彩
3	環	(10.4)	2.4		B	A	澄	15%	覆土 赤彩
4	環	(11.0)	3.0		ABC	A	褐灰	10%	No40 無彩
5	環	(11.2)	3.5		ABC	A	澄	20%	No74 床面 赤彩
6	環	(11.5)	2.7		ABC	A	にぶい澄	15%	No32 P <sub>1</sub> 内覆土(-18cm) 赤彩
7	環	(11.8)	2.9		AB	A	にぶい澄	15%	No10 覆土(+14cm) 赤彩
8	環	(12.4)	3.1		ABC	A	浅黄澄	10%	No49 覆土(+9cm) 赤彩 外面風化
9	環	(11.3)	3.7		ABC J	B	褐灰	45%	No57,77 覆土(+3~12cm) 赤彩
10	環	(12.3)	3.7		BC	B	にぶい澄	10%	No57 覆土(+13cm) 無彩 混入か
11	環	(13.1)	3.0		ABC	A	にぶい澄	10%	赤彩不明
12	環	(13.5)	3.7		AB J	A	澄	10%	No2 覆土(+16cm) 無彩
13	環	(13.2)	3.9		ABC	B	にぶい澄	10%	カマド内覆土 黒色処理
14	環	(13.2)	3.4		ABE	A	澄	10%	No20 覆土(+28cm) 無彩
15	皿	13.0	3.5		ABC	A	にぶい澄	100%	No81 覆土(+3cm) 無彩
16	高環	12.4	6.9		ABC	A	澄	100%	No85 壁溝(+3cm) 赤彩
17	椀	(15.0)	4.0		ABC	A	澄	5%	No59 覆土(+18cm) 赤彩
18	甕?	(20.8)	5.7	6.9	ABC	A	にぶい澄	10%	No48 覆土(+7cm)
19	甕		17.7	5.2	ABC	A	にぶい澄	80%	No82 床面
20	甕		19.0	6.4	ABC	A	澄	100%	No83 カマド内覆土

B区第58号住居跡(第143・144図)

D・E-9・10区に位置する。第57号住居跡を切り、第54号住居跡と第4号掘立柱建物跡に切られていた。形態は長方形で、規模は長軸3.76m、短軸3.48m、深さ25cmを測る。主軸方位はN-70°-Eを示す。

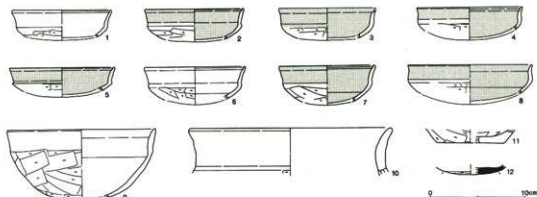
残存する床面はほぼ平坦で、カマド右側にテラスをもつ。覆土は3層に分けられるが自然堆積としてよいかどうか判らない。

カマドは東壁に位置する。全長140cm、燃焼部最大幅60cmを測る。燃焼部は壁内に納まり底面は床面を8cm掘り込んでいる。奥壁は段をもち、比較的フラットな煙道部に続く。煙道部は壁を45cm切り込んで構築され排煙部は垂直に立ち上がる。覆土は8層に分かれ、第I層はカマド埋没後の堆積土、第II・III層は天井部崩落土、第IV層は灰層か。第V・VI層はカマド内流入土であろうか。袖は褐色系の粘土とロームブロックを主体に構築されるが上面は崩壊している(第VII・VIII層)。

ピットは4本検出された。P<sub>2</sub>は貯蔵穴となるかもしれない。P<sub>3</sub>は伴うものと判断される。P<sub>1</sub>は不明、P<sub>4</sub>は直接伴うものではない。

出土遺物は土師器が主体である。須恵器は16点出土しているが大半は混入である。土師器は環・椀・皿・甕・壺が出土した。環が最も多く口縁部破片数で46点、次いで甕11点、壺3点、椀2点、皿1点となる。環は比企型環で占められる(第146図1~8)。8は混入であろう。1~7は推定口径10~11cm程で口径の縮小化が著しく進んだ段階と思われる。総体に底部が扁平なものが多いなかで7は深身の環である。9は椀で床面出土。12は須恵器の環で胎土から湖西産と推定される。底部は回転ヘラケズリされる。土師器環類の様相から見て稲荷前IV期を主体とする土器群であろう。





第146図 B区第58号住居跡出土遺物

B区第58号住居跡出土遺物観察表(第146図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	環	(10.4)	2.9		ACE	A	にぶい	20%	No19 覆土(+17cm) 無彩か?
2	環	(10.4)	3.2		ABC	A	灰褐	20%	覆土 赤彩
3	環	(10.1)	3.1		ABC	A	にぶい	10%	覆土 赤彩
4	環	11.0	2.4		BC	A	にぶい	10%	覆土 赤彩
5	環	(11.0)	2.5		BC	A	にぶい	5%	覆土 赤彩
6	環	(10.6)	3.4		AB	A	にぶい	15%	No19 覆土(+17cm) 無彩か
7	環	(10.0)	3.8		AB	A	にぶい	25%	No38 床面 赤彩
8	環	(13.0)	3.0		BCE	A	灰褐	10%	No19 覆土(+17cm) 赤彩 混入か
9	椀	(15.6)	7.2		AC	C	にぶい	35%	No42 床面 無彩
10	盥	(21.0)	5.0		ABC	A	浅黄橙	10%	No5 床面 無彩
11	甕		1.4	(7.0)	ACE	A	灰黄褐	25%	No23 覆土(+10cm)
12	環		1.1		B	A	灰	10%	覆土 湖西産か

B区第58号住居跡(第147・148図)

E・F-10区に位置する。当初、2軒の重複と考えたが、調査を進める過程で時期的に近接する住居跡が3軒(第59～61号住居跡)、ほぼ同一地点で重複することが判明した。新旧関係の把握は容易ではなかったが、最終的に本住居跡が最も新しいものと判明した。形態は長方形を呈し、規模は長軸6.26m、短軸5.06m、深さは約20cmである。主軸方位はN-17°-Wを示す。

床面はほぼ平坦で貼床が施されていた。覆土は暗褐色土または黒褐色土を主体とし(第1～4層)、覆土中には投棄されたと思われる拳大から人頭大の礫が比較的多く含まれていた。

カマドは北壁に位置し、壁を35cm程切り込んで構築される。最大幅75cmを測り、底面はフラットである。焚口部右袖内側には片岩製の袖石が埋設されていた。また燃焼部中央からやや左に寄った位置(壁ラインから僅かに北に外れる)には、やはり片岩製の支脚が据えられた状態で検出された。この位置が掛け口となろう。したがって、先端部は燃焼部奥壁に相当し、煙道部は削平されたものと考えられる。覆土は7層に分けられ、第II～V層は天井部崩落土、第VI～VII層は袖部とその流出土と考えられる。袖はロームブロック混じりの褐色粘土を主体に構築されていた。

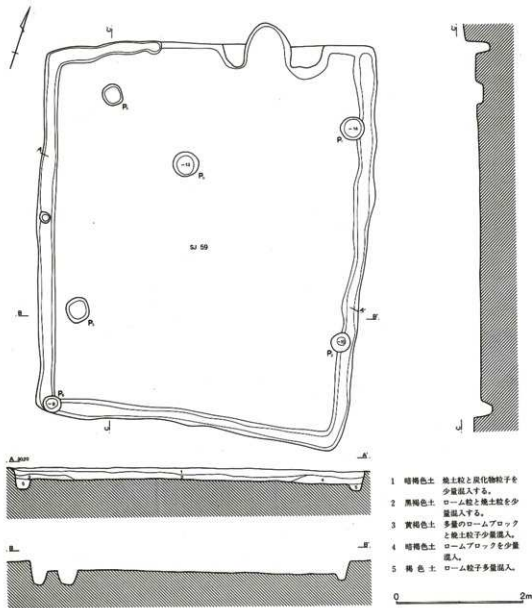
ピットは6本検出された。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>を主柱穴と見做すこともできるが、壁に寄りすぎる点や全体に

浅く主軸とずれるなどやや疑問符が付く。

壁溝はカマドの周囲を除き全周する。幅は20cm前後、床面からの深さは10~20cmである。

出土遺物は比較的多いが、遺構の把握が難しかったために出土遺物には重複住居の遺物が一定程度含まれている点は否めない。第150・151図には出土位置が判明し本住居跡に含まれる遺物を掲載した。覆土から出土し帰属関係の不明確な遺物については、第156図に一括して掲げた。

第150図1~5は土師器坏類で、1は統比企型坏、2・5は北武藏型坏(皿)、3・4は暗文坏で内面放射状暗文が施されている。土師器甕には良好なものが無いが、第151図34は口縁部が長く外方に延

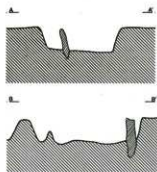
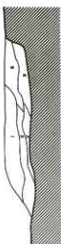
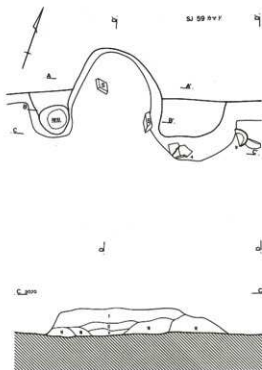


第147図 B区第59号住居跡

び、胴部上半は横方向に削られている。

須恵器環(6~17)は口径14.2~15.9cmまでのものがあり、主体は15cm代にある。底部は平底または平底風のものが多く、口径15cmを切る6・7は偏平浅身である。一方大振りな9・11はやや深身で、9は底部が僅かに丸底風を呈し全面回転ヘラケズリされるが、ケズリは基本的に体部変換点までは達していない(一部ヘラの当たった痕跡は残る)。環の底部再調整は回転ヘラケズリによるが、7の底部中心部には静止糸切りと思われる痕跡が残る。19は小形の高台環で高台は底部外縁部よりも内側に付く。20は通常の高台環よりも底径が大きく高台盤となろう。蓋は環状鈕をもつもの(22)と、擬宝珠状に近い鈕をもち天井部が水平方向に延びるもの(23)がある。

壺・甕類では、26は口縁部外面揃波状文間が沈線で区画される。27には棒状工具による沈線区画

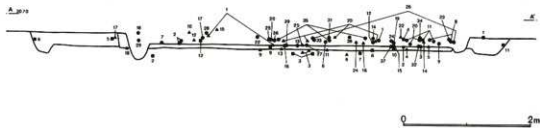
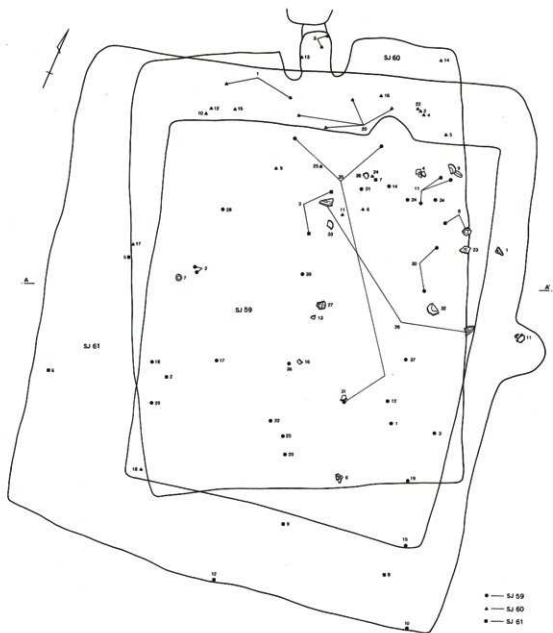


SJ59カマド

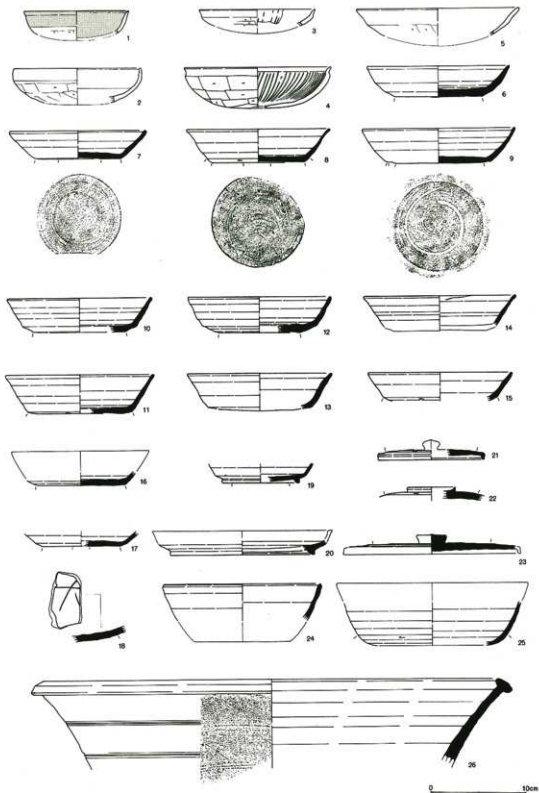
- I 黒褐色土 ローム・焼土粒・炭化物を少量混入。
- II 黄褐色土 焼土小ブロック多量、黄褐色粘土粒少量混入。
- III 褐色土 灰褐色粘土を主に焼土粒子を含む。
- IV 黄褐色土 多量の焼土粒子と灰褐色粘土粒子を含む。
- V 黄褐色土 焼土粒少量混入。
- VI 灰褐色土 粘質土を主体とする層でロームと焼土を含む。
- VII 褐色土 焼土粒子と黄褐色粘土粒子を比較的多く含む。

0 1m

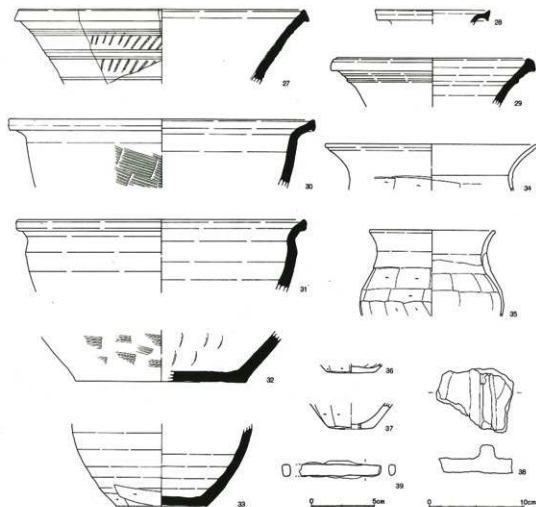
第148図 B区第59号住居跡カマド



第148图 B区第59~61号住居跡遺物分布图



第150图 B区第59号住居跡出土遺物(1)



第151図 B区第59号住居跡出土遺物(2)

と先端部が方形をなす櫛歯状工具を用いた列点文が加えられている。胎土には粗い白色粒子が目立ち、素地土も緻密である。産地は不明であるが、おそらく東海諸窯の製品と推定される。床面から出土したものであるが住居に伴うかどうかは検討を要する。29の口縁下部には弱い凸帯が巡る。28の長頸瓶は9世紀代の混入か。18は全面へラケズリされる須恵器環の底部片で丸底風を呈する。内面には焼成前の線刻があり、文字とすれば「大」と読むことができる。

38は須恵質の瓦塔片で、建物側壁と柱が表現されている。住居に伴うか否かは明らかではない。39は鉄製刀子の柄部と考えられ残長は6.6cm。

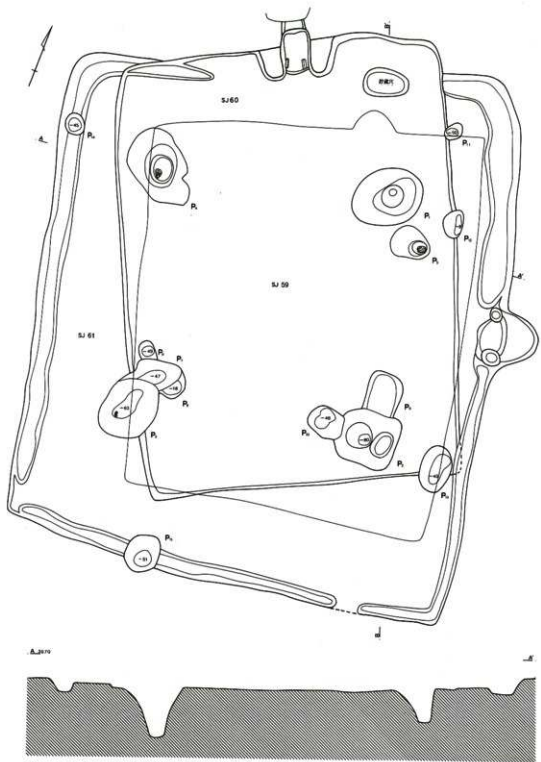
全体的な遺物様相は重複関係の激しさを反映するようにある程度時期幅が存在するようである。主体となるのは稻荷前VI期～VII期までの土器群と考えられる。須恵器環類では床面から出土した第150図7が最も新しい様相でVII期であろう。本住居はVI期～VII期にかけて使用から廃絶に至ったものと考えておきたい。

B区第59号住居跡出土文物観察表(第150・151図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	11.0	2.4		AB	A	にぶい黄	15%	No32 覆土(+10cm) 赤彩
2	坏	(13.2)	3.6		BE	A	浅黄橙	25%	No281,481 覆土(+2~5cm) 北武藏系
3	坏	(12.2)	1.8		ABE	A	橙	10%	No20 床面 暗文僅かに残る
4	坏	15.3	4.3		BE	A	橙	55%	No445 覆土(+13cm)
5	皿	(17.0)	2.9		ABE	B	橙	5%	覆土 風化著しい 北武藏系
6	坏	(14.9)	3.3	9.2	ABC	B	灰黄	40%	No407 覆土(+6cm)
7	坏	(14.2)	3.0	9.0	ABC	A	灰白	35%	No396 床面
8	坏	15.0	3.5	9.8	ABC	A	灰白	60%	No449,110 覆土(+10~12cm)
9	坏	15.9	3.7	9.4	ABC	A	オリーブ灰	95%	No446 覆土(+6cm)
10	坏	(15.1)	3.6	(9.9)	ABC	B	にぶい黄	20%	ヒット2覆土
11	坏	(15.5)	4.0	(11.0)	ABC	A	オリーブ灰	25%	No177,178,他 覆土(+11cm)
12	坏	(15.0)	3.8	8.6	ABC	A	オリーブ灰	20%	No34 覆土(+6cm)
13	坏	(15.1)	3.7		ABC	B	灰白	10%	No419 床面 口径不安定
14	坏	(15.8)	3.2		ABC	A	灰白	20%	No168 覆土(+13cm)
15	坏	(15.0)	3.0		ABC	A	灰白	10%	No255 床面
16	坏		1.4	9.4	ABC	A	灰白	80%	No412 床面 底部全面回転ヘラケズリ
17	坏		1.6	(8.2)	ABC	A	灰	30%	No259 覆土(+8cm)
18	坏				ABC	B	灰		No288 覆土(+17cm)
19	高台		2.0	8.1	ABC	A	灰	60%	No225 覆土(+4cm)
20	高白盤		1.5	(15.0)	ABC	B	灰白	10%	No245 覆土(+8cm) 貼付高台
21	蓋	(11.0)	1.1		ABC	A	灰白	15%	No163 覆土(+17cm)
22	蓋		1.4		ABC	A	灰	20%	No240 覆土(+14cm)
23	蓋		1.7		ABC	A	灰	70%	No450 覆土(+13cm) 鋳完存
24	桶	(16.5)	3.8		ABC	A	灰	10%	No174 覆土(+6cm)
25	椀		4.5		ABC	A	オリーブ灰	20%	No242 覆土(+9cm)
26	甕	(48.0)	9.3		AB	A	灰白	20%	No430,456 覆土(+9~13cm)
27	甕	(30.0)	7.8		AB	A	灰白	10%	No420 床面
28	長頸壺	(12.0)	1.5		ABC	A	にぶい黄	15%	No123 覆土(+17cm) 混入か
29	甕	(20.0)	5.1		ABC	A	暗青灰	10%	No291 覆土(+4cm)
30	鉢	(32.0)	7.2		ABC	B	灰	10%	No139,140 覆土(+13~14cm)
31	鉢	(30.0)	7.6		ABC	A	灰	10%	No408 覆土(+11cm)
32	甕		5.4	(18.0)	ABC	A	オリーブ灰	35%	No454 床面 外面平行叩き後ナデ
33	甕		8.6	9.6	ABC	A	灰	40%	No428 覆土(+9cm)
34	甕	(22.0)	4.8		ABE	A	にぶい黄	10%	No162 覆土(+14cm) 武藏型
35	小形甕	(13.0)	9.0		ABCE	A	にぶい黄	25%	No43,158,他 覆土(+8~13cm)
36	甕		0.9	(5.2)	ABE	A	にぶい黄	35%	No64 覆土(+8cm) 武藏型
37	甕		2.7	(4.8)	ABC	B	にぶい黄	25%	No210 床面 内面風化
38	瓦塔				ABC	A	明褐色		No434 覆土(+15cm)

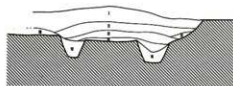
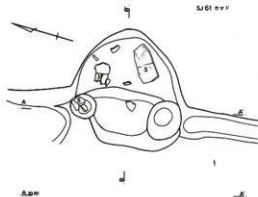
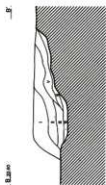
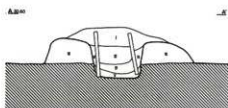
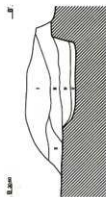
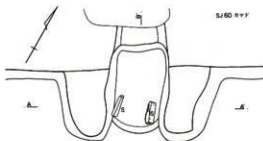
B区第60号住居跡(第152・153図)

E・F・9・10区に位置し、第59・61号住居跡の2軒と重複する。切り合い関係は前者よりも古く、後者よりも新しいものと考えられる。床面を除去した段階で本住居の西壁と思われる段差が確認されたことで、形態と規模の概要は把握することができた。但し南壁部に関しては必ずしも明確ではない。形態は長方形を呈するものと推定される。規模は南北の残存長4.60m、東西長5.25m、北壁部の深さ25cmを測る。主軸方位はN-20'-Wを示す。



第152图 日区第60·61号住居跡(1)





S J 60 カマド

- I 灰褐色土 灰褐色土を主体とし焼土粒子を少量含む。
- II 黄褐色土 粘土ブロックと焼土ブロックを多量に含む。
- III 褐色土 II層に類似する。黒色土と炭化物を混入する。
- IV 赤褐色土 焼土ブロックを主体とし粘土と灰・炭化物を含む。
- V 黄褐色土 焼土ブロックとローム粒子・炭化物を含む。
- VI 明褐色土 粘土を主体に焼土を多量に含む。
- VII 黄褐色土 粘土を主体にロームブロックと焼土粒子を含む。

S J 61 カマド

- I 黒色土 ローム粒・焼土粒と灰褐色粘土粒子を少量含む。
- II 暗褐色土 多量の焼土粒と灰褐色粘土ブロックを含む。
- III 褐色土 焼土を主体とし、少量の粘土を含む。
- IV 赤褐色土 焼土粒子と灰、炭化物を含む。
- V 褐色土 焼土粒子と灰褐色粘土粒子を少量含む。
- VI 黄褐色土 多量のローム粒子と少量の焼土粒子を含む。
- VII 褐色土 ローム粒子と少量の焼土粒子を含む。
- VIII 褐色土 焼土粒子を少量含む粘性が高い。
- IX 黄褐色土 ローム粒子と粘土粒子を含み粘性が高い。

0 1m

第153図 B区第60・61号住居跡(2)

床面は第59号住居跡のそれよりも5cm程度深く掘り込まれていた。覆土の詳細は不明であるが、近接時期の切り合い関係から見て人為的な埋め戻しと考えられる。

カマドは北壁に設けられ、煙道部先端は浅い土壌によって壊されていた。残長は85cm、燃焼部幅は底面で38cmを測る。両袖の内壁には片岩系の板石(幅20cm、長さ40cm程)が2枚左右に据えられた状態で残されていた。両者の間隔は約30cmあり、一応袖部の補強材と考えておきたい。燃焼部奥壁は壁を20cm切り込んでおり、垂直近い角度で立ち上がる。側壁は強い火熱を受け焼土化(赤褐色に変色)していた。袖は調査の最終段階で断面を断ち落とした結果、粘質土の遺存範囲よりもかなり縮小し、袖部補強材も焚口付近に存在したことが判明した。

貯蔵穴と思われるピットはカマドに向かって右脇に検出された。形態は楕円形を呈し、規模は長径35cm、短径23cm、深さは10cmと非常に浅い。主柱穴は不明である。

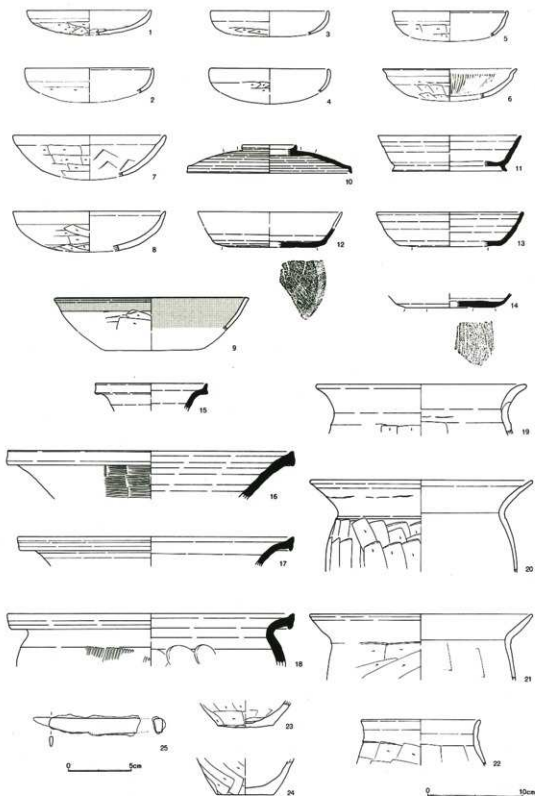
出土遺物はかなり多いが、一応出土位置から本住居に含まれりもののみ第154図に掲げた。第154図1～9は土師器環類である。1・9は統比企型環で胎土には白色針状物質が含まれる。後者は赤彩され、おそらく平底風になるものと思われる。2～5は北武藏型環、6は内面に放射状暗文が施される。7・8は在地産の椀で、8は口唇部が尖り、内斜する端面をもつ。統比企型環系と見て良いかもしれない。土師器甕は古墳時代以来の長胴甕の承譜を引くもの(19)と武藏型甕の系列に位置づけられるもの(20・21)がある。20の胴部は縦方向のケズリである。

須恵器高台環(11)は底部外縁に高台が付される。高台の作りはしっかりしており底部外面は丁寧なクロロナデが施され、削り痕は残らない。12の環は底部不定方向の手持ちヘラケズリ、14は底部静止糸切り後回転ヘラケズリ調整されている。蓋(10)は環状鈕をもつもので、口径は17.3cm、鈕径は約5.5cmを測る。25は鉄製刀子で、切先と柄部を欠く。残長7.2cm、最大幅1.3cm、床面出土。

遺物様相を第59号住居跡と比較すると、土師器甕や須恵器環類の器形や技法には本住居の方が古い様相をもつものが含まれる。稲荷前V期～VII期頃の遺物で構成されるが主体はVI期にあると思われる。

B区第60号住居跡出土遺物観察表(第154図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	施成	色調	残存	出土位置・その他
1	環	(13.0)	2.6		ABC	A	橙	50%	Na150,152 覆土(+6~18cm) 無彩
2	環	(13.4)	2.6		ABE	A	橙	20%	Na21 覆土(+4cm) 北武藏型
3	環	(12.3)	2.5		ABE	B	浅黄橙	20%	Naカマド142,231 カマド内
4	環	(12.4)	2.5		ABF	B	にぶい	10%	Na23 床面 北武藏型
5	環	(12.0)	2.6		BE	B	にぶい	10%	Na34 覆土(+6cm) 北武藏型
6	環	(14.0)	3.1		ABE	A	浅黄橙	15%	Na186 ピット1肩部 無彩
7	椀	(16.0)	4.3		ABCE	A	橙	15%	Na226 カマド内 無彩 黒斑あり
8	椀	(16.0)	4.1		ABC	A	橙	10%	Na197 カマド内 無彩
9	椀	(20.0)	3.5		ABC	A	にぶい	10%	Na106 床面 赤彩
10	蓋	(17.3)	2.9		ABC	A	灰	25%	Na163 覆土(+24cm) 鈕径5.5cm
11	高台環	(15.0)	3.7	(12.0)	ABC	A	灰	20%	Na108 床面
12	環		2.1	11.6	ABC	B	オリーブ	25%	Na160 覆土(+12cm)
13	環	(15.3)	3.6	(10.6)	ABC	A	淡黄	10%	Na230 カマド内
14	環		1.5	(9.4)	ABC	B	灰白	15%	Na10 覆土(+15cm)
15	長胴甕	(11.7)	2.9		ABC	A	明緑灰	15%	Na157 覆土(+28cm)



第154图 B区第60号住居跡出土遺物

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
16	甕	(30.0)	5.0		ABC	A	灰	10%	No111 覆土(+10cm)
17	甕	(30.0)	3.1		ABC	A	灰	5%	No238 覆土(+11cm)
18	鉢	(30.0)	5.5		ABC	A	灰	5%	No242 床面
19	壺	(21.8)	5.4		ABCE	A	橙	15%	No225 カマド内
20	甕	(23.2)	9.6		AB	A	橙	50%	No85, 87, 他 覆土(+12~19cm)
21	甕	(23.2)	6.9		ABE	A	橙	20%	カマド覆土 武藏型壺
22	小形甕	(12.4)	4.8		ABE	B	橙	20%	No166 覆土(+17cm) 武藏型
23	甕		2.8	(6.0)	ABE	A	にぶい	35%	No198 カマド内
24	甕		3.8	6.0	ABE	B	橙	45%	No112 覆土(+8cm) 内面風化
25	刀子								No120 床面 残長7.2cm 最大幅1.3cm

### B区第61号住居跡(第152・153図)

E・F・9・10区に位置する。第59・60号住居跡との重複関係の中では本住居跡が最も古いものと考えられる。形態は長方形を呈する。大型住居跡で、規模は長軸8.66m、短軸7.20m、深さは北東部で20cmを測る。主軸方位は西壁に直交するものと仮定するとN-74°-Eを示す。

床面及び覆土については重複住居に大部分を破壊されているため、詳しい状況は不明である。残存部で見ると、床面深度は北壁側から南壁側に移行するにしたがって僅かに深くなる傾向が認められる。

カマドは東壁に設けられていた。壁を約50cm切り込んで構築され、最大幅は90cmを測る。袖は残存していなかったが、袖内壁に相当する位置には小ピットが左右各1個穿たれており、左側(北側)のそれには先端の折れた板状礫が埋設されていた。また、カマド内にはもう1個同様な礫が遺存しており、或いは右側のピットに埋設されていたものが外れたものかもしれない。これらは袖部の補強材と推定される。

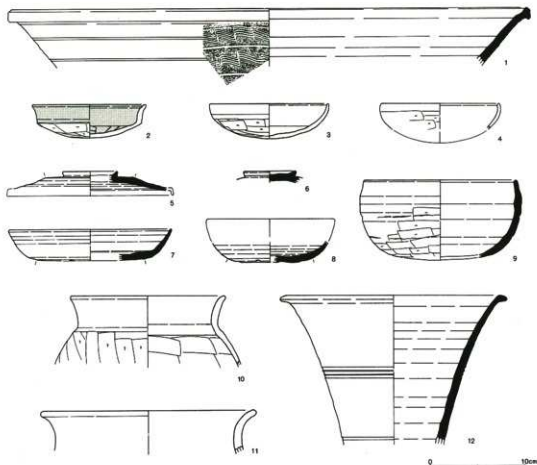
貯蔵穴は不明確であるがP<sub>13</sub>が或いは相当するかもしれない。楕円形プランを呈し、規模は長径70cm、短径50cm、深さは40cm。ピットは住居内から15本検出されているが、主柱穴と考えられるのはP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>である。どれも大きな掘方をもち深度も深い。P<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>には柱材の基部が遺存していた。

壁溝は部分的に途切れていた。深さは一定せず4~15cm程である。

本住居跡の遺物として抽出できるものは少ない。第155図1は須恵器甕で、口縁部外面には栴檀波状文間に沈線区画が見られる。同種の甕の中では古相といえるが、覆土上面から出土しており住居に直接伴うとはいえない。2~4は土師器環である。2は模倣環系の比企型環、3・4は北武藏型環で口縁部は内穹気味に立ち上がる。須恵器蓋は2点あり、何れも環状鈕をもつ(5・6)。

7は口径17cmを測る大形環で底部は回転ヘラケズリされる。8は丸底の環で底部は回転ヘラケズリ調整され、中心部に粘土が若干瘤状に突出する。それを見る限りでは糸切りさ





第155図 B区第61号住居跡出土遺物

れた痕跡は認められない。9は無台椀と考えられる。体部から底部外面は手持ちへラケズリが施され成形時の積み上げ痕を残すなど作りは雑である。12は大形の長頸壺と思われる。口縁部外面に沈線加飾が2段施され口唇部は縁帯風に突出する。土師器甕には良好な資料がない。

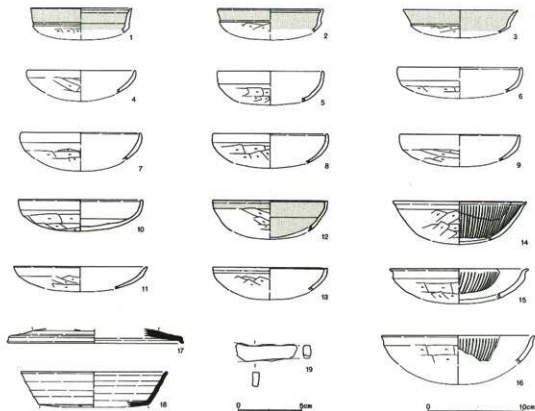
出土状態を見ると、3・7は掘方面、或いは重複する第60号住居跡に帰属するかもしれない。確実に本住居跡に含まれるものは5・6と8～12となろう。土器様相からみると8・9・12は第60号住居跡出土土器に比して古く位置付けられるであろう。特に9は類例が少なく、現状では東松山市立野遺跡例が比較的近似する。12は鳩山窯跡群の最古段階に同種の長頸壺はあるが外面の沈線は消失しており、本例の方が型式的にはより古相を留めていると言える。5の環状鈕をもつ蓋は鈕径が比較的大きく、天井部も肉厚である。山下6号窟出土の蓋に比較的近似しよう。土師器坏(2・4)はピット内出土で確実に伴う保証はないが、該期として違和感はない。本住居跡に含まれる遺物は重複する3軒の住居跡の中でも最も古い一群で構成されるものと考えられる。時間的には稲荷前V期段階と推定される。3軒の住居跡は遺物様相からみても連続し、本住居から第60号住居跡を経て第59号住居跡へと継起的に建て替えたものと推定される。

B区第61号住居跡出土遺物観察表(第155図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	甕	(54.4)	6.1		ABC	A	灰	5%	No451 覆土(+23cm)
2	坏	(11.8)	3.5		AB	B	にぶい燈	35%	No264 ビット7内(-14cm) 赤彩
3	坏	12.5	3.7		ABE	A	にぶい燈	50%	No103,168 掘方(-6~8cm)
4	坏	(12.4)	2.7		ABE	B	にぶい燈	10%	Noビット4 北武藏系
5	蓋		2.0		ABC	A	灰褐	25%	No241 覆土(+13cm)
6	蓋		1.2		ABC	A	明緑灰	90%	No261 覆土(+10cm)
7	坏	(17.0)	3.3	(11.5)	ABC	B	灰白	15%	No93 掘方(-6cm) 口唇部磨滅
8	坏		2.1		ABCE	A	灰白	25%	No254 床面
9	椀	(16.0)	8.1		ABC	A	灰白	20%	No249 床面
10	小型壺	(16.0)	7.5		ABCE	A	にぶい燈	20%	No257 床面
11	壺	(22.2)	4.6		ABC	B	燈	15%	No458 カマド内
12	長頸壺	(22.4)	15.6		ABC	A	灰褐	5%	No252 覆土(+9cm)

B区第59~61号住居跡出土遺物(第156図)

ここでは、重複する第59~61号住居跡から出土したもので帰属住居の不明確なものを掲載した。第156図1~3は模倣坏系の比企型坏で赤彩されている。4~10は北武藏型坏である。口縁部は内湾気味に立ち上がる。11は口縁部内面に内傾する面をもつ皿で硬質な焼き上がりである。12・13は形態



第156図 B区第59~61号住居跡出土遺物

的にはもはや比企型環とは呼べないが、口唇部上端に沈線が巡ることと赤彩を施す点に比企型環の影響が認められるものである。14～16は暗文環で、内面に放射状暗文が施されている。17は須恵器蓋、18は須恵器環で底部は全面回転ヘラケズリ調整される。19は鉄製刀子柄部と思われ、残長は4.8cmを測る。

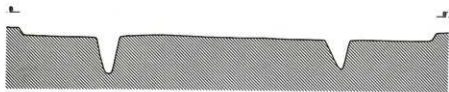
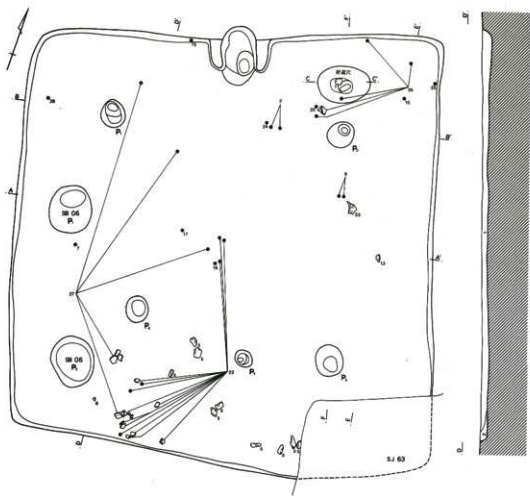
さて3軒の住居跡から検出された須恵器・土師器の出土数についてまとめておきたい。帰属関係の不明確なものがあり、3軒を一括した数値を示しておく。土師器は237点検出され、環類が口縁部破片数で151点、甕が65点、小形甕が10点、台付甕(底部)が1点、壺が10点となる。環では模倣杯系の比企型環が50点、続比企型環が17点、北武蔵型環が68点、暗文環が6点、模倣環が2点、有段口縁環が2点、その他(不明)が5点となり、北武蔵型環の比率が高いことが特徴である。須恵器は総数217点を数え、環が口縁部破片数で120点、高台環が4点、椀が9点、高台盤が1点、蓋が59点、甕が12点、壺・瓶類が5点、鉢が6点、甕が1点となる。土師器と須恵器の合計数は454点となり、ほぼ両者が拮抗する出土数を示すが、これをもって各時期を平均化することは危険である。この時期、鳩山窯跡群の生産開始を期期として供膳器を中心に土師器から須恵器への移行が急速に進んだことが想定されるからである。おそらく土師器の依存度の高かった前半段階から、須恵器の供給量が増加し相対的に土師器の構成比率が低下する後半段階という変化が内在するものと推定される。

B区第59～61号住居跡出土遺物観察表(第156図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	環	(10.6)	2.6		ABC	A	にぶい	15%	覆土 赤彩 口縁内面凹む
2	環	(11.0)	2.4		AB	A	橙	10%	覆土 赤彩 口縁内面沈線
3	環	(12.0)	2.4		ABC	B	にぶい	10%	覆土 赤彩
4	環	(11.3)	2.5		BE	A	橙	5%	覆土
5	環	(11.0)	3.2		ABE	A	浅黄橙	15%	覆土 北武蔵型
6	環	(12.9)	2.6		BE	A	にぶい	20%	覆土 北武蔵型
7	環	(12.6)	2.8		BE	A	にぶい	15%	覆土 北武蔵型
8	環	(12.0)	3.1		BE	A	にぶい	20%	覆土 北武蔵型
9	環	(12.5)	2.7		ABE	A	浅黄橙	20%	覆土 北武蔵型 内面風化
10	環	13.0	3.3		BE	A	にぶい	70%	不明 北武蔵型
11	皿	(14.0)	2.4		B	A	にぶい	5%	覆土 無彩
12	環	(12.0)	3.2		ABC	A	淡黄	15%	覆土 赤彩
13	環	(12.0)	2.4		ABC	A	にぶい	10%	覆土 無彩
14	環	(14.0)	4.1		ABE	A	橙	30%	覆土 無彩
15	環	(14.5)	3.1		ABE	A	橙	10%	覆土 内面放射状暗文巡る
16	環	(16.0)	3.0		ABE	A	橙	10%	覆土 無彩
17	蓋	(18.4)	1.5		ABC	B	灰白	5%	覆土
18	環	(15.4)	3.7	(10.7)	ABC	A	灰白	15%	覆土
19	刀子								覆土 残長4.8cm

B区第62号住居跡(第157・158図)

D-10区に位置する。第63号住居跡と第6号掘立柱建物跡に一部切られていた。形態は南壁が若干歪むが概ね方形を呈し、規模は長軸6.64m、短軸6.54m、深さは5～15cmである。主軸方位はN-17°-Wを示す。

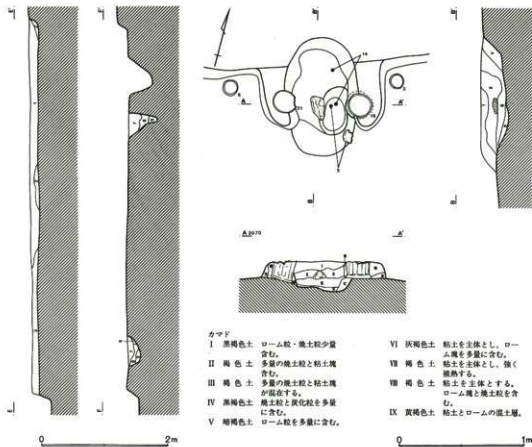


- |  |  |
|--|--|
| <p>1 黒褐色土 多量のローム粒と少量の焼土粒・炭化物を含む。</p> <p>2 暗褐色土 多量のローム粒を含む。</p> <p>3 暗褐色土 多量のローム粒と少量の炭化物・焼土粒を含む。1層より色調は明るいが大きな変化はない。</p> <p>4 暗褐色土 ローム粒を少量含む。</p> | <p>5 黒褐色土 ローム粒微量含む。</p> <p>6 黄褐色土 ロームを主体とし、黒褐色土を含む。</p> <p>7 黒褐色土 若干灰色味、粘性強い。</p> <p>8 灰褐色土 少量のローム粒・焼土粒と炭化物を含む。</p> <p>9 暗褐色土 ロームブロックと少量の焼土粒を含む。</p> |
|--|--|

0 2m

第157図 B区第82号住居跡(1)



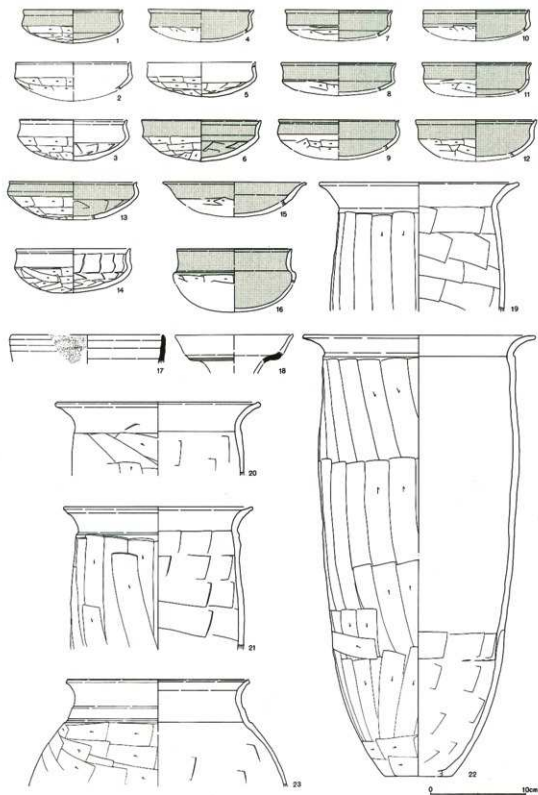


第158図 B区第62号住居跡(2)

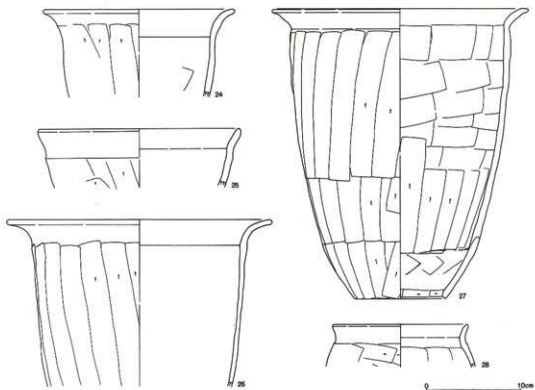


床面はほぼ平坦である。覆土は壁際を除いて多量のローム粒子を含む黒褐色土で埋没していた(第1層)。人為的な埋め戻しであろうか。

カマドは北壁中央に位置する。規模は長さ94cm、燃焼部最大幅55cmで、壁を22cm切り込んで構築されている。底面は床面下約10cm掘り込まれ鍋底状を呈する。また、中心より東に寄った位置には浅いビット状の掘り込みが検出された。両袖部には土師器甕が1個づつ口縁部を下に伏せた状態で埋設されていた。胴部中位から底部は欠損していたが、周囲は粘土に覆われており袖部の補強材として使用されたものと考えられる。カマド覆土は9層に分かれ、第II層とIII層が天井部崩落土、第



第159图 B区第62号住居跡出土遺物(1)



第160図 B区第62号住居跡出土遺物(2)

IV層中に火床面が存在したものと推定される。第V層は流入土か。袖は褐色粘土にロームブロックを混ぜた土で構築されていた(第VII~IX層)。なお、カマド中央部の第III層上面に相当する位置から硝が検出されたが、直接カマドに使用されたものかどうかは明らかになかった。

貯蔵穴はカマドの南側に位置する。形態は楕円形を呈し、規模は長径82cm、短径60cm、深さ30cmである。埋土は基本的に2層に分かれ、下層(第5層)中にはほぼ完形の土師器坏(第159図1)が逆位に落ち込んだ状態で出土した。

ピットは5本検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>は主柱穴と見てよいが、P<sub>4</sub>は位置的にずれる。重複する第6号掘立柱建物跡P<sub>5</sub>と重なる位置に主柱穴が存在した可能性もある。壁溝は検出されなかった。

出土遺物には土師器と須恵器があり前者が主体を占める。出土数を示すと土師器では坏類が29点、甕9点、壺3点、瓶4点、須恵器は鉢?と甕、または脚部片が各1点となる。土師器坏は比企型坏(第159図1~14)。形態と大きさにはバリエーションがある。1は口径が10.4cmと小振りではあるが形態的な崩れはみられない。貯蔵穴内から出土しており住居に伴う遺物と見てよいものである。3・6はカマド左右の壁際から出土した。器高は深めでやはり典型的な比企型坏の範疇に入る。13は口径が13cmを超え、形態的にも最も古い様相が認められる。第159図5・14はカマド内から出土した。甕(19~22)は何れも最大径を口縁部にもつ。19・21はカマド袖の芯として使用されていた。27は瓶、24~26も同類かと思われる。

17の須恵器は鉢としたが器形が良く判らない。残存部の外面には6本組の櫛描直線文が縦位に2

単位施される。内面は二次的に火熱を受け発泡している。18は甕としたか壺脚部かもしれない。比企型環には新古の様相が認められる。13を除外すると概ね稲荷前II期～III期前半に位置付けられる土器群と考える。

B区第62号住居跡出土遺物観察表(第159・160図)

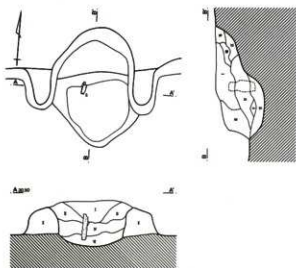
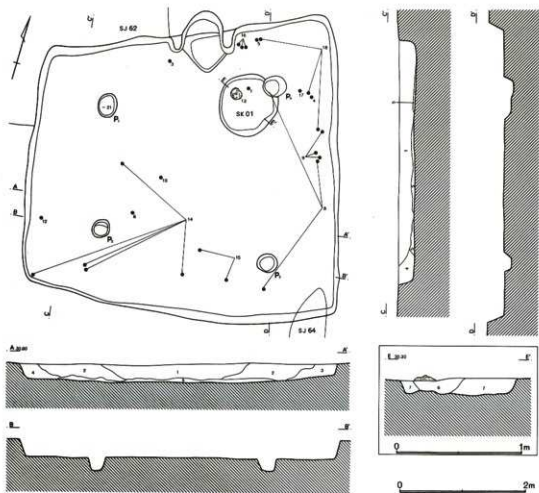
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	施成	色調	残存	出土位置・その他
1	環	10.4	3.5		ABC	A	浅黄橙	100%	No229 貯穴内(-13cm) 赤彩
2	環	(12.0)	2.9		ABC	C	明褐灰	25%	No11,12 床面 無彩
3	環	11.3	4.3		ABCDE	B	浅黄橙	100%	No210 床面 無彩 口唇部摩滅
4	環	(11.1)	2.4		ABC	B	いぼ	15%	覆土 赤彩
5	環	(11.4)	3.4		ABC	B	いぼ	70%	No96,212 笑口底面 無彩
6	環	12.4	4.3		ABC	A	いぼ	95%	No213 覆土(+10cm) 赤彩
7	環	(11.2)	2.7		ABC	A	いぼ	20%	No100 床面 赤彩
8	環	(12.0)	2.9		ABC	A	いぼ	15%	No192 覆土(+10cm) 赤彩
9	環	(12.6)	3.2		ABC	B	浅黄橙	15%	No175,176 覆土(+7cm) 赤彩
10	環	(11.0)	2.3		ABC	B	いぼ	20%	No162 覆土(+11cm) 赤彩
11	環	(11.3)	3.2		ABC	A	いぼ	15%	覆土 赤彩
12	環	(12.6)	3.9		ABC	A	橙	20%	覆土 赤彩
13	環	(13.4)	3.9		ABC	A	橙	25%	No180 覆土(+6cm) 赤彩
14	環	12.0	4.6		ABC	A	いぼ	55%	No86,95 カマド内 無彩
15	皿	(15.0)	2.5		ABC	A	淡黄	10%	No102 覆土(+6cm) 赤彩
16	椀	(12.0)	3.6		AB	A	橙	20%	No115 覆土(+4cm) 赤彩
17	鉢?	(16.0)	3.0		ABC	A	オリーブ灰	5%	No47 床面
18	甕?		1.2		AB	B	青灰	10%	覆土 在地産と推定される
19	甕	20.7	13.4		ABCJ	A	いぼ	100%	No230 カマド右袖内
20	甕	(21.4)	7.7		ABC	A	橙	15%	No168 覆土(+11cm)
21	甕	19.7	14.9		ABCJ	A	浅黄橙	90%	No231 カマド左袖内
22	甕	(24.0)	46.1	(7.0)	ABCJ	A	橙	25%	No110,111他 床面
23	甕	(19.0)	11.2		ABC	A	橙	25%	No173 覆土(+9cm) 無彩
24	甕	(19.6)	9.2		ABCDE	B	浅黄橙	10%	No19 床面 全体に風化
25	甕	(21.0)	6.2		ABCJ	B	浅黄橙	10%	No33 床面 全体に風化
26	甕	(27.6)	17.5		ABC	A	橙	30%	No160,165他 床面,貯穴内
27	甕	(25.8)	30.4	9.5	ABC	A	橙	40%	No58,64他 床面
28	小形甕	(14.0)	4.5		AB	A	いぼ	15%	No103 覆土(+5cm)

B区第63号住居跡(第161図)

D-10・11区に位置する。第62号住居跡を切り、南壁部は第64号住居跡のカマドに切られていた。形態は南壁がかなり歪んでいるために台形となる。規模は長軸4.94m、短軸4.26m、深さは20～25cmである。主軸方位は北壁に直交するものと仮定するとN-22'-Wを示す。

床面は概ね平坦である。覆土は5層に分かれ(第1～5層)、全体的にロームの含有





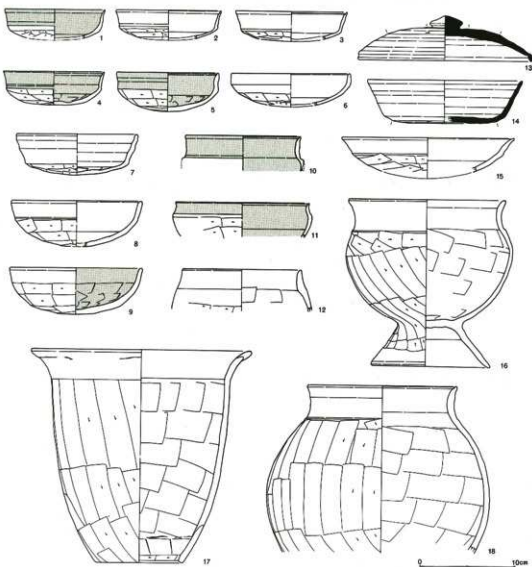
- |           |  |
|-----------|--|
| 1 黒褐色土    | 多量のローム粒子・焼土粒子と少量の炭化物を含む。               |
| 2 暗茶褐色土   | ローム粒多く、少量の焼土粒と炭化物含む。                   |
| 3 明褐色土    | ローム粒を多量に含む。                            |
| 4 黒褐色土    | 多量のローム微粒子・少量の焼土粒を含む。                   |
| 5 暗褐色土    | ローム・ロームブロック多量に含む。                      |
| 6 暗褐色土    | 焼土粒・ローム粒子・灰白色粘土を多量に含む。                 |
| 7 褐色土     | 少量の焼土粒と多量のローム粒を含む。                     |
| カマド       |  |
| I 暗褐色土    | 粘土とローム粒子を多量に含む。                        |
| II 灰褐色土   | 粘土を主とし焼土粒と少量の炭化物含む。                    |
| III 暗灰褐色土 | 灰色粘質土ブロックを多く含む。焼土粒子とローム粒子・炭化物の含有量は少ない。 |
| IV 暗灰褐色土  | 灰褐色粘土と焼土ブロックが混在する。                     |
| V 赤褐色土    | 焼土ブロックが主体で少量の炭化物含む。                    |
| VI 黒褐色土   | 多量のロームブロックと焼土粒子を含む。                    |
| VII 暗褐色土  | 粘土ブロックを露降り状に含む。                        |
| VIII 赤褐色土 | 焼土ブロックと粘土が混在する。                        |
| IX 明褐色土   | ローム粒子を多量に含む。                           |
| X 灰褐色土    | 灰褐色土主体。多量のローム粒子を含む。                    |

第161図 B区第63号住居跡・カマド

量が多く人為的な埋め戻しと推定される。

カマドは北壁に位置する。規模は長さ95cm、幅65cm、床面からの深さは約12cmである。燃焼部はほぼ壁内におさまり、底面は皿状に凹む。奥壁は急角度で立ち上がり壁外の煙道部に続く。燃焼部の中心ラインよりもやや西に寄った位置には、石製支脚が据えられた状態で残されていた。カマド覆土は10層に分かれる。第VI層は掘方埋土、第X層は袖構築土でそれ以外は天井部崩落土と思われる。火床面は第VI層上面であろう。袖はローム混じりの灰褐色粘土で構築されていたが、先端部は流失していた。

ピットは4本検出された。何れも支柱穴と考えられ、住居の形状に合わせたように台形に配置されている。貯蔵穴は存在しないが、カマド前面に土塊が1基検出された(SK01)。土塊埋土は粘土とロームを多量に含む土で構成され、床面直上レベルからほぼ完形の須恵器の蓋(第162図13)が出土



第162図 B区第63号住居跡出土遺物

した。

出土物には土師器と須恵器がある。出土数を示すと、土師器は坏19点、碗2点、皿1点、甕3点、小形甕3点、台付甕1点、甌1点、壺3点、鉢1点となる。坏(第162図1～9)は比企型坏の承踏を引くもの(1～5)と北武蔵型坏(6)、有段口縁坏(7)とその他(8・9)がある。比企型坏は模倣坏の口縁部内面に沈線を巡らすものが主体をなす(1～5)。5は底部がやや深めであるが、他のものは底部がきわめて浅く比企型坏の変遷の中でも新しい様相と言える。有段口縁坏(7)は口径が大きくやや古相である。9の内面は黒色処理されている。皿(15)は口縁端部に沈線が巡るもので、硬質な焼き上がり特徴的である。

須恵器は非常に少なく坏が2点、蓋が1点、甕の胴部片が4点出土したのみである。坏(14)は推定口径16cmを超える大形品で、器高も4.5cmと深い。底部は平底風で全面回転ヘラケズリが施される。蓋(15)は器肉が厚くやや扁平な宝珠形の鈕が付く。何れも南比企窯跡群産である。

出土物は7世紀前半から中葉頃と8世紀初頭頃のものが入混するようである。古相の一群は重複する第62号住居跡に関わるものかもしれない。新しい様相を示す6と13～15を基準に稲荷前V～VI期と考えておきたい。

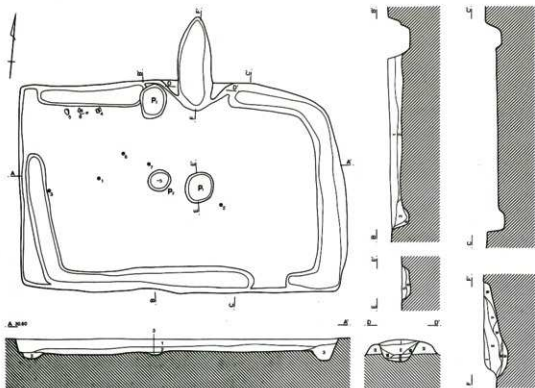
B区第63号住居跡出土遺物観察表(第162図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他		
1	坏	(10.5)	3.0		ABC	B	いぶき	20%	No23	覆土(+25cm)	赤彩
2	坏	(11.0)	2.9		ABC	A	いぶき	35%	No111	覆土(+21cm)	無彩
3	坏	(11.7)	2.9		AB	C	明黄褐	20%	No12	覆土(+14cm)	無彩
4	坏	(10.5)	3.5		ABC	A	橙	45%	No154	覆土(+8cm)	赤彩
5	坏	10.6	4.1		ABC	A	いぶき	80%	No137	覆土(+7cm)	赤彩
6	坏	12.4	3.3		A E F	B	橙	40%	No56	覆土(+16cm)	北武蔵型
7	坏	(12.6)	4.3		ABC	A	いぶき	55%	覆土	黒色処理不明	
8	坏	(13.6)	4.8		ABCE	A	浅黄	40%	No119, 145, 149	覆土(+3~22cm)	無彩
9	坏	(13.6)	4.9		ABCE	A	いぶき	40%	No147, 148, 160	床面	内面黒色処理
10	碗	(12.0)	3.6		ABC	B	いぶき	15%	No16	覆土(+13cm)	赤彩
11	碗	(14.0)	3.7		ABC	A	橙	10%	覆土	赤彩	
12	小形甕	(12.4)	4.4		ABE I	A	いぶき	20%	No72	覆土(+8cm)	
13	壺	18.1	4.7		ABC	C	淡黄	90%	SK01	上面	
14	坏	(16.2)	4.5	(11.0)	AC	B	淡黄	40%	No62, 73, 他	覆土(+6~21cm)	
15	皿	(18.0)	3.6		ABC	A	橙	20%	No106, 117	覆土(+10~13cm)	無彩
16	台付甕	16.4	17.5	12.3	ABCE	B	浅黄橙	65%	No136, 158, 他	床面	
17	甌	(23.0)	22.3		ABCE	A	淡黄	50%	No140	覆土(+4cm)	やや風化
18	壺	16.6	17.5		ABC	A	橙	100%	No139, 141, 147	覆土(+4~6cm)	

B区第64号住居跡(第163図)

調査区東寄りのD・E-11区に位置し、カマド煙道部が第63号住居跡を切って構築されていた。形態は横長の不整形長方形を呈し、規模は長軸5.14m、短軸3.20m、深さは約20cmである。主軸方位はN-7°-Wを示す。

床面はほぼ平坦である。覆土は4層に分かれるが、壁際を除けば上下2層となる(第1・2層)。両層共にロームが極めて多量に含まれ、若干色調の相違はあるものの大きな土層変化はない。人為的



- 1 暗褐色土 多量のローム粒子和ロームブロック、少量の焼土粒子和炭化物を含む。  
 2 褐色土 多量のローム粒子和ロームブロックを露降り状に含む。  
 3 黒褐色土 焼土粒子和ローム粒子和少量含む。  
 4 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含み、粘結に富む。  
 5 黄褐色土 ローム粒子和褐色土が混在する。  
 6 褐色土 ローム粒子和少量含む。

カマド

- I 暗灰褐色土 微細なローム粒子和焼土粒子和炭化物少量含む。  
 II 褐色土 灰白色粘土と焼土ブロックを多量に含む。

- III 黒褐色土 焼土粒子和炭化物粒子和多く含む。  
 IV 明褐色土 ロームブロック・焼土粒子和微量の炭化物含む。  
 V 灰褐色土 粘土と焼土が露降り状に混在する。  
 VI 暗褐色土 ローム粒子和微量の焼土粒子和含む。  
 VII層に近似する。焼土粒子和やや多く含む。  
 VIII 灰白色土 粘土主体層。焼土ブロックを多量に含む。  
 IX 灰白色土 粘土を主体としロームブロック・ローム粒子和焼土粒子和少量含む。

0 2m

第163図 B区第64号住居跡

な埋め戻しと考えるのが妥当であろう。

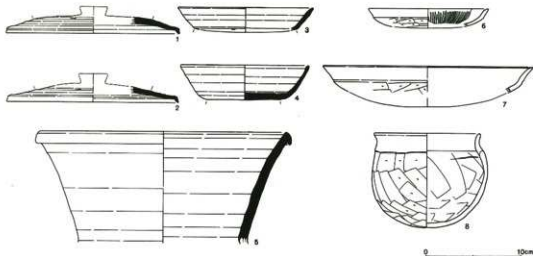
カマドは北壁に位置する。壁を102cm切り込んで構築され、規模は長さ146cm、燃焼部幅52cm、床面からの深さは20cmである。底面は焚口付近が最も深く、煙道部に向かって緩やかに延びる。燃焼部と煙道部の区別は平面、断面何れから見ても不明瞭である。覆土は9層に分かれる。第II・V層と第VIII層が天井部及び袖の崩壊土、第III層が灰層に相当する。第VI-VIIは流入土であろうか。袖は大半は流出し、遺存状態はあまり良くない。残存部を見るとローム混じりの灰白色粘土を用いて構築されていた(第IX層)。

貯蔵穴は存在しない。ピットは3本検出されたが主柱穴といえるものは認められない。P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>は住居使用時には埋められており、P<sub>3</sub>は住居よりも新しい段階のものである。

壁溝は部分的に途切れ、また西壁部では壁ラインよりも若干内側に巡っていた。幅40~50cm、床面からの深さ10~15cm程である。

出土遺物は少ない。土師器と須恵器がある。出土数を示すと、土師器は坏5点、皿1点、甕1点、





第164図 B区第64号住居跡出土遺物

小形甕1点がある。坏は比企型坏3点、北武藏型坏1点、暗文坏1点があり、比企型坏は明らかに混入と思われる。暗文坏は皿状を呈しやや小振りである。内面に放射状暗文が施されている(第164図6)。皿は大形品である。口唇部に沈線が巡り焼成は堅緻で硬質に焼き上がっている(7)。

須恵器では坏3点、蓋2点、甕1点、壺1点が検出された。坏は第164図4が唯一完形に近い。底部は全面ヘラケズリされ平底となる。3は小片であるため推定に頼らざるを得ないが口径14cm前後の浅身の坏であろう。体部下端が削られている。蓋(1・2)は何れも偏平で口縁部が短く屈曲する。壺(5)は口縁部が長く端部を緑帯風に垂下させる。

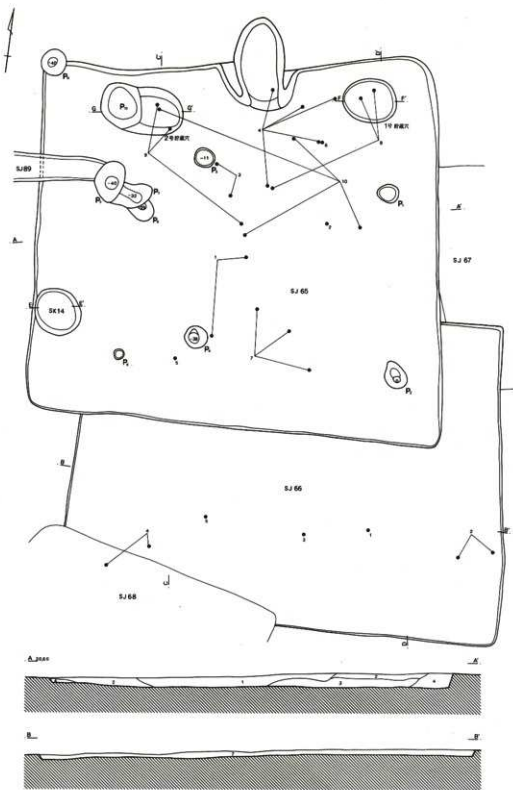
出土遺物はほとんどが覆土から検出されたもので、住居の時期を直接示す資料に乏しい。また、遺物の時期幅もかなり広く、稲荷前V期またはVI期～VIII期までのものが含まれている。判断に迷うが、出土遺物中最も新しく且つ遺存率の高い4を基準に、一応本住居跡は稲荷前VIII期に位置付けておきたい。

B区第64号住居跡出土遺物観察表(第164図)

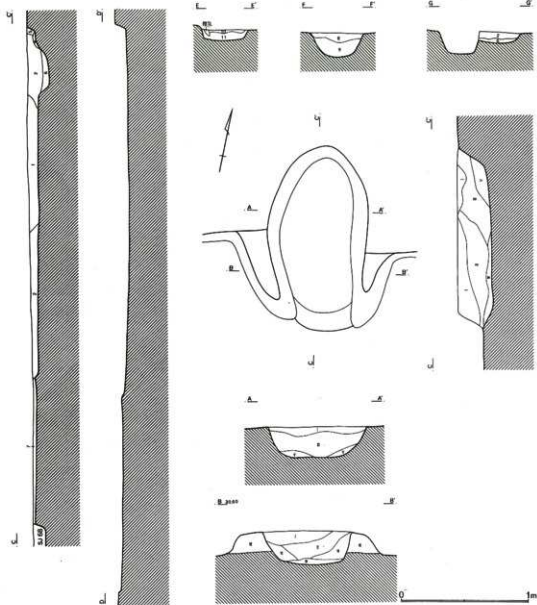
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	蓋	(18.2)	1.7		ABC	A	灰	15%	No6 覆土(+12cm)
2	蓋	(18.0)	1.7		ABC	B	灰	10%	No45 床面
3	坏	(14.2)	2.3		ABC	A	暗青灰	10%	No10 覆土(+13cm)
4	坏	13.4	3.6	7.7	ABC	A	灰	95%	No50 覆土(+7cm)
5	甕	(26.0)	11.6		ABC	A	におい遣	25%	No54 覆土(+10cm)
6	坏	(12.5)	1.9		ABE	A	におい遣	15%	No7 覆土(+7cm) 内面放射状暗文
7	皿	(22.0)	2.7		ABC	A	におい遣	10%	No44 床面 硬質 口唇部に沈線巡る
8	小形甕	11.0	9.8		ABC	A	におい遣	90%	No51-53 床面 胴部上半スス付着

B区第65号住居跡(第165・166図)

E-11区に位置し、第66・67号住居跡を切って構築されていた。第89号住居跡との新旧関係は明確には捉えられなかったが、本住居跡の方が新しい可能性がある。また、住居内に存在する第14号土



第165图 B区第65·66号住居跡(1)



- |         |                            |
|---------|----------------------------|
| 1 黒褐色土  | 焼土粒子と大型のロームブロックを多量に含む。     |
| 2 黒褐色土  | 1層と同様だがロームの粒径が小さい。         |
| 3 暗褐色土  | ロームブロックを少量含む。              |
| 4 黒褐色土  | 少量のローム粒子と微量の焼土粒子を含む。       |
| 5 黒褐色土  | ロームブロックを多量に含む。             |
| 6 暗灰褐色土 | 焼土粒子を少量含む。                 |
| 7 黒褐色土  | ローム小ブロック少量含む。              |
| 8 暗灰褐色土 | ローム粒子を多量に含む。               |
| 9 黄褐色土  | ロームブロックを主体に多量の焼土粒子と黒色土を含む。 |
| 10 黒褐色土 | 少量のローム粒子と微量の灰化物を含む。        |
| 11 黒褐色土 | ローム粒子とロームブロックをやや多く含む。      |

カマド

- |           |                                    |
|-----------|------------------------------------|
| I 褐色土     | 多量のローム粒子と少量の焼土粒子を含む。               |
| II 灰褐色土   | 灰褐色粘土と焼土ブロック、焼土粒子が高降り状に混在する。       |
| III 暗灰褐色土 | 基本的に第I層と同一だが、焼土の含有量が極めて多く、黒褐色土を含む。 |
| IV 黒褐色土   | 少量のローム粒子・焼土粒子とやや多量の灰化物粒子を含む。       |
| V 暗褐色土    | 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。                  |
| VI 黄褐色土   | 粘土を主に焼土ブロックをやや多く含む。                |
| VII 灰褐色土  | 灰褐色粘質土を主としローム粒子と焼土粒子を少量含む。         |

第166図 B区第65・66号住居跡(2)

墳は本住居よりも新しい時期の所産である。形態は方形を呈し、規模は長軸6.32m、短軸5.80m、深さは北壁部で14cmを測る。主軸方位はN-9°-Wを示す。

床面はほぼ平坦である。覆土は5層に分かれる。第1層と第2層にはロームブロックが多量に含まれており、人為的な埋戻しと考えられる。

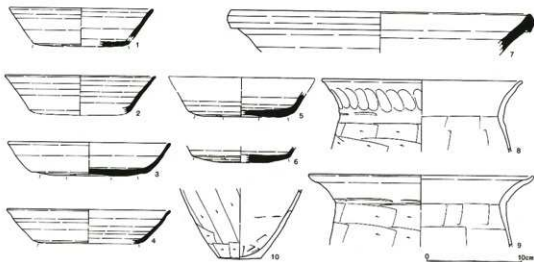
カマドは北壁に設けられている。壁を約80cm掘り込んで構築され、規模は全長1.46m、燃烧部幅80cm、底面は全体に平坦で、床面よりも約10cm掘り下げられていた。煙道部先端は急角度で立ち上がる。煙道部と燃烧部との視覚的な区分は不明瞭である。壁内には袖部が残存し、両袖が取り付く壁はカマドの左右で段違いとなっている。覆土は7層に分けられ、第1層は住居埋土、第II・III層は天井部崩落土であろう。おそらく第IV層が灰層に相当するものと考えられる。第V層はカマド内流入土か。第VII層は袖構築土で、灰褐色粘質土が主に用いられていた。第VI層は袖または天井部崩落土と思われる。

貯蔵穴は2基検出された。1号貯蔵穴はカマドの東脇に位置する。楕円形プランを呈し、規模は長径82cm、短径70cm、深さ40cm。2号貯蔵穴はカマドを挟んで西側に位置し、おそらく楕円形プランを採るものと推定されるが、西半をP<sub>10</sub>に破壊されていた。残存規模は長径92cm、短径74cm、深さ38cmである。断面観察の結果、住居廃棄時に開口していたのは2号貯蔵穴のみで、1号貯蔵穴は既に埋め戻されていたことが判明した。

ピットは10本検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>を主柱穴と見ることもできるが、位置的にかなり東に寄ってしまい確言できない。P<sub>9</sub>・P<sub>10</sub>は住居よりも新しい段階のものである。他のピットの帰属は不明。

出土遺物は土師器と須恵器があるが量的には少ない。土師器は口縁部破片数で坏5点、碗1点、甕12点、小形甕2点、台付甕(底部)1点、壺2点がそれぞれ出土した。坏は細片で図化していない。甕(第167図8~10)は系譜的に見ると武藏型甕に連なるものと考えられ、胴部上端には横方向の削りが施されている。

須恵器は全破片数で21点検出され、内訳は坏が11点、蓋1点、甕8点、壺1点となる。坏(1~6)



第167図 B区第65号住居跡出土遺物

はどれも大振りである。器形の判明する3は口径17cmで、底部中心部に回転糸切り痕が残る。4も口径17cm程度にはなるものと推定される。遺物の出土状況を見ると、確実に住居に伴うといえる遺物は乏しく、逆に4・8～10のように距離的に離れ、しかも高低差のある破片が接合する例が観察されることから、住居埋没(埋め戻し)時の遺物がかなり含まれていることが判る。土器様相から見ると稲荷前V期～VI期の遺物が含まれるようであるが、主体は後者となろうか。

B区第65号住居跡出土遺物観察表(第167図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(15.0)	4.0	(10.0)	ABC	B	灰	15%	No62,66 覆土(+8cm)
2	坏	(15.6)	3.9		ABC	A	灰	5%	No125 床面 口径に不安を残す
3	坏	(17.0)	3.5	(12.1)	ABC	C	淡黄	25%	No113,142 床面
4	坏	(17.1)	3.5	(11.7)	ABC	B	灰白	30%	No57,114,他 覆土(+1~17cm)
5	坏		2.7	(11.1)	ABC	A	オリーブ灰	35%	No72 覆土(+9cm) 厚手
6	坏		1.6	(10.4)	ABC	A	灰	25%	No121 床面 ケズリ径10.0cm 推定
7	甕	(31.3)	4.4		ABC	C	灰	5%	No84,85,87 覆土(+7cm)
8	甕	(21.0)	7.4		ABE	A	にぶい黄	30%	No31,56,169 覆土(0~+19cm)
9	甕	(23.6)	7.4		ABE J	A	浅黄橙	25%	No145,150他
10	甕		7.2	4.6	ABE J	A	にぶい黄	30%	No119他 貯穴内(-17cm)覆土(0~+10cm)

B区第66号住居跡(第165・166図)

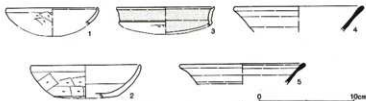
E-11区に位置する。第65・68号住居跡と重複し、本住居跡が最も古い。また、第67号住居跡との新旧関係は本住居跡の深度が浅いために明確には捉えられなかった。形態は長方形を呈するものと推定されるが全容は不明である。残存規模は長軸6.84m、短軸4.90m、深さは非常に浅く平均5cm程度である。主軸方位は東壁を基準にするとN-1°-Eを示す。

床面はほぼ平坦である。覆土はローム粒子を含む暗褐色土で構成され(第7層)、土層変化は観察されなかった。カマド、ピット等の付属施設は検出されなかった。

出土物は極めて少ない。第168図1は小振りな北武藏型坏で口縁部は短く内屈する。2は白色針状物質が多量に含まれる在地産の坏であるが、あまり例をみない器形である。3は模倣坏系の比企型坏で赤彩されている。須恵器坏(4・5)は混入と考えられる。

1・3の土師器坏を基準にすると本住居の時期は稲荷前

IV期頃と推定される。



第168図 B区第66号住居跡出土遺物

B区第66号住居跡出土遺物観察表(第168図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(9.6)	1.9		BE	A	にぶい黄	5%	No35 床面 北武藏系
2	坏	(11.5)	3.3	(6.6)	ABC	B	にぶい黄	30%	No40,44 床面 在地産 系統不明
3	坏	(10.2)	2.1		ABC	B	にぶい黄	5%	No43 床面 赤彩
4	坏	(13.4)	2.7		ABC	B	灰黄	10%	No10,18 床面 混入
5	坏	(13.0)	2.2		ABC	A	オリーブ灰	10%	No26 床面 混入

日区第67号住居跡(第169図)

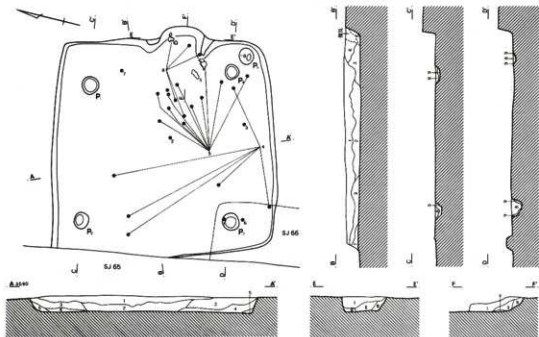
E-11・12区に位置し、第65・66号住居跡に西壁を切られていた。形態は方形を呈し、規模は長軸3.56m、短軸3.40m、深さは最大で30cmである。主軸方位はN-78°-Eを示す。

床面はほぼ平坦である。覆土は7層に分かれる。第1層下面は凹凸が顕著に認められ、第3・4層にはロームブロックの混入が多く、人為的に埋め戻された可能性がある。

カマドは東壁に位置するが、遺存状態は良くない。壁の切り込みは浅く15cm程で燃焼部の大半は壁内に存在したものと考えられる。燃焼部は幅70cmで、底面は床面と同一レベルであるため長さは不明である。袖もほとんど残されておらず、また周囲に流出した袖の構築土も確認できない。カマド覆土は5層に分かれるが、天井部の崩落土と思われる層は確認できなかった。袖の状況も考慮すると、カマドは住居廃棄時に取り払われた可能性もあろう。

貯蔵穴は検出されなかった。ピットは5本あり、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>を支柱穴に想定したが、深度は浅い。

出土遺物は少なく、土師器と須恵器がある。出土数を示すと土師器は口縁部破片数で坏2点、小形甕4点、壺2点、鉢1点、瓶(?)1点となる。甕は底部及び胴部片のみで良好な資料はない。須



- 1 暗褐色土 少量の焼土粒・ローム粒・微量の炭化物混入。
- 2 黒褐色土 各色含有物は1層より多く含まれ、焼土は径2-3cmと大きい。
- 3 暗褐色土 焼土粒・ローム粒多く、少量の炭化物混入。
- 4 暗灰褐色土 部分的にロームが塊状に堆積する。少量の炭化物・ローム粒・微量の焼土粒混入。
- 5 暗黄褐色土 ぐすんだローム質土で暗褐色土混じる。
- 6 褐色土 多量のローム・少量の焼土・微量の炭化物混入。
- 7 灰黄褐色土 多量のローム含む、露降状の堆積を呈する。微量の焼土混入。

ピット

- 8 暗褐色土 ローム粒多く含む。
- 9 暗黄褐色土 暗褐色土を混じえたくすんだ色調のローム土。

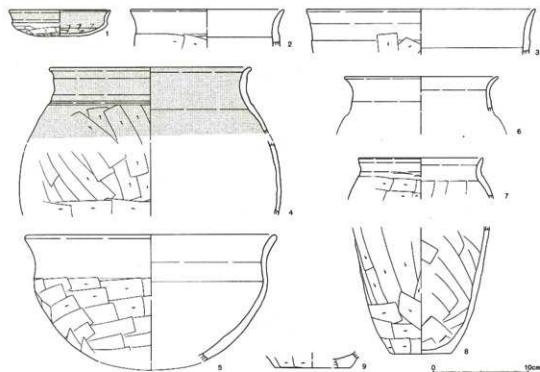
カマド

- I 暗黄褐色土 ぐすんだロームが塊状に堆積し、少量の焼土粒・微量の炭化物混入。
- II 暗褐色土 多量のローム粒・微量の焼土粒・炭化物混入。
- III 暗黄褐色土 ぐすんだローム質土と暗褐色土が塊状に混在し、少量の焼土粒が混じる。
- IV 黒褐色土 微量のローム粒混入。
- V 黒褐色土 少量の焼土粒と炭化物が混じる。

0 2m

第169図 日区第67号住居跡

恵器は坏の口縁部2点、体部片1点と甕の胴部片が2点あるが細片で図化できない。坏の1点は伴う可能性もあるが、他は何れも8世紀以降の混入と考えられる。第170図1は模倣坏系の比企型坏で全体に浅身で底部は扁平化している。P<sub>3</sub>横の床面から出土した。4・5は出土状態から埋没過程で流入したものと推定される。8はカマド内から出土した長甕底部である。時期を限定することは難しいが1の坏を基準に稲荷前IV期～V期に位置付けておきたい。



第170図 B区第67号住居跡出土遺物

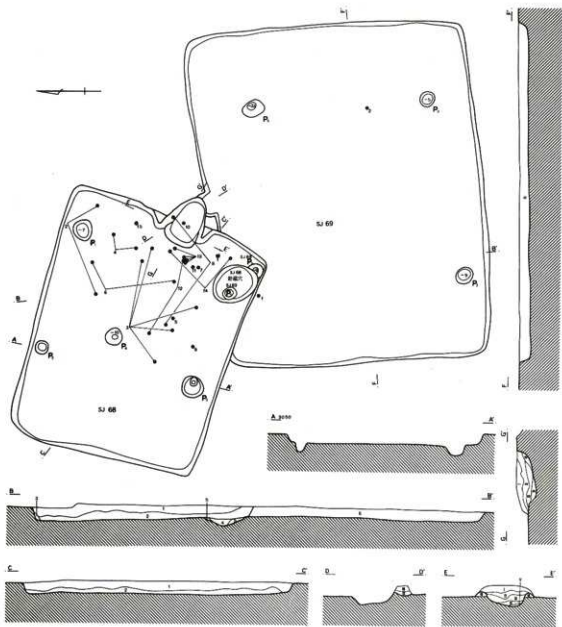
B区第67号住居跡出土遺物観察表(第170図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(10.5)	2.8		BC	B	橙	50%	No78 床面 赤彩
2	小形甕	(16.0)	3.8		ACE	A	にぶい濁	5%	No48 覆土(+10cm)
3	甕	(24.0)	4.8		AE	A	にぶい濁	5%	No55 覆土(+7cm)
4	壺	(21.0)	(11.5)		ABC	A	にぶい濁	20%	No25,36,他 覆土(+1~17cm) 無彩
5	鉢	(26.0)	13.2		ACE	B	にぶい濁	30%	No19,21,他 覆土(0~+20cm)
6	壺	(16.0)	3.6		ACE	A	にぶい濁	15%	No52 覆土(+8cm) 赤彩
7	小形甕	(13.0)	4.3		AE	B	橙	15%	No60 床面
8	甕		13.2	(6.4)	ACE	A	にぶい濁	40%	No75,他 カマド内22,23 覆土(+18cm)
9	壺		1.6	(7.8)	ACE	B	浅黄橙	20%	No43 覆土(+14cm)

B区第68号住居跡(第171図)

E・F-11区に位置し、第66・69号住居跡を切って構築されていた。形態は不整形長方形を呈し、規模は長軸4.04m、短軸3.08m、深さは約20cmを測る。主軸方位はS-76°-Eを示す。

床面はほぼ平坦である。覆土は基本的に上下2層に分かれるが、大きな土層変化は認められな



- 1 黒褐色土 少量のローム粒・焼土粒を含む。  
 2 暗褐色土 少量のローム粒・焼土粒・炭化物を含む。  
 3 暗黄褐色土 暗褐色土層とのローム質土。  
 4 暗褐色土 ローム粒多く含む。少量の焼土粒を含む。  
 5 暗黄褐色土 ローム主体に灰褐色土面する。  
 6 暗褐色土 ロームが露降り状に露じり。焼土粒子を含む。  
 S J 69カマド  
 I 黒褐色土 多量のローム粒・少量の焼土粒を含む。  
 II 灰褐色土 多量の焼土ブロックと灰褐色粘質土が主体で少量のローム粒子を含む。  
 III 暗黄褐色土 II層に比べ焼土粒をやや多く含む他、微量の炭化物が含まれる。

- VII 黒色土 少量の焼土粒・ローム粒を含む。  
 IV 暗灰褐色土 ローム粒を炭核に含み、微量の焼土粒を含む。  
 V 黒色土 微量のローム粒を含む。  
 VI 黒褐色土 少量のローム粒と焼土粒を含む。  
 VIII 暗黄褐色土 灰褐色粘質土とロームブロックが混在する。  
 S J 69カマド  
 VIII 暗褐色土 焼土粒子を少量含む。  
 IX 暗褐色土 焼土粒子と白色粘土を含む。

0 2m

第171回 B区第68・69号住居跡



った(第1・2層)。

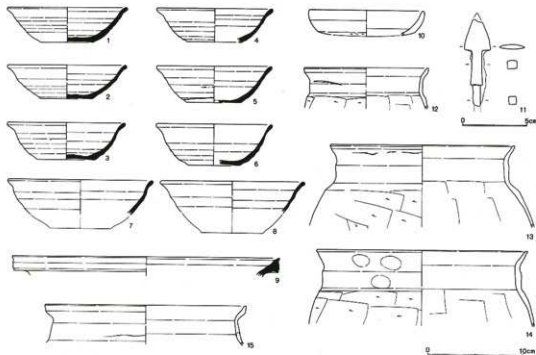
カマドは東壁の中央からわずかに南に寄った位置に設けられ、壁を40cm切り込んで構築されていた。規模は焚口から先端までの長さ82cm、幅60cmである。底面は焚口付近が最も深く床面下12cmほど掘り込まれていた。燃焼部は概ね平坦で、先端は急角度で立ち上がる。覆土は7層に分かれる。第II・III層が天井部崩落土に相当し、第IV・VI層は流入土と思われる。火床面は第IV層下面であろうか。袖はロームブロック混じりの灰褐色粘質土を主体に構築されていた。遺存状態は悪く壁内に僅かに残る程度である(第VII層)。

貯蔵穴はカマド脇の南東コーナー部に位置する。形態は楕円形を呈し、規模は長径72cm、短径58cm、深さは15cmと浅い。貯蔵穴底面から検出されたビットは覆土の状態から第69号住居跡に伴うものと考えられた。

ビットは4本検出された。配置は不規則でP<sub>1</sub>、P<sub>4</sub>の深度が10cm以下と浅いことから、少なくとも4本支柱穴にはならないものと考えられる。

出土遺物は比較的多く土師器、須恵器、幡羽口小片と鉄鎌がある。出土数を示すと土師器は坏が口縁部破片数で4点(混入)、甕11点、台付甕(底部)1点、須恵器は坏類37点、蓋1点、鉢1点、瓶類1点となり、須恵器坏類と土師器甕が大多数を占める。

須恵器坏(第172図1～6)は体部中位に膨らみをもち、口縁部は肥厚気味に外反する。底部は回転糸切り後無調整で、底径は口径の1/2以下に縮小しているなど、器形及び調整からみてほぼ同類として括れるものである。土師器甕類(12～15)は典型的な「コ」の字状口縁となっている。鉄鎌(11)は残長6.8cm、短頭闊筥被長三角形形式に属する。遺物様相から稲荷前XIII期に比定される。



第172図 B区第68号住居跡出土遺物

B区第68号住居跡出土遺物観察表(第172図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	環	(12.4)	3.7	5.5	AB	A	オリーブ灰	60%	No259 床面
2	環	(12.2)	3.5	5.5	ABC	A	青灰	40%	No45,212 覆土(+11~15cm)
3	環	(12.2)	3.9	6.0	ABC	B	灰	45%	No123,184,他 床面
4	環	(12.0)	3.5	5.7	ABC	A	灰	20%	No102 覆土(+6cm)
5	環	(12.0)	4.3	(5.8)	ABC	B	橙	35%	No41,229 覆土(+16~18cm)
6	環	(12.0)	4.3	(5.4)	ABC	C	黄橙	20%	No25 覆土(+15cm) 酸化焙焼成
7	碗	15.0	3.7		ABC	A	緑灰	15%	No190,193 覆土(+7~8cm)
8	碗	(14.9)	3.3		ABC	B	にぶ黄	20%	No140,277 カマド内
9	鉢?	(28.0)	2.0		ABCE	B	浅黄橙	15%	No67 覆土(+7cm) SJ66No14と接合
10	環	(11.9)	2.6		ABE	B	橙	15%	No284 カマド内 北武蔵系?
11	鉢								No207 覆土(+18cm) 残長6.8cm
12	台付甕	(13.0)	7.8		ABEF	B	橙	35%	No128,236 覆土(+12cm)
13	甕	(19.2)	8.5		ABEF	B	橙	15%	No289,291,他 床面
14	甕	(22.0)	7.8		ABEF	A	にぶ黄	20%	No257,281 床面
15	甕	(21.0)	4.1		ABEF	A	橙	15%	No148 覆土(+18cm)

B区第69号住居跡(第171図)

F-11区に位置し、第68号住居跡に切られていた。形態は長方形を呈し、規模は長軸5.36m、短軸4.44m、深さは約15cmである。主軸方位はN-8°-Wを示す。

床面はほぼ平坦である。覆土は暗褐色土単層で、ロームブロックが霜降り状に混在していた(第6層)。堆積環境は人為的な埋め戻しに換るものと推定される。

カマドは北壁に位置するが遺存状態は極めて悪い。壁内の施設は完全に取り去られた状態で、先端部は第68号住居跡のカマドに切られていた。床面を掘り下げた状況は観察されなかった。覆土は焼土と白色粘土を含む暗褐色土が僅かに遺存する程度で埋没状況は不明とせざるを得ない(第Ⅷ-Ⅸ層)。

ピットは5本検出された。P<sub>1</sub>-P<sub>4</sub>は配置から見て主柱穴と考えられるが、P<sub>4</sub>を除くと深度が極めて浅い。P<sub>5</sub>は第68号住居跡の貯蔵穴の下部に検出された。小ピットではあるが本住居に伴う可能性がある。

出土遺物は少ない。9世紀後半代の明らかな混入遺物を除くと全て土師器で、環、皿、甕、小形甕、台付甕の各器種からなる。環は模倣坏系の比企型環である。第173図1は小形甕、2は胎土から北武蔵系の皿口縁部片と考えられる。住居に伴う遺物が少ないために時期決定は難しいが、土器様相からみて、稻荷前Ⅳ期~Ⅵ期の間に位置付けられるものとする。



第173図 B区第69号住居跡出土遺物

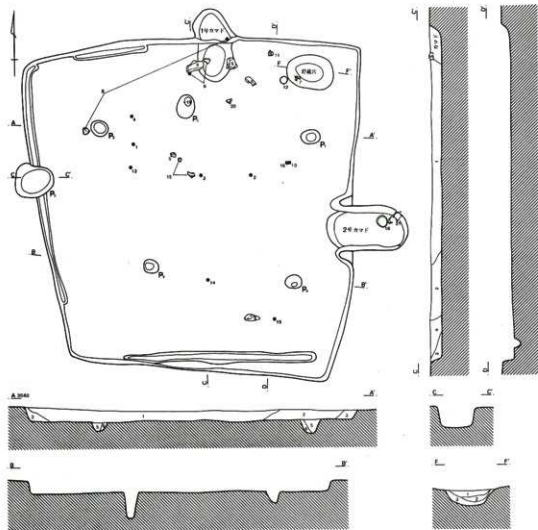
B区第69号住居跡出土遺物観察表(第173図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	小形甕	(12.0)	3.7		ABC	A	にぶ黄	10%	No10 覆土(+13cm)
2	皿	(16.0)	2.4		ABEF	B	橙	5%	No67 覆土(+10cm) 北武蔵系

Ｂ区第70号住居跡(第174・175図)

Ｂ・Ｃ-11区に位置する。形態は方形を基調とするがかなり歪みがある。規模は長軸5.30m、短軸5.26m、深さは約20cmを測る。主軸方位はN-3°-Wを示す。

床面はほぼ平坦でカマド前面と住居中心部は堅く踏み固められていた。覆土は4層に分かれる。カマドは北壁と東壁にそれぞれ1基ずつ検出された。第1号カマドは北壁に位置し、壁を50cm切り込んで構築されていた。焚口部から先端までの長さは1.15m、壁ラインでの幅は0.65mである。



- 1 暗褐色土 多量のローム粒子和ロームブロックを薄降り状に含む。焼土と炭化物の含有量は少ない。
- 2 暗褐色土 基本的に第1層と同一だがローム粒子和ロームブロックの含有量は少ない。
- 3 黒褐色土 少量のローム粒子和微量の炭化物粒子を含む。
- 4 暗褐色土 やや大粒のロームの粒子が多量に含まれる。
- 5 暗褐色土 少量のローム粒子和炭化物と焼土粒子を含む。
- 6 褐色土 ローム粒子和多量を含む。

貯蔵穴

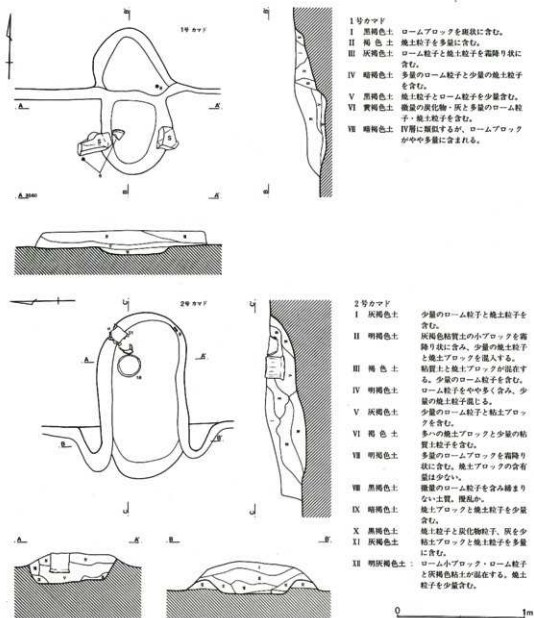
- 1 暗褐色土 ローム粒子和多量に含み、微量の炭化物が混じる。
- 2 褐色土 多量の炭化物と少量のローム粒子を含む。
- 3 灰褐色土 ローム粒子和多量に含み、少量の炭化物が混じる。

0 2m

第174図 B区第70号住居跡

壁内には袖は検出されず、僅かに床面下の掘り込み部分が遺存していたに留まる。また壁外部分の埋土は不自然な堆積状況が認められ(第I~III層)、人為的に埋め戻された可能性もある。カマド前面の床面付近から角礫が数個体出土したが、直接カマドに使用されたものではないようである。

第2号カマドは東壁に位置し、壁を90cm掘り込んで構築されていた。規模は長さ1.30m、幅0.70mを測る。底面は比較的フラットで先端部に向かって緩やかに延びる。覆土は12層に分かれ、粘土と焼土の含有量は比較的少なかった。第I層は住居埋土、第II~VII層は概ね天井部崩落土に相当するものと考えられる。第X層は灰層であろう。袖はローム混じりの灰褐色粘質土を主体に構築され



第175図 B区第70号住居跡カマド

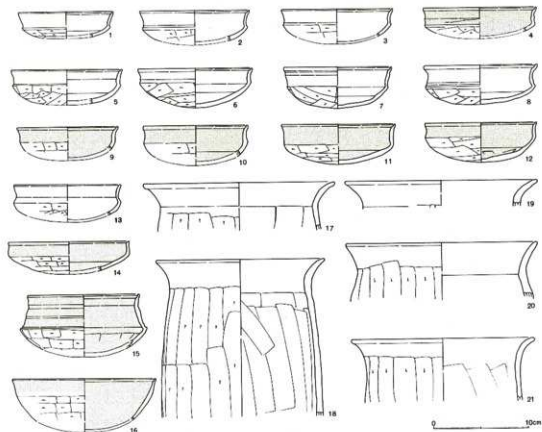
ていた(第XII層)。調査の最終段階に断面を断ち割ったところ、遺存状態は予想以上に悪いことが判明した。また、カマド内から口縁部を下にした状態で土師器甕(第176図18)が出土した。袖の遺存状態及び覆土の堆積状況から第1号カマドから第2号カマドに作り替えたものと考えられる。

貯蔵穴は北東コーナー部に位置する。形態は楕円形で、規模は長径74cm、短径54cm、深さ25cmである。ピットは6本検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は主柱穴に相当する可能性があるが、P<sub>3</sub>がやや内側に寄っているために歪んだ配置となってしまう。P<sub>5</sub>の帰属は不明。P<sub>6</sub>は伴うものではない。

壁溝は北壁、西壁と南壁に部分的に巡る。南壁では壁ラインから内側にずれていたが、建替えた痕跡は確認できなかった。

出土遺物には土師器と須恵器がある。土師器は坏が最も多く23点、以下碗が3点、甕が8点、壺が1点検出された。須恵器は坏底部小片が1点検出されたに留まる。

土師器坏(第176図1~14)は比企型坏が主体を占める。1~8は模倣坏系、9~12・14は口縁部下に腰をもつタイプである。口径は11cm代が主体をなし、10cm代と12cm代に分布する。全体に腰高の器形で底部の扁平化はさほど顕著ではない。14は推定口径12.6cmと最も大きく、形態的にもやや古い様相が認められる。逆に1は口径が小さく底部が扁平化しており混入の可能性が高い。甕(17~21)は胴部が縦方向にヘラケズリされる長甕で、口縁部がゆるく斜め上方に延びるもの(17・18・20・21)と、口縁部が短く屈曲度の強いもの(19)がある。主体となる土器の様相から稲荷前III期に比定される。



第176図 B区第70号住居跡出土遺物

B区第70号住居跡出土遺物観察表(第176図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(10.8)	2.7		ABC	A	にぶい	20%	No22 覆土(+15cm) 無彩
2	坏	(11.5)	3.2		ABC	A	にぶい	10%	No53 覆土(+8cm) 無彩
3	坏	(11.7)	2.9		ABC	A	にぶい	10%	No25 覆土(+15cm) 無彩
4	坏	(11.8)	2.6		ABC	A	にぶい	15%	No16 床面 赤彩
5	坏	(11.6)	3.6		ABC	A	にぶい	30%	No79 覆土(+12cm) 無彩
6	坏	12.0	4.1		ABC	A	にぶい	60%	No71,83 1号カマド内 無彩
7	坏	(11.2)	4.3		ABC	A	にぶい	35%	No74 貯穴内(-6cm) 無彩
8	坏	11.8	4.1		ABC	A	にぶい	55%	No70,76 1号カマド内 無彩
9	坏	(10.6)	2.5		ABC	A	にぶい	15%	No91 2号カマド内 赤彩
10	坏	(11.0)	3.3		ABC	A	にぶい	15%	No52 覆土(+5cm) 赤彩
11	坏	11.9	4.2		AB	A	にぶい	40%	No72 覆土(+9cm) 赤彩
12	坏	11.6	4.1		ABC	A	にぶい	100%	No73 覆土(+5cm) 赤彩
13	坏	(11.0)	3.2		ABC	A	にぶい	10%	No24 覆土(+14cm) 無彩
14	坏	(12.6)	3.1		ABCE	A	にぶい	20%	No47 覆土(+12cm) 赤彩
15	椀	11.6	5.7		ABC	A	にぶい	50%	No77,78 覆土(+9~13cm) 赤彩
16	椀	(15.0)	4.4		ABC	A	にぶい	10%	No52 覆土(+15cm) 赤彩
17	甕	20.0	5.0		ABC	A	橙	15%	2号カマド内覆土
18	甕	17.4	16.4		ABC	A	浅黄橙	70%	No88 2号カマド内
19	甕	(20.0)	2.6		ABC	A	にぶい	10%	No58 覆土(+15cm)
20	甕	20.0	6.0		ABC	B	橙	30%	No84 2号カマド内
21	甕	(19.0)	6.5		ABC	A	にぶい	20%	No75 覆土(+8cm)

## B区第71号住居跡(第177図)

調査区北東部のB・C-11-12区、第70号住居跡の東側に近接して位置する。形態はほぼ方形で、規模は長軸3.44m、短軸3.30m、深さは西壁部で20cmを測る。主軸方位は西壁を基準にするとN-2°-Wを示す。

床面はほぼ平坦である。覆土は4層に分けられ、第2・3層中にロームが多量に含まれていた。

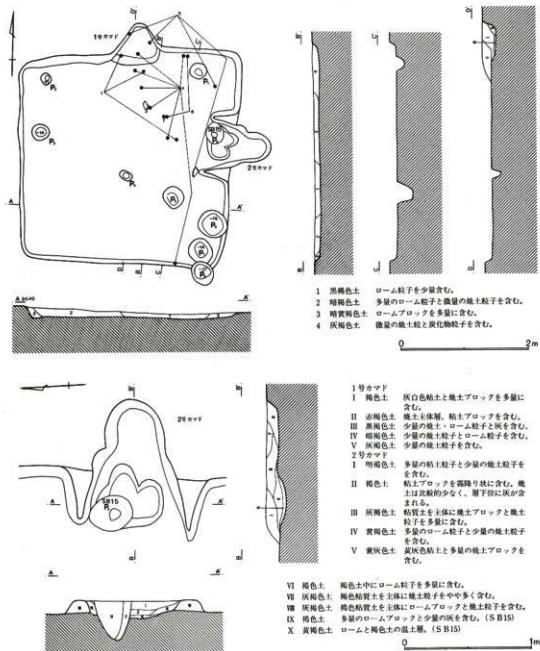
カマドは北壁と東壁に各1基検出された。第1号カマドは北壁に位置し、壁を約40cm切り込んで構築される。規模は長さ68cm、幅80cmで、底面は床面から10cm程掘り込まれていた。土層堆積から袖等の壁内施設は取り払われていることが判明した(第V層)。

第2号カマドは東壁にあり、壁を60cm切り込んで構築されていた。袖の先端から奥壁までの長さは1.15m、焚口部の幅は75cmである。底面自体はフラットで床面との明確な段差は見られない。また焚口に掘り込まれたピットは、第15号掘立柱建物跡柱穴に相当しカマドに伴う施設ではない。袖は基底部が遺存しており、ローム混じりの褐色粘土を主体に構築されていた。カマド覆土は8層に分かれる。第VI層上面が火床面、第IV層は流入土か。他は天井部及び袖部の崩落土と思われる。覆土の状況と袖の有無から見て、1号カマドから2号カマドに付け替えられたものと推定される。

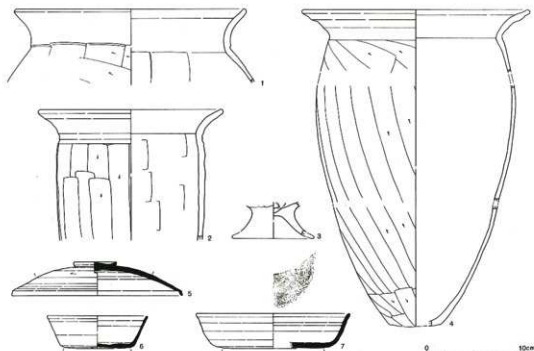
ピットは8本検出されたが住居に伴うものは明確にできなかった。

出土遺物には土師器と須恵器があるが量的には少ない。土師器は口縁部破片数で坏が3点、甕が3点、台付甕が1点(脚部)、壺1点、須恵器は坏が4点、蓋と甕が各1点出土した。土師器坏類は全て小片で図化可能なものがない。甕は厚手の長胴甕(第178図2)と「く」の字状口縁甕(4)の2タイプ

ブがある。須恵器環には東松山市立野遺跡出土例の系譜を引くような小振りで平底風のもの(6)と、口径16cmを超える大振りのもの(7)がある。何れも底部は全面回転ヘラケズリ調整され、底部内面はロクロナデ後中央部はナデ調整される。前者の口縁部外面には沈線風(技法的にはロクロナデによる)の凹みが1条巡っている。須恵器蓋(5)は環状鈕をもつもので笠形に緩やかに開く。鈕径は4.4cm。床面の破片と1号カマド上面の破片同士が接合した。須恵器環類と土師器甕の様相から稲荷前V期を中心とした時期に比定されよう。



第177図 B区第71号住居跡・カマド



第178図 B区第71号住居跡出土遺物

B区第71号住居跡出土遺物観察表(第178図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	壺	(24.0)	7.8		EJ	A	いぼ濁	20%	No26,34 覆土(+3~5cm)+1号カマド
2	甕	(19.0)	13.7		AB	B	浅黄橙	25%	No30 床面 白色針不明 口縁内面風化
3	台付甕		3.3		ABE	A	橙	80%	覆土
4	甕	23.7	(3.2)	(5.4)	ABE	B	橙	30%	No27,30,他 床面
5	蓋	17.8	3.5		ABC	A	オリーブ系	70%	No13,41 床面 カマド上面
6	坏	(10.4)	3.4	6.9	ABC	B	灰	40%	No29,44 床面
7	坏	(16.0)	3.7	(10.6)	ABC	A	灰	25%	No29 床面 底部内面ロクロナデ

B区第72号住居跡(第179図)

調査区北東部のC-12区に位置する。第9号掘立柱建物跡と重複し、貼床の存在から本住居跡の方が新しいものと考えられる。形態は隅丸気味の方形を呈し、規模は長軸3.00m、短軸2.82m、深さは5cm前後、最深部でも12cmと全体的に浅い。長軸方向を主軸とするとN-90°-Eを示す。カマド自体の主軸はそれから約45°南に振れる。

床面は中央付近が若干凹んでいた。覆土は上下2層に分かれ、下層にロームブロックが多量に含まれていた(第2層)。

カマドは南東コーナー部に位置し、設置場所としては極めて特異な例といえる。焚口から先端までの長さは56cm、幅40cmと非常に小規模なものである。覆土は第I・II層が天井部崩落土、第III層下面が灰層と思われる。軸は検出されなかった。

貯蔵穴はカマド脇の南壁際に設けられていた。形態は楕円形を呈する。規模は長径66cm、短径52

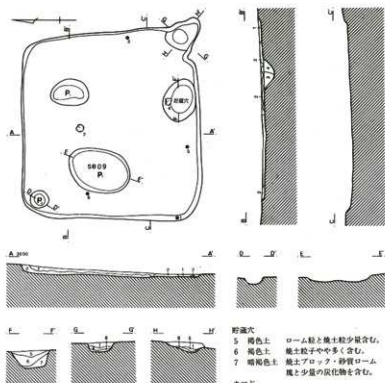


cm、深さ30cmで、底面は鍋底状に凹んでいた。

ピットは2本検出された。P<sub>1</sub>は住居に伴うものであることが判明したが、P<sub>2</sub>に関しては遺構に帰属するかどうかは明らかにできなかった。

出土遺物は少ない。第180図1は合子形の坏身で、蓋受けの下部に1条の沈線が巡る。底部中心には粘土層が出勝状に残る。体部下端は回転ヘラケズリ調整で、底部から体部にかけてヘラ記号と思われる数本の細い沈線が刻まれていた。東海地方からの搬入品と推定される。2は須恵器坏とした

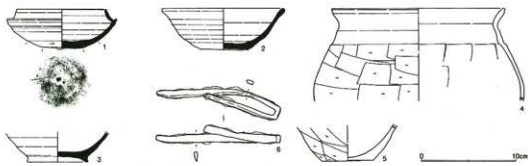
が、還元焰焼成を受けた痕跡が見られない。ロクロ土師器の範疇で捉えた方がよいかもしれない。3は須恵器の高台付碗。底部には回転糸切り痕が残る。4は「コ」の字状口縁甕。5は同類甕の底部で、底部外面には砂が付着し、ヘラケズリは認められない。6は折れ曲がった状態の刀子と思われるが、錆化が激しく関の有無は不明瞭である。1の須恵器坏は明らかに混入であるため除外すると、他の須恵器坏と甕の様相から稲荷前XIV期に位置付けられよう。



- 1 暗褐色土 粘土粒・ローム粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 ロームアロックを多量に含む。
- 3 暗褐色土 多量のローム粒を含む。
- 4 黄褐色土 多量のロームと少量の粘土粒を含む。

- 野瀬穴
- 5 褐色土 ローム粒と粘土粒少量含む。
  - 6 褐色土 粘土粒子やや多く含む。
  - 7 暗褐色土 粘土アロック・砂質ローム塊と少量の炭化物を含む。
- カマド
- I 暗褐色土 粘土アロックと粘土アロックを少量含む。
  - II 暗褐色土 粘土粒・ローム粒微量含む。
  - III 赤褐色土 多量の粘土アロックと少量の炭化物を含む。

第179図 B区第72号住居跡



第180図 B区第72号住居跡出土遺物

B区第72号住居跡出土遺物観察表(第180図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	9.3	4.1	4.2	AB	A	帯付-灰	100%	No24 床面 底部へう切り 東海産か?
2	坏	12.6	4.3	5.1	ABC	C	にい體	95%	No53 床面 軟質で酸化焙焼成か
3	高台椀		3.2	6.2	ABC	C	灰白	60%	No15 床面 底部完存 承切り痕残す
4	甕	(18.2)	9.7		ABEF	A	浅黄橙	20%	貯穴内覆土
5	甕		3.7	5.4	AB	A	にい體	30%	No13 床面 底部外面砂が付着する
6	刀子?					A	にい體		No5 床面 残長13.2cm

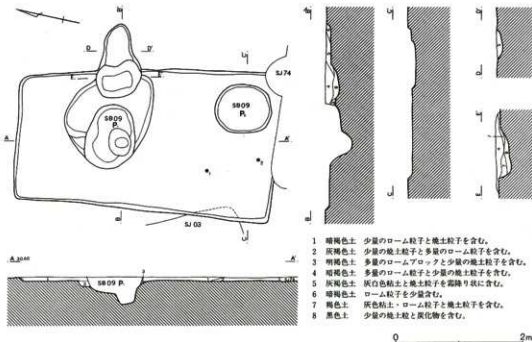
B区第73号住居跡(第181図)

C-11-12区に位置する。3軒の住居跡と重複し、新旧関係は第3・4号住居跡よりも新しく、第74号住居跡よりも古いことが判明した。形態は横長の長方形で、規模は長軸4.10m、短軸2.24m、深さは5~10cmと非常に浅い。主軸方位はN-72°-Eを示す。

床面はほぼ平坦である。覆土は主に暗褐色土と灰褐色土で構成される(第1・2層)が、層厚が薄いために堆積状態の詳細は明らかにできなかった。

カマドは北壁に位置し、壁を70cm切り込んで構築されていた。規模は長さ1.14m、燃焼部幅0.72mで、燃焼部底面は床面よりも15cm程の深さで掘り込まれていた。煙道部の底面はほぼ水平方向に延びている。覆土は5層に分かれる(第4~8層)。第5~8層はカマドに由来する土層、第4層はカマド崩落後の埋土と推定される。袖は断面観察によっても検出されなかった。

ビット及び貯蔵穴は検出されなかった。住居内に存在する第9号掘立柱建物跡は上面に貼床が観察されず、住居よりも新しい可能性が高い。また、カマド前面に浅い土塊状の掘り込みが検出され



第181図 B区第73号住居跡

たが、上面に貼床が確認されたことから住居の掘方と推定される。

出土物は非常に少ない。土師器と須恵器があるが後者は混入である。土師器では坏が口縁部破片で3点、小形甕が1点あり、甕には口縁部の破片はない。第182図1と2は小振りの比企型坏で赤彩が施されている。時期決定の資料に乏しいが、土師器坏と重複する第74号住居跡の土器様相から見て稲荷前IV期頃に位置付けておきたい。



第182図 B区第73号住居跡出土遺物

B区第73号住居跡出土遺物観察表(第182図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	施成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(11.1)	3.1		ABC	B	にふい	20%	No16 床面 赤彩
2	坏	(11.4)	2.2		ABC	A	にふい	10%	No12 覆土(+5cm) 赤彩
3	坏	(13.7)	4.0		ABC	B	オリ-7灰	15%	覆土

#### B区第74号住居跡(第183図)

C-11・12区に位置する。第2～4号住居跡及び第73号住居跡の4軒と切り合い、何れの住居よりも本住居跡が新しい。形態は長方形を呈し、規模は長軸4.34m、短軸3.14m、深さは10～15cmを測る。主軸方位はN-4°-Wを示す。

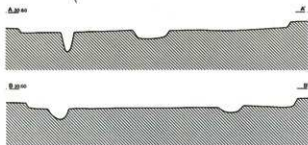
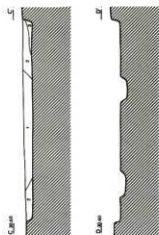
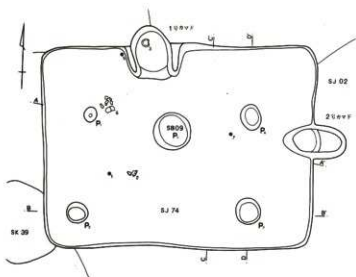
床面はほぼ平坦である。覆土は3層に分かれる(第1～3層)。堆積土の状況から全てが自然堆積とするのは無理がある。

カマドは北壁と東壁に各1基検出された。第1号カマドは北壁に位置し、燃焼部は壁を30cm切り込んで構築されていた。規模は焚口から奥壁までの長さ83cm、燃焼部幅65cmである。燃焼部は床面から5cm程掘り下げられ、底面は比較的平坦であった。覆土は7層に分かれ、第II・III層が天井部崩落土、第IV層が灰層に相当しよう。袖部はローム混じりの褐色粘土を用いて構築されていた(第VII層)。また、天井部崩落土層中から土師器坏(第184図3)が伏せた状態で検出されている。

第2号カマドは東壁に位置し、壁を55cm切り込んで構築されていた。規模は全長99cm、幅58cm、床面からの深さは10cm程である。覆土は5層に分かれ、第V層は貼床と思われる。袖の痕跡はまったく検出されなかった。土層と袖の有無から2基のカマドは同時に存在したのではなく、第2号カマドから第1号カマドに付け替えられたものと考えられる。

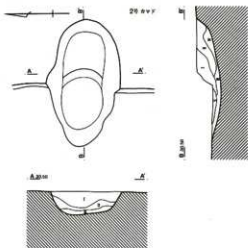
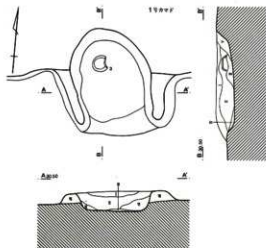
ピットは4本検出された。P<sub>1</sub>からP<sub>4</sub>は配置からどれも主柱穴に相当しよう。住居中央部の柱穴は第9号掘立柱建物跡である。

出土物は土師器と須恵器があるが、量的には少ない。出土数を示すと、土師器では坏が口縁部破片数で5点、甕が4点、小形甕が1点、須恵器は坏底部が2点、蓋口縁部が1点、甕口縁部が2点となる。土師器坏(第184図1～4)は模倣坏系の比企型坏(1～3)と模倣坏(4)がある。前者は口唇端部の外反がなく器形は偏平化している。土師器甕と須恵器には図示できるような良好な資料がないが、須恵器坏の底部破片は丸底風で回転ヘラケズリが施されている。7は不明鉄製品。断面方形で中央部が幅広となる。土師器坏の様相から稲荷前V期に比定される。



- 1 暗褐色土 少量の焼土粒子とやや多量のローム粒子を含む。
- 2 暗灰褐色土 少量のローム粒子と多量の焼土粒子を含む。
- 3 暗黄褐色土 ローム質土を主体に暗褐色土ブロックを含む。

0 2m

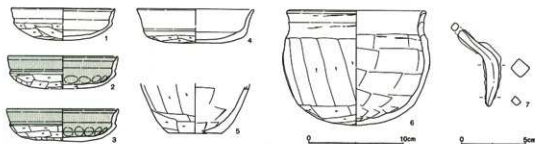


- 1号カマド
- I 黒褐色土 焼土粒とローム粒を少量含む。
  - II 明褐色土 多量の褐色粘土と焼土粒子を含む。
  - III 暗黄褐色土 多量の粘土ブロックと少量の焼土粒子を含む。
  - IV 暗褐色土 炭化物粒子と焼土粒子を多量に含む。
  - V 暗黄褐色土 ローム粒子を多量に含む。
  - VI 褐色土 褐色粘土と焼土粒子を多量に含む。
  - VII 褐色土 褐色粘土を主体にロームブロックを含む。

- 2号カマド
- I 褐色土 多量の褐色粘土ブロックと少量の焼土を含む。
  - II 褐色土 1層と類似するが、焼土粒子を多量に含む。
  - III 黒褐色土 少量の焼土粒子と炭化物粒子を含む。
  - IV 暗褐色土 微量の焼土粒子と炭化物粒子を含む。
  - V 灰白色土 灰白色粘土を主体に少量の焼土粒子を含む。

0 1m

第183図 B区74号住居跡・カマド



第184図 B区第74号住居跡出土遺物

B区第74号住居跡出土遺物観察表(第184図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(10.8)	3.4		ABC	A	橙	25%	No71 床面 外面の赤彩不明
2	坏	(11.5)	3.4		ABC	A	にぶい橙	45%	No76 床面 赤彩 内面指押え痕明瞭
3	坏	11.7	3.4		ABC	A	にぶい橙	90%	No77 カマド内 赤彩
4	坏	(12.2)	3.6		ABCE	B	にぶい黄	35%	覆土 無彩 整形やや雑
5	甕	5.2		(5.8)	ACE	A	にぶい黄	25%	No6 床面
6	小形甕	14.2	12.0		ABCE	B	橙	60%	No75 床面
7	鉄製品								No25 覆土(+4cm) 不明鉄製品

B区第75号住居跡(第185図)

D-11区に位置する。第13号獨立柱建物跡に一部切られている。形態は方形を呈し、規模は長軸6.74m、短軸6.14m、深さは10cm程である。主軸方位はN-80°-Eを示す。

床面はほぼ平坦である。覆土は5層に分かれる。第1層中にはロームブロックが多量に含まれ人為的な埋め戻しによるものと推定される。また、第3層には褐色粘土と焼土の混入が目立ち、カマド袖部の崩壊土と考えられる。

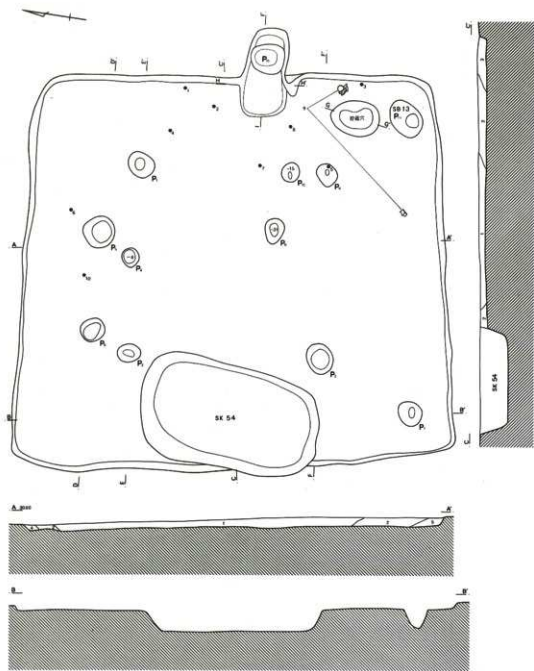
カマドは東壁に位置し、壁を80cm掘り込んで構築される。規模は焚口部から先端までの長さ1.40m、焚口部幅74cm。然焼部と煙道部とは段差がみられるが、境界部にはビットの攪乱を受けていた。覆土は7層に分かれる。第I・II層が天井部崩落土、第IV層が灰層に相当しよう。第III層は掘方と思われる。袖の遺存状態は悪い。左袖はほとんど流失しており、断面観察によっても痕跡を見出すことはできなかった。右袖は基底部が僅かに残存していた(第VI層)。

貯蔵穴はカマド南側に隣接して設けられている。形態は楕円形を呈し、規模は長径78cm、短径55cm、深さ20cmである。

ビットは10本検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は主柱穴と考えられるが、他のビットは後世の掘り込みと推定される。

また、南壁際には第54号土壌が重複していた。出土遺物から8世紀代の所産と考えられ、本住居跡に直接伴うものではない。

出土遺物には土師器、須恵器、灰釉陶器と瓦がある。出土数を示すと土師器では坏が口縁部破片数で7点、皿が1点、甕が5点、台付甕(脚部)が2点、須恵器では椀、蓋、甕が計6点、灰釉長頸瓶が1点となる。土師器以外は全て後世の混入と考えられる。



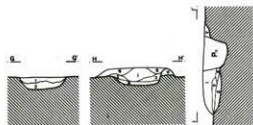
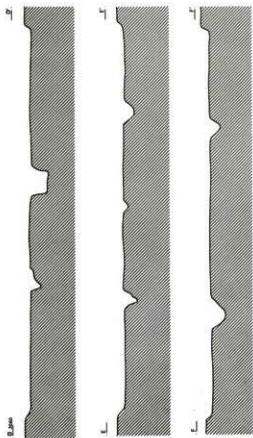
- 1 明褐色土 ローム粒子・焼土粒子と径2-5cm次のロームブロックを多量に含む。
- 2 褐色土 ローム粒子を少量含む。
- 3 褐色土 少量のローム粒子と多量の褐色粘土ブロック・焼土粒子を含む。
- 4 暗黄褐色土 褐色土粒子とローム粒子を多量に含む。
- 5 褐色土 焼土粒子と炭化物粒子を少量含む。

貯蔵穴

- 1 暗灰褐色土 微量の焼土粒子と少量のローム粒子を含む。部分的にロームブロックを含む。
- 2 暗黄褐色土 多量のローム粒子とロームブロックを含み、少量の焼土粒子が混じる。

0 2m

第185図 B区第75号住居跡



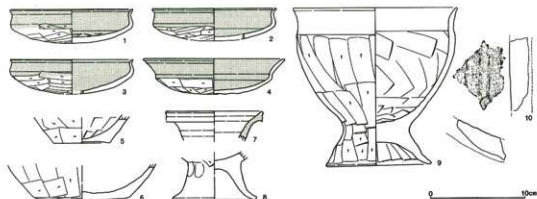
カマド

- I 灰褐色土 多量の褐色粘質土と焼土粒子・焼土ブロック、少量のローム粒子を含む。
- II 褐色土 褐色粘質土を主体とする。焼土粒子とローム粒子をやや多く含む。
- III 黄褐色土 ローム粒子と褐色粘質土が混在する。焼土粒子と炭化物を少量含む。
- IV 黒褐色土 焼土粒子と炭化物粒子を多量に含む。
- V 褐色土 焼土とローム粒子を多量に含む。
- VI 明褐色土 褐色粘土を主体としロームブロックが混在する。
- VII 暗褐色土 焼土粒子と焼土粒子をやや多く含む。

0 2m

土師器環(第186図1~3)は比企型環である。口縁部内面に沈線をもつもの(1・2)と沈線のないもの(3)がある。口径は13cm程と大きく赤彩が施されている。前二者は扁平な器形で、3は腰高である。4は比企型環系の皿と考えられ赤彩が施されている。7は灰輪陶器の長頸瓶と思われる。10は平瓦で凸面が剥落している。凹面は布目が残り、横骨痕が認められる。土師器環の様相から稻荷前I期~II期にかかる頃と考えられ、集落としては最古段階に位置付けられる。





第186図 B区第75号住居跡出土遺物

B区第75号住居跡出土遺物観察表(第186図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	環	(12.8)	3.6		AB	A	にぶい橙	50%	No.78 床面 赤彩 白色針不明瞭
2	環	(13.0)	3.2		ABC	A	淡黄	25%	No.79 覆土(+8cm) 赤彩
3	環	(12.8)	3.6		ABE	C	にぶい橙	25%	No.56 床面 赤彩 白色針不明瞭
4	皿	(14.8)	3.7		AB	A	橙	30%	No.77 覆土(+6cm) 赤彩
5	甕		2.7	(6.0)	ABC	A	浅黄橙	20%	No.52 覆土(+7cm) 底部外面木炭痕残
6	壺		3.7	(10.0)	ABC	A	浅黄橙	25%	No.22 覆土(+6cm) 内面ナデ
7	長頸瓶	(10.1)	3.2		J	A	灰白	5%	No.68 覆土(+5cm) 内面自然輪付着
8	台付甕		5.0	(10.6)	ABC J	B	淡橙	70%	No.80 床面
9	台付甕	17.2	16.6	10.8	ABC	A	浅黄	90%	No.81,83 床面 外面二次被熱を受ける
10	平瓦				ABCE	C	浅黄橙		No.20 床面

B区第76号住居跡(第187図)

C・D-12区に位置し、第13号方形周溝墓と第2号住居跡を切って構築されていた。形態は長方形を呈し、規模は長軸4.90m、短軸4.44m、深さは約15cmである。主軸方位はN-7°-Wを示す。

床面は概ね平坦で中央部からカマド前面は堅く締まっていた。覆土は9層に分かれる。第2層にはロームブロックが多量に含まれ、また同層上面は凹凸が顕著で部分的に炭化物層(第3層)が堆積するなど、少くとも埋土の一部は人為的に埋め戻されたものと推定される。

カマドは北壁に位置し、燃焼部は壁を50cm切り込んで構築されていた。規模は長さ1.10m、幅84cmで床面下の掘り込みは8cmと浅い。底面は細かい凹凸が比較的顕著であった。覆土は8層に分かれ、第II~V層は天井部及び袖部の崩落土、第VI層が灰層と考えられる。袖は基底部の灰白色粘土がわずかに残存する程度で遺存状態は悪い。

貯蔵穴はカマド東側の壁際に設けられていた。形態は楕円形を呈し、規模は長径72cm、短径46cm、深さ16cmである。覆土上層にはカマドから掻き出されたものと思われる灰が流入していた(第9層)。

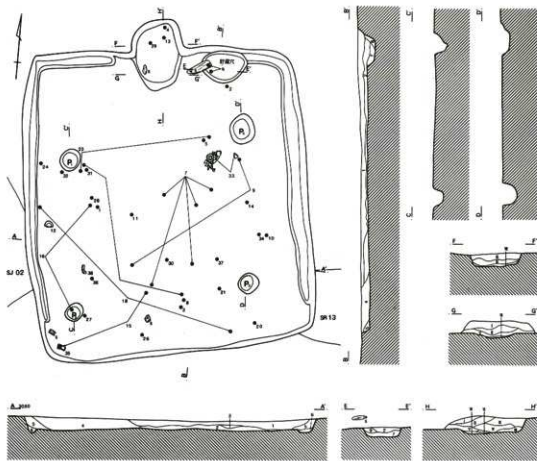
ピットは4本検出され、何れも主柱穴と考えられる。壁溝はカマドと南壁部を除いた部分に検出された。

出土遺物は土師器、須恵器、鉄鎌、石製紡錘車と砥石がある(第188・189図)。出土数を示すと、土師器は坏が口縁部破片数で9点、皿が4点、甕が14点、小形甕が1点、台付甕(脚部)3点、壺2点、



鉢2点、須恵器は坏が10点、蓋が11点、甕が1点、壺が1点となる。

土師器坏は比企型坏系のもの(第188図1・2)、北武藏型坏(3~5)がある。6は硬質土師器で口唇部に平坦面をもち、内外面にはヘラミガキが施される。7~10は皿で比企型坏系。焼成・胎土は6の硬質土師器と共通する。須恵器坏は小振りの坏(11~13)と大振りの坏(19~23)の大きく2種に分かれる。11~12は口径10cm、器高4cm前後で形態は類似する。底部は平底に近い丸底で11は手持ちヘラケズリ、12は回転ヘラケズリ調整される。13は体部がヘラケズリ、内面は小口状工具によると思われるナデが施される。部分的に灰色を呈し、比較的堅く焼き締まることから還元焙焼成を受けているものと判断される。胎土に白色針状物質が含まれ、在地産であることは確実であるが須恵器

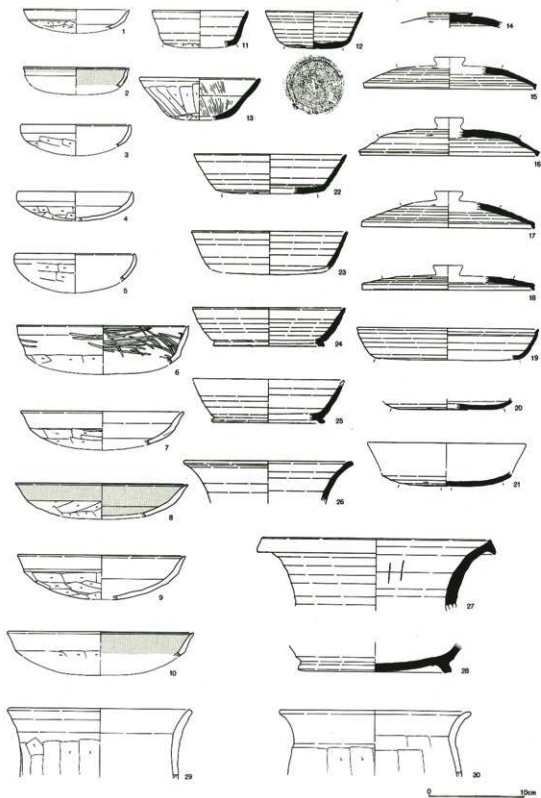


- 1 暗褐色土 少量の焼土粒子・ローム粒子と炭化物を含む。
- 2 褐色土 ロームブロックを塊状に含み、多量の炭化物粒子と焼土粒子を含む。
- 3 黒褐色土 炭化物粒子を主体に多量のローム粒子を含む。
- 4 暗灰褐色土 少量の炭化物・焼土と微量のローム粒子を含む。
- 5 暗黄褐色土 ローム粒子とローム小ブロックを多く含む。
- 6 暗褐色土 ローム粒子を含む。
- 7 暗黄褐色土 ローム粒子を多量に含み、小礫が混入する。
- 8 褐色土 炭化物と焼土粒子を少量含む。
- 9 灰黒色土 灰を主体とし、ローム粒子と焼土粒子を含む。

- カマド
- I 暗褐色土 多量のローム粒子と少量の粘土と焼土を含む。
  - II 明褐色土 多量の灰白色粘土と焼土ブロックを含む。
  - III 灰褐色土 多量の粘土と少量の焼土を含む。
  - IV 暗灰褐色土 多量の焼土粒子と焼土粒子を含む。
  - V 灰白色土 粘土を主に焼土粒子と焼土ブロックを含む。
  - VI 黒褐色土 灰と炭化物粒子を多量に含む。
  - VII 黄褐色土 ローム質土を主として粘土と焼土を含む。
  - VIII 暗褐色土 焼土粒子とローム粒子を少量含む。

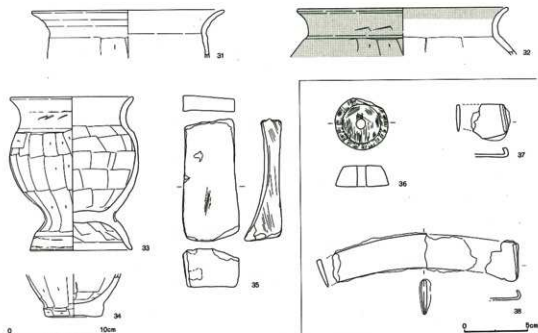
0 2m

第187図 B区第76号住居跡



第188图 B区第76号住居跡出土遺物(1)

環類の系譜からは追えない土器である。19は推定ではあるが口径が19cmにも達する浅身の環である。内面口縁部下には沈線状の凹みが巡る。20～23は丸底風の底部をもつ環で、器形の判明する22は口径16cmとかなり大きい。23・24は高台付環で、高台は底部外縁部に付されている。蓋(14～18)は天井部の比較的低いものであるが器形のわかる資料がない。35は砥石で、幅5.9cm、厚さ4.0cm、重さ270g。上端を欠くが他面は良く使い込まれ平滑。火熱を受け煤が付着していた。36は滑石製紡錘車。直径4.2cm、厚さ1.6cm、重量50g。全面に細かい条線が残る。37・38は鉄鎌である。37は基部のみ残存し、残長2.8cm。端部は折り返されている。38は刃部先端と基部を一部欠く。残長は約15cmで、基部は折り返される。遺物様相からみると稲荷前V期に中心を置くものと推定される。



第189図 B区第76号住居跡出土遺物(2)

B区第76号住居跡出土遺物観察表(第188・189図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	地成	色調	残存	出土位置・その他
1	環	(11.0)	2.0		AB	A	にぶい	15%	No106 覆土(+9cm) 無彩
2	環	(11.0)	2.1		ABC	A	にぶい	10%	No208 覆土(+5cm) 赤彩
3	環	(11.3)	2.3		ABE	A	にぶい	25%	No150 覆土(+6cm) 北武藏系
4	環	(12.0)	3.1		ABE	A	橙	25%	No.カマド内1 カマド内 北武藏系
5	環	(12.4)	2.9		ABE	B	橙	10%	No50 覆土(+4cm) 北武藏系 やや風化
6	環	(18.0)	4.0		B	A	にぶい	25%	No215 床面+貯穴内覆土(上層)
7	皿	(17.0)	3.5		ABC	A	橙	30%	No84,86,他 覆土(+1~10cm) 無彩
8	皿	(18.0)	3.4		AB	A	にぶい	10%	No153 覆土(+14cm) 赤彩
9	皿	(17.5)	4.6		AB	A	にぶい	30%	No137,207 覆土(0~+4cm) 無彩
10	皿	(19.5)	2.6		ABC	A	橙	10%	No171 覆土(+16cm) 内面赤彩
11	環	(10.0)	3.8	(7.7)	ABC	A	灰	10%	No96 覆土(+8cm)
12	環	10.2	3.9		ABC	B	灰白	80%	No205 床面
13	環	(12.6)	4.4		ABC	A	浅黄橙	20%	カマド内No4 カマド内
14	蓋		1.5		ABC	B	灰	80%	No82 床面 径径4.6cm

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
15	蓋	(18.0)	2.3		ABC	A	灰白	25%	No129,139 覆土(+3~7cm) 鈕欠失
16	蓋	(18.6)	2.9		ABC	D	浅黄	35%	No101,126 覆土(+1~18cm)
17	蓋	18.1	2.6		ABC	B	灰	70%	確認面 鈕欠失
18	蓋	(18.0)	1.5		ABC	B	淡黄	20%	No112,188 覆土(+10cm) 鈕欠失
19	坏	(19.0)	3.2	(15.2)	ABC	B	灰白	15%	No15,155 覆土(+1~15cm)
20	坏		1.2	(13.0)	ABC	A	灰	20%	No184 覆土(+7cm)
21	坏		1.7	(13.3)	ABC	A	黄灰	10%	No163 覆土(+7cm)
22	坏	(16.0)	4.1	(11.4)	ABC	A	灰	20%	確認面 ケズリ径10.0cm
23	坏	(16.3)	4.0		ABC	B	暗青灰	30%	No16,51 覆土(+10~12cm) 底部欠
24	高台坏	(16.0)	4.0	(11.5)	ABC	A	灰	10%	No23 覆土(+15cm) 体部器壁厚い
25	高台坏		4.2	(11.6)	ABC	D	灰黄	10%	確認面 器種不明確
26	壺	(17.4)	4.4		ABC	A	暗灰	10%	No199 床面
27	甕	(24.0)	7.5		AB	B	灰白	10%	No127 覆土(+12cm) 南北企産
28	壺		3.1	(14.8)	ABC	A	青灰	35%	No34 覆土(+16cm) 短頸壺底部か?
29	甕	(18.8)	7.3		ABC	B	にぶい壺	25%	No6 カマド内 全体に風化
30	甕	(20.0)	6.8		ABC	A	にぶい壺	10%	No159 覆土(+10cm) 混入か
31	甕	(20.0)	5.0		ABC J	B	浅黄橙	5%	No14 覆土(+14cm) 全体に風化
32	壺	(22.0)	5.0		ABC	A	にぶい壺	10%	No25 床面 赤彩
33	台付甕	12.7	16.0		ABC	B	にぶい壺	70%	No207,208 覆土(+5cm)
34	甕		4.5	(6.0)	ABC	A	にぶい壺	35%	No203 床面
35	砥石					A	にぶい壺		No130 床面 残長12.7cm
36	紡錘車								No111 床面 直径4.2cm 厚さ1.6cm
37	鉢								No211 覆土(+7cm) 残長2.8cm
38	鉢						にぶい壺		No133 床面 幅2.2~3.0cm

## B区第77号住居跡(第190図)

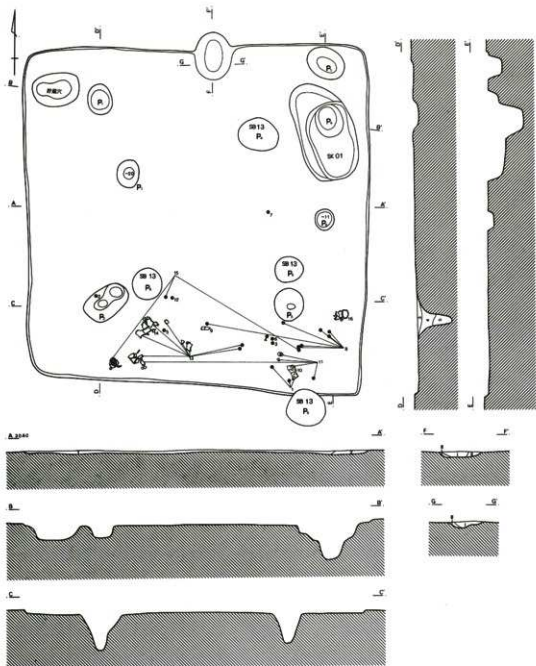
D・E-12区に位置し、第13号掘立柱建物跡の柱穴が床面を切って掘り込まれていた。形態は方形で、規模は長軸5.42m、短軸5.24m、深さは2~8cmと非常に浅い。主軸方位はほぼ座標北を示す。床面は概ね平坦である。覆土は浅く、床面直上に小礫を多量に含む褐色土が堆積していた。

カマドは北壁に位置するが、床面下の掘り込み部分が辛うじて残存するのみで遺存状態は極めて悪い。掘り込みの規模は長さ76cm、幅60cm、深さ10cmで、先端部は壁を26cm切り込んでいた。袖はまったく遺存せず、覆土の状態は不明とせざるを得ない。

貯蔵穴と思われる掘り込みは北西コーナー部に検出された。形態は楕円形を呈し、規模は長径74cm、短径52cm、床面からの深さは20cmである。

ピットは7本検出され、P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>は主柱穴と考えられる。他のピットの帰属は明らかにできなかった。

出土遺物は2点の須恵器(混入)を除くと全て土師器で、大破片は南壁際から出土したものが多く、出土数を示すと、坏が口縁部破片数で10点、椀が1点、甕が4点、台付甕が1点、壺が2点、鉢が2点となる。土師器坏(第191図1~6)は比企型坏で口径は12cm代が主体となる模様である。甕はいわゆる長甕で胴部中位に膨らみが残っている(13~15)。第8図の鉢は外面二次被熱を受けている。坏と甕の様相から稲荷前II期に比定されよう。



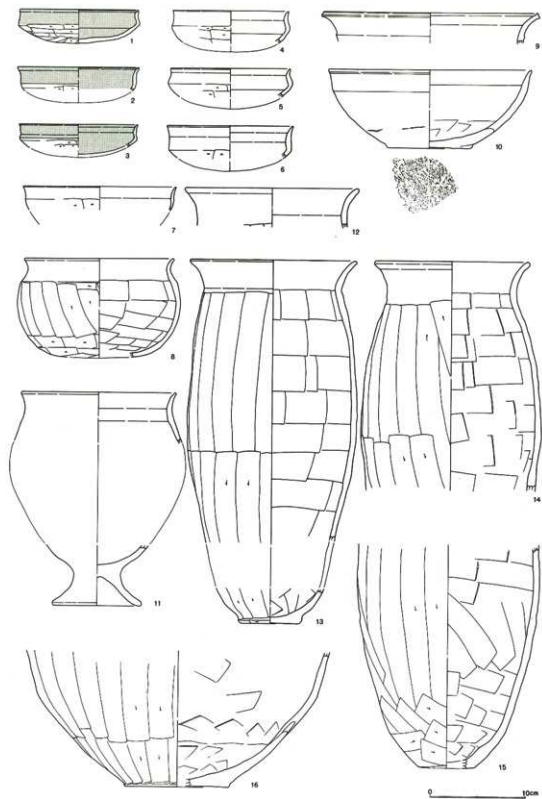
- 1 褐色土 多量の小礫と径3cm程度のロームブロックが少量含まれる。
- 2 黒褐色土 1層とはほぼ同様であるが、ロームブロックの含有量が少ない。
- ピット
- 3 黒褐色土 ローム粒子を少量含む。
- 4 暗黄褐色土 褐色土とロームブロックが露降り状に混じる。
- 5 灰黄褐色土 ロームブロックとローム粒子を主体に、褐色土がブロック状に混じる。

カマド

- I 灰褐色土 少量の粘土粒子・炭化物粒子とやや多量の焼土ブロックを含む。
- II 暗灰褐色土 1層とはほぼ同様であるが、色調がやや暗く小礫が多量に含まれる。
- III 暗灰褐色土 灰色粘土粒子を多量に含む。少量のローム粒子と焼土粒子を混入する。

0 2m

第190図 B区第77号住居跡



第191图 B区第77号住居跡出土遺物

B区第77号住居跡出土物観察表(第191図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	12.4	3.6		AB	B	橙	70%	No92,101,107 覆土(+1~6cm) 赤彩
2	坏	(12.6)	2.5		ABC	A	にぶい橙	10%	No12 覆土(+4cm) 赤彩
3	坏	(12.4)	2.4		ABC	A	橙	10%	No95 覆土(+6cm) 赤彩
4	坏	(12.2)	3.4		ABCE	B	にぶい黄	10%	No54 覆土(+8cm) 無彩
5	坏	(12.5)	3.0		ABCE	B	浅黄橙	10%	No32 覆土(+4cm) 無彩
6	坏	(13.2)	3.4		ABCE	A	橙	5%	No55 床面 無彩
7	碗	(16.0)	2.5		ABC	A	にぶい橙	5%	No38 床面 風化のため赤彩不明瞭
8	鉢	(15.5)	10.4		ABC	B	浅黄橙	45%	No63,65,他 覆土(+1~6cm)
9	壺	(22.4)	3.2		ABC	A	橙	20%	No44 床面 無彩
10	鉢	(21.2)	8.2	(8.7)	ABC	B	にぶい橙	20%	No100 床面 底部木葉痕
11	台付甕	(16.0)	(22.3)	(9.0)	ABCE	B	浅黄橙	15%	No75,97,他 覆土(0~+7cm)
12	甕	(18.0)	4.1		ABCE	A	にぶい橙	5%	No22 覆土(+4cm)
13	甕	17.3	(38.0)	6.1	ABC	A	にぶい橙	80%	No75,118,他 覆土(0~+4cm)
14	甕	16.0	23.5		ABC	A	にぶい橙	35%	No131 床面
15	甕	23.6		(5.8)	ABCJ	A	にぶい黄	25%	No21,73,121 床面
16	壺		14.2	(10.8)	ABCE	A	浅黄橙	25%	No68 床面

B区第78号住居跡(第192・193図)

E-12区に位置し、住居南東部を第79号住居跡に切られていた。形態は長方形を呈し、規模は長軸5.04m、短軸3.44m、深さは20~25cmである。主軸方位はN-1°-Eを示す。

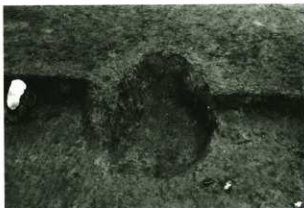
床面はほぼ平坦である。覆土は基本的に上下2層に分かれ(第1・2層)、下層にロームと焼土が少量に含まれていた。

カマドは北壁に位置する。壁を55cm切り込んで構築され、規模は長さ1.20m、幅70cmである。底面は床面下20cmを測り、鍋底状に掘り込まれていた。覆土は11層に分かれる。第II~IV層、第VI~IX層は天井部及び袖の崩落土、第V層と第X層は灰層に相当するかもしれない。袖はほとんどが流失し、基底部のみ残存していた(第XI層)。

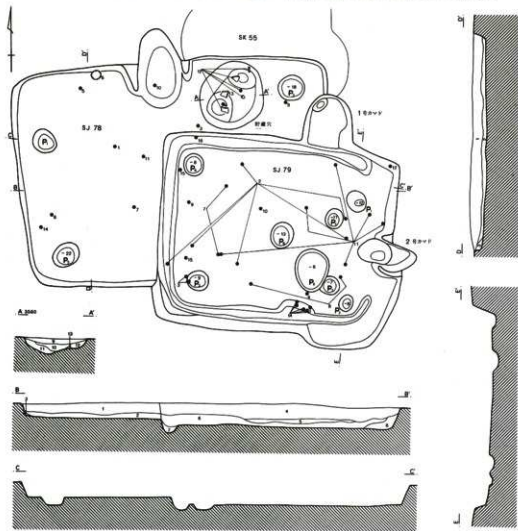
貯蔵穴はカマドの東側に隣接して設けられていた。形態は楕円形を呈し、規模は長径1.10m、短径1.01m、深さ20cmである。底面の両隅はビット状に10~20cm掘り下げられていた。

ビットは3本検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>は深さ16~21cmを測り、何れも遺構に伴うものと推定される。

出土遺物には土師器と須恵器がある。出土数(口縁部破片数)を示すと、土師器は坏が10点、以下碗1点、甕12点、小形甕4点、壺1点、須恵器は坏が6点、蓋1点、甕1点、飯1点、コップ形(底部)1点となる。土師器坏(第194図1~5)は、模倣坏系の比企型坏(1)、北武藏型



环(2)と統比企型环(3~5)がある。柄(6)は口唇部に沈線、内外面にはヘラミガキが施され、底部は平底風となっている。3の环と6の柄は硬質な焼き上がりと比較的緻密な胎土は共通している。土師器甕(10)は武藏型甕の系譜に連なるものであるが、欠損部位があり口縁部の傾きは推測の域をでない。須恵器环は大振りのもの(8)とやや小振りのもの(9)がある。何れも底部は丸底風となるものであろう。12は甕と考えられる。口唇部に平坦面を作りだし、胴部には弱い沈線が巡る。15のコップ形土器と7の蓋は混入であろう。出土遺物は稲荷前V期に主体を置くものとする。

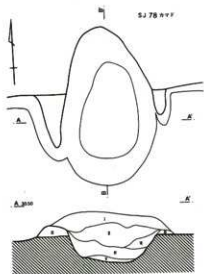


- |         |                              |
|---------|------------------------------|
| 1 黒褐色土  | ローム粒子・焼土粒子と白色粒子を少量含む。        |
| 2 暗褐色土  | ローム粒子と焼土粒子を多量に含む。            |
| 3 暗黄褐色土 | 多量のローム粒子と少量の焼土粒子を含む。         |
| 4 暗褐色土  | 少量の焼土粒子と多量のローム粒子を含む。         |
| 5 黒褐色土  | ロームブロックを霏降り状に含み、焼土粒子を少量混入する。 |
| 6 黒褐色土  | 多量のローム粒子と少量の焼土粒子を含む。         |
| 7 暗灰褐色土 | ローム粒・焼土粒少量含む。                |
| 8 褐色土   | 多量の焼土粒子と少量のローム粒子を含む。         |

- |          |                               |
|----------|-------------------------------|
| 野藏穴      |                               |
| 9 暗褐色土   | 少量の焼土粒子・ローム粒子と微量の炭化物含む。       |
| 10 暗褐色土  | 多量のローム粒子と少量の焼土粒子を含む。          |
| 11 暗黄褐色土 | 焼土粒子・焼土小ブロックと微量の炭化物を含む。       |
| 12 黒褐色土  | ロームブロックを霏降り状に含み、少量の焼土粒子が混入する。 |
| 13 暗黄褐色土 | ローム質土。                        |

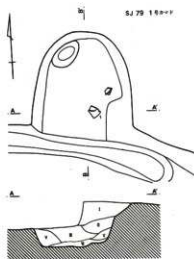
第192図 B区第78・79号住居跡





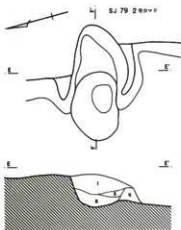
S J 78 カマド

- I 黒褐色土 粘土・ローム粒子と焼土粒子を少量含む。
- II 褐色土 多量の粘土粒子とローム粒子と、少量の焼土ブロックを含む。
- III 暗褐色土 褐色粘土を露降り状に含み焼土ブロックとローム粒子が混じる。
- IV 暗褐色土 粘土は比較的少く焼土粒子とローム粒子が多量に含まれる。
- V 黒褐色土 焼土粒子とローム粒子を少量含む。
- VI 灰褐色土 褐色粘土を主体としローム粒子と焼土粒子を少量含む。
- VII 灰褐色土 褐色粘土ブロックが主体で焼土を含む。
- VIII 赤褐色土 焼土ブロックを主体に褐色粘土が混じる。
- IX 灰褐色土 焼土ブロックと焼土粒を極めて多量に含む。
- X 黄褐色土 焼土粒子を少量含む。
- XI 褐色土 褐色粘土を主体にロームブロックと焼土粒子を含む。



S J 79 第1号カマド

- I 暗褐色土 少量の焼土粒子とローム粒子を含む。
- II 黄褐色土 ローム質土を多量に含む。
- III 褐色土 多量の灰褐色粘土と少量の焼土ブロックを含む。
- IV 褐色土 多量の粘土ブロックと焼土ブロックを露降り状に含む。
- V 暗褐色土 焼土ブロックと暗褐色土が混在する。灰褐色粘土ブロックを少量含む。
- VI 暗褐色土 焼土粒子と炭化物粒子を少量含む。ローム粒子の混入が比較的多い。
- VII 黒褐色土 少量のローム粒子と焼土粒子を含む。

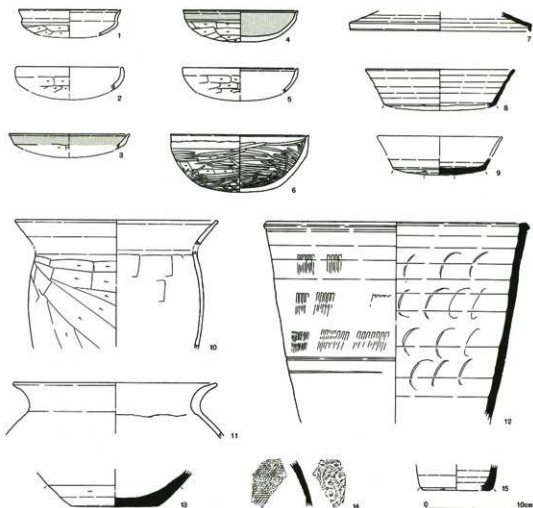


S J 79 第2号カマド

- I 褐色土 多量のローム粒子と小粒、少量の焼土粒子を含む。
- II 暗褐色土 褐色粘土ブロックを露降り状に含む。焼土粒子の混入は比較的少ない。
- III 暗褐色土 多量の褐色粘土と焼土ブロックを含む。少量のローム粒子が混じる。
- IV 茶褐色土 少量の焼土粒子と炭化物粒子を含む。
- V 黄褐色土 ロームと粘土粒子を多量に含む。上面に炭化物粒子と灰が堆積する。
- VI 褐色土 褐色粘質土を主体とし、ローム粒子と焼土粒子が混じる。

0 1m

第193図 B区第78・79号住居跡カマド



第194図 B区第78号住居跡出土遺物

B区第78号住居跡出土遺物観察表(第194図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(10.6)	2.7		AB	B	橙	20%	No24 覆土(+8cm) 無彩か
2	坏	(11.0)	2.6		BE	B	にぶい黄	5%	No213 覆土(+10cm) 北武藏系
3	坏	(12.6)	1.6		ABC	A	にぶい黄	5%	No34 覆土(+12cm) 赤彩
4	坏	12.0	3.3		ABC	A	にぶい黄	100%	No236 貯穴内(-20cm) 赤彩
5	坏	(12.0)	2.6		ABC	A	にぶい黄	10%	No97 覆土(+7cm) 無彩
6	椀	14.5	6.0		ABC	A	にぶい黄	100%	No222 床面 体部内外面ミガキ
7	蓋	(18.8)	2.0		AC	B	灰白	10%	No93 覆土(+17cm)
8	坏	(15.6)	4.0	(10.8)	ABC	A	青灰	10%	No145 覆土(+7cm)
9	坏		1.8	(9.6)	ABC	A	灰白	25%	No60 覆土(+5cm)
10	甕	(21.0)	12.8		ABE	A	にぶい黄	15%	No190 カマド内覆土(+19cm)
11	甕	(21.2)	5.7		AH I	A	橙	20%	No152 床面
12	瓶	(27.2)	22.0		ABC	A	灰白	30%	No209,213 貯穴内覆土(-3~+13cm)
13	小形壺	(18.8)	2.0		AC	B	灰白	10%	No210 覆土(+4cm)
14	甕				AB	A	灰		No11 覆土(+10cm)
15	埴形		2.8	(7.0)	BC	A	灰	25%	No158 覆土(+12cm) 埴型土器

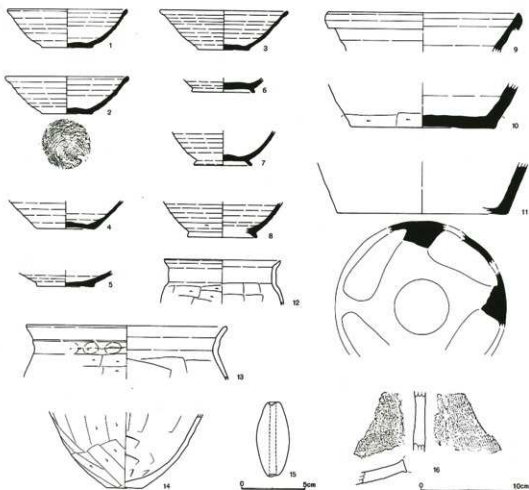
Ｂ区第79号住居跡(第192・193図)

E-12区に位置し、第78号住居跡を切って構築されていた。基本形態は長方形で、南東コーナー部分が外側に張り出していた。規模は長軸3.90m、短軸3.10m、深さ30cmを測る。主軸方位はN-5°-Eを示す。

床面は概ね平坦である。覆土は5層に分かれる(第4～8層)。第4～6層にはローム粒子、またはロームブロックが多量に含まれ、人為的に埋め戻された可能性が高いものと考えられる。

カマドは2基検出された。第1号カマドは北壁に位置し、壁を約70cm切り込んで構築されていた。底面は平坦で奥壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は7層に分かれ、第Ⅲ～Ⅴ層が天井部崩落土と思われる。第Ⅵ層が灰層に相当しよう。壁内の袖は全く痕跡を留めていなかった。

第2号カマドは東壁に位置する。規模は焚口から先端部までの長さ90cm、燃焼部幅45cmを測る。燃焼部は壁内にあり燃焼部奥壁は急角度で立ち上がる。覆土は6層に分かれる。第Ⅱ～Ⅳ層が天井部崩落土であろう。第Ⅴ層は掘方で上面が火床面と考えられる。袖は褐色粘土を主体に構築されていたが遺存状態はあまり良くない(第Ⅵ層)。カマド南側の張り出し状施設は第2号カマド構築時に



第195図 B区第79号住居跡出土遺物

設けられたものと推定される。袖の有無や覆土の状態から、2基のカマドは同時併存したものではなく第1号カマドから第2号カマドに付け替えられたものと考えられる。

ピットは8本検出されたが、支柱穴は明らかにできなかった。P<sub>3</sub>は上面で検出されており住居よりも新しい段階の所産である。

壁溝は東壁部の第2号カマド周辺を除いて巡っていた。南東コーナーの張り出し部には存在しないことから住居構築段階に設けられたものと推定される。

出土遺物は土師器、須恵器、瓦、土錘と鉄滓がある。土師器は甕が口縁部破片数で7点、小形甕2点、須恵器は坏・碗が29点、高台付碗1点、皿1点(底部)、甕2点、甌1点、壺1点が出土した。須恵器坏(第195図1~3)は底部が口径の1/2を大きく下回り、体部は直線的に開く。口径は12.4~13.4cmとやや大振りである。土師器甕(13・14)は所謂「コ」の字甕の采譜を引くが形態は崩れ、胴部の器壁は厚い。底部外面には砂が付着し削りは施されない。15は土錘。長さ5.8cm、重量35g、孔径0.5cm。平瓦(16)は小形製品である。凹面はナデ、凸面には平行叩き整形されている。側端面はヘラケズリ後ナデ。床面から出土した。鉄滓は鍛冶滓である。須恵器坏と土師器甕の様相から稻荷前XIV期に比定される。

B区第79号住居跡出土遺物観察表(第195図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	産地	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	(12.4)	4.0	5.4	ABC	A	灰白	25%	No116 1号カマド内 底部回転糸切り
2	环	12.8	3.9	5.2	ABC	A	オリーブ	80%	No36, 37他 覆土(+3~28cm)
3	坏	(13.4)	4.1	5.4	ABC	C	灰白	20%	No135, 137 P <sub>3</sub> 内覆土(-3cm)
4	碗		2.9	6.0	ABC	B	灰白	40%	No125 覆土(+7cm) 底部糸切り
5	皿		1.7	5.9	ABC	B	灰白	30%	覆土 底部回転糸切り
6	高台坏		1.5	6.4	AC	A	におい	80%	カマド覆土 底部回転ヘラケズリ
7	高台碗		3.6	6.0	AC	D	浅黄橙	40%	No109, 124 覆土(+8~10cm)
8	碗		3.7	7.2	ABC	B	灰	30%	No75, SJ71-No179 覆土(+8~24cm)
9	甕	(20.0)	4.1		ABC	A	灰	5%	No15 覆土(+8cm)
10	甕		4.7	(15.0)	ABC	A	オリーブ	25%	No111 覆土(+9cm)
11	甌		5.4	(18.0)	ABC	A	灰	30%	No52, 70他 覆土(+3~30cm)
12	小形甕	(12.2)	4.6		ABE	C	橙	20%	No48 覆土(+15cm) 武蔵型
13	甕	(21.0)	5.6		ABE	A	橙	15%	カマド覆土 武蔵型甕
14	甕		7.9	3.8	ABE	B	灰褐	35%	No126, 127他 覆土(+2~7cm) 底部砂底
15	土錘				ABCE	A	におい		No122 床面 長さ5.8, 最大厚2.6cm
16	平瓦				ABC	A	灰		No106 床面

B区第80号住居跡(第196・197図)

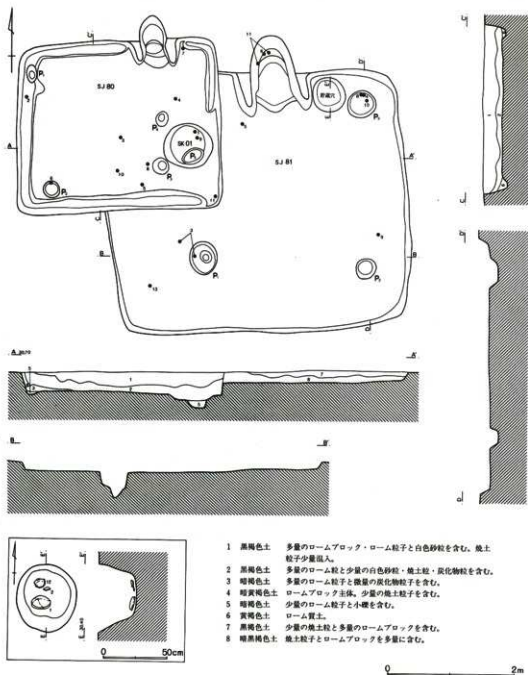
E-12区に位置し、第81号住居跡を切って構築されていた。形態は長方形を呈し、規模は長軸3.14m、短軸2.68m、深さは30cmと比較的深い。主軸方位はN-3°-Wを示す。

床面はほぼ平坦である。覆土は6層に分かれる。壁際の一次堆積土(第3・4層)を除くと基本的には上下2層となる(第1・2層)が、何れの層にもロームの混入が多いことから人為的に埋め戻された可能性が高いものと推定される。

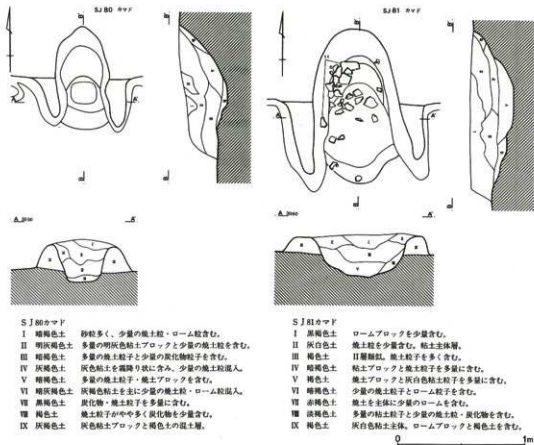
カマドは北壁に位置し、壁を約40cm切り込んで構築されていた。規模は焚口から先端までの長さ

80cm、燃焼部幅44cmで、底面は床面から15cm掘り込まれていた。燃焼部奥壁はかなり急角度で立ち上がる。覆土は9層に分かれ、第I層は住居埋土、第II～VI層は天井部及び袖の崩落土と思われる。第VII層は灰層に相当しようか。袖の遺存状態は比較的良好で、ロームと褐色土混じりの灰白色粘土で構築されていた。

ピットは5本検出されたが、支柱穴に相当するものは認められなかった。また、住居内に土壌が



第196図 B区第80・81号住居跡



第197図 B区第80・81号住居跡カマド

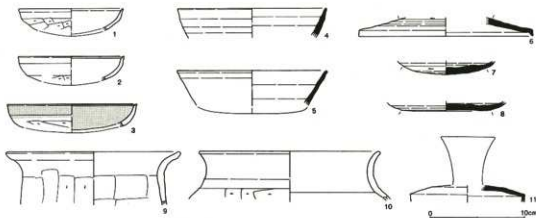
1基(SJK01)検出され、埋土の状態から住居に伴うものと考えられた。土壌下面下のピット(P<sub>1</sub>)は住居よりも古く、重複する第81号住居跡の柱穴となるかもしれない。

壁溝はカマドと東壁南半を除いた部分に巡り、規模は幅25cm、深さ5cm程である。

遺物は土師器と須恵器が少量検出された。

器種毎の出土数を示すと、土師器は環が口縁部破片数で4点、柄1点、甕3点、小形甕1点、台付甕(脚部)1点、壺2点、須恵器は環が4点、蓋2点、長頸瓶1点となる。土師器環(第198図1~3)は口縁部内面に沈線が巡り、赤彩されるものがあるなど、比企型環の影響を認めることもできるが、器形的には浅皿風となっており、もはや比企型環と呼ぶのは難しい土器群である。4・5は須恵器の環口縁部、7・8は底部片である。7は丸底、8は平底風で何れも底部は全面回転ヘラケズリ調整される。11は小形の長頸瓶と思われる。肩部は鋭く屈曲する。出土土器は破片資料であるため確実とは言いかねるが、概ね稲荷前V期を主体とした土器様相と考えられる。





第198図 B区第80号住居跡出土遺物

B区第80号住居跡出土遺物観察表(第198図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	10.9	2.3		ABC	A	にひい	20%	No.26 床面 無彩
2	坏	11.0	2.6		BC	A	にひい	5%	No.53 床面 無彩
3	坏	13.5	2.4		B	A	にひい	15%	No.35 床面 赤彩痕僅かに残る
4	坏	15.6	3.1		ABC	A	灰	10%	No.15 覆土(+32cm)
5	坏	15.8	3.7		ABC	A	緑灰	5%	No.32 覆土(+25cm) 口径不確定
6	蓋	(18.3)	2.0		ABC	A	灰	15%	No.52 P <sub>5</sub> 内(-3cm)
7	坏		1.5		ABC	B	灰白	95%	No.61 床面
8	坏		1.0		ABC	A	灰	30%	No.31 覆土(+16cm)
9	甕	(17.8)	5.6		AC	A	にひい	20%	No.21 覆土(+16cm) 口縁部歪みあり
10	壺	18.8	5.1		ABC	A	橙	15%	No.34 覆土(+14cm)
11	壺		1.8		ABC	A	灰	20%	No.24 覆土(+12cm)

B区第81号住居跡(第196・197図)

E-12・13区に位置する。住居北東部を重複する第80号住居跡に切られていた。形態は長方形を呈し、規模は長軸4.76m、短軸4.00mで、深さは15cm程である。主軸方位はN-2°-Wを示す。

床面はほぼ平坦である。覆土は上下2層に分けられるが(第7・8層)、何れの層にもロームブロックが多量に含まれ、人為的に埋め戻された可能性がある。

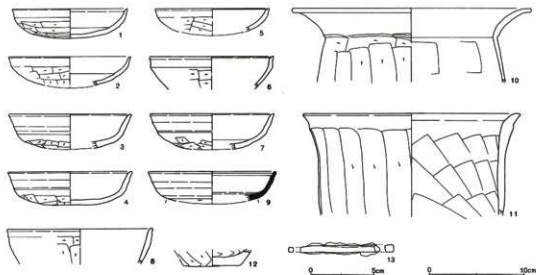
カマドは北壁に位置し、壁を55cm切り込んで構築されていた。規模は焚口から先端までの長さ1.20m、焚口幅60cmで、底面は床面から20cm掘り込まれていた。覆土は9層に分かれ、第1層は住居埋土、第Ⅱ～Ⅴ層は天井部崩落土であろう。袖の遺存状態は良好で、ロームブロックと褐色土混じりの灰白色粘土で構築されていた。

貯蔵穴はカマド東側に接して設けられていた。形態は円形を呈し、規模は長径52cm、短径48cm、深さ30cmを測る。底面より僅かに浮いた位置から、伏せた状態の土師器坏(第199図)が出土した。

ピットは3本検出された。何れも住居に伴うものと考えられるが、全て主柱穴となるかどうかは不明である。また、第80号住居跡P<sub>5</sub>は本住居の柱穴となる可能性もある。

出土遺物は土師器、須恵器と鉄器がある。出土数を示すと、土師器では坏が口縁部破片数で17点、

碗2点、甕3点、瓶?1点、壺(底部)2点、須恵器では坏が2点、甕胴部2点となる。土師器坏は統比企形坏(第199図1・2・5・6)、模倣坏?(3・4・7)と模倣坏系の比企型坏の小片がある。須恵器坏(9)は口縁内面に沈線が巡り、丸底風の底部は回転ヘラuzzi調整される。11は武藏型甕の糸罫に連なるもので口縁部が長く外反し胴部は縦方向のヘラuzziが施される。13は鉄釘と思われる。残長6.2cm。本住居は土器様相からみて稲荷前V期に比定されるものと考えられる。重複する第80号住居との時期差を長く見積もることはできず、土層堆積からみてもおそらく直接的に建替えられた可能性が高いものと推定される。



第199図 B区第81号住居跡出土遺物

B区第81号住居跡出土遺物観察表(第199図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	坏	12.1		3.1	ABC	A	におい	100%	貯穴No1 (-28cm) 無彩
2	坏	(12.8)	3.0		AB	A	におい	15%	貯穴No3 (-27cm) 無彩
3	坏	(12.8)	3.5		ABE	A	橙	30%	No2, 4 覆土(+6~32cm) 無彩
4	坏	(13.0)	3.5		ABE A	A	橙	30%	No38 覆土(+11cm) 無彩
5	坏	(12.0)	2.4		B	A	におい	10%	No23 覆土(+9cm) 無彩
6	坏	(13.0)	3.4		BC	A	におい	5%	No28 覆土(+8cm) 無彩
7	坏	(13.0)	3.7		ABE	A	におい	25%	貯穴内覆土 無彩
8	碗	(15.0)	3.7		ABC A	A	におい	5%	No65 床面 無彩
9	坏	(13.4)	3.1		ABC A	A	灰白	15%	No28 覆土(+8cm)
10	甕	(25.0)	7.7		ABE I	A	橙	20%	P <sub>3</sub> -No2 覆土(+6cm)
11	甕	(22.6)	10.7		ABC	A	におい	30%	カマドNo26, 33
12	甕		1.7	6.0	ABE I	A	におい	90%	No2 貯穴内(-26cm)
13	鉄器								No8 覆土(+9cm) 鉄釘か

B区第82号住居跡(第200図)

F-12-13区に位置する。形態は長方形を呈し、規模は長軸3.40m、短軸3.06m、深さは最深部で30cmを測る。主軸方位はN-15°-Wを示す。



床面はかなり凹凸が顕著で一定していなかった。覆土は黒褐色から暗褐色土を基調に構成されているが、堆積環境に関しては明確に捉えることはできなかった。

カマドは2基検出された。北壁に位置する第1号カマドは壁を55cm程切り込んで設けられていた。袖は残存していなかった。

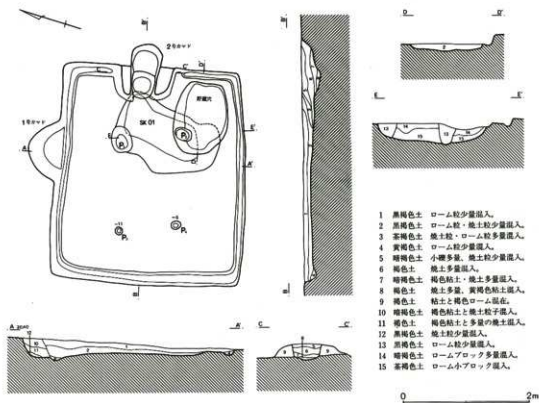
第2号カマドは東壁に位置し、壁を40cm切り込んで構築されていた。焚口から先端までの長さは86cm、燃焼部幅は48cmで、底面は焚口付近が最も深く、床面から約10cm掘り込まれていた。覆土は第6・7層が天井部崩落土、第8層は掘方かもしれない。袖は褐色土混じりの粘質土で構築されていた(第9層)。袖の遺存状態と土層堆積から第1号カマドから第2号カマドに付け替えられたものと考えられる。

貯蔵穴は2号カマド南側に設けられていた。形態は楕円形を呈し、規模は長径112cm、短径86cm、深さ10cmを測る。

ピットは4本検出されたが住居に伴うかどうかは明確にできなかった。また、2号カマド前面から貯蔵穴にかけて土壌が1基検出された(SK01)。ロームブロックが多量に含まれ(第14・15層)、住居の掘り方の可能性があろう。

壁溝は2号カマドを除いて全周していた。幅は20~30cm、深さは5~10cmである。

遺物は全く検出されなかったため、時期は明らかにできない。



第200図 B区第82号住居跡